イレギュラーズ・アルペジオ　the last　ビヨンド・ザ・ロウズ

☆あらすじ

西暦二〇〇一年十二月二十四日、午後一〇時二分。史上最強の魔神テュフォーンが、突如天界に襲撃をかけた。あらゆる神々や英雄がその撃退にあたったが、一人として敵う者はいなかった。

襲撃から実に二十八分が経過した午後一〇時三〇分、神々は最高の栄誉を与えられた英雄――星座の英雄たちを、天界に呼び戻す決断をした。結果、三日三晩続いた昼夜問わずの壮絶な死闘により彼らはテュフォーンを撃退したが、夜空に浮かんでいたほとんどの星座はその姿を消すこととなった。不死身のテュフォーンを探し出して完全に封印するため、英雄たちはそのままテュフォーンを追ってあらゆる世界・時間・場所に転生したのだ。

夜空からほぼ全ての星の瞬きが消え去ったこの事件は、事情を知らぬ人界では後に『英雄たちの聖夜遠征（ヒーローズ・エクスペディション）』と呼ばれることとなる。

それから十五年。テュフォーンの息子・怪原理里（かいはら りさと）（リザードマン）は、普通の高校生としての生活の傍ら、父を探す英雄たちとの戦いに明け暮れていた。恋人の折召紫苑（おりむね しおん）（オリオン）を戦いで失い、意気消沈していた中で出会った最強の敵・邪眼地獄（じゃがん へる）（ペルセウス）をどうにか倒し、真の姿『ラードーン』へと進化した理里の前に現れたのは、先代の天界の支配者・クロノスだった。「この世界を変えないか」というクロノスからの革命の誘いを断った理里は、それからクロノスに敵視されることとなってしまったが……特に彼の日常に変化はなく、不穏なことといえば、理里をストーキングする同級生・公領真龍（くりょうまろん）に悩まされる程度だった。

だが、最後の戦いの刻は、着々と近づいているのだった。

★

「それでは。おやすみなさいませ、お嬢様」

「ええ。おやすみなさい」

葉桜が目立ち、気の早い鯉がそろそろ空を泳ぎ始める四月下旬。数多の使用人の中でも古参の一人が一礼するのに、上品に返して、公領真龍は自分の部屋の扉を開けた。

明日は日曜日。よって、学校の準備をする必要は無い。すぐにこの豪奢な天蓋付きベッドに入れるわけだ。

何をしようか……特にすることもないので、ゆったりと勉強でもして過ごそうか。それとも……

（怪原くんを観察しに外に出るのも、いいかもしれませんわね）

課題などはすぐに片づけられる。それよりも、人生の課題に取り組む事の方がよほど重要だ。

怪原理里という人間を、自分の世界の中に、より精緻に再構築し、永遠に彼と共に生きること。それこそが真龍の人生の目的。

……だったのだが、

（でも……このところ、怪原くんを実際に見ていないと、なんだか物足りないですわ……）

そう。そうなのだ。現実など低俗、心象風景こそ人間がたどり着くべき高次元の世界……というのが真龍の信条だったはずなのに、このところ、彼を想像するだけでは満足できなくなってきているのだ。彼のことを考えるだけで心が疼く。『胸がチクチクする』というありきたりな表現の意味を、身を持って知り始めていた。

『それが人間の正しい姿なのだよ、マロン』

心の中に響く、男性の渋い声。もちろん、真龍の中の理里のものではない。彼はこんなに低い声じゃない。

「……おじさま」

物心ついた時から真龍の心の中に住んでいる、おじさまの声だ。
「そうでしょうか？　やはりわたくしには、心の中の世界の方が真理であるように思えますわ。何でも思い通りになりますし、これほど美しい世界はございません」
『それはそうかもしれないが……それは、真理とは別のものだよ。いいかい、マロン。この世には大きく分けて四つの世界がある。魂が生まれてくる精霊界、この人界、死者が行く冥界、神々の住まう天界の四つだ。死して肉体を離れた魂が心象世界として独立するというのは、この理から外れたことなんだ』
「でしたら……わたくしは、心の中という天国には、たどり着けないというのですか!?　それは……」
それは、あまりにも残酷です。わたくしが行きたいのは、凡俗の魂が集まる冥界などではないのです。全てがわたくしによって選ばれた、わたくしの理想だけが存在する世界だというのに。
『ああ、それは不可能だ……と、言いたいのだが』
「？」
真龍の慟哭を他所に、彼は言葉を濁した。
「もしかして……行けるのですか？　わたくしの理想の世界で、永遠に過ごすことができるのですか？」
『いや。もしかするとできるかもしれない、というレベルだが。前にも言ったと思うが、君の心象世界は桁違いだ。想像力豊かな小説家や漫画家でも、これほどの絶景は持ち合わせていない。完全に、魂の中に存在するひとつの世界として確立してしまっているんだ。
君は、異能力者である可能性が高い。「自分の中に完全な世界がある」という、ひとつの異能だよ。本来、心象風景というのは、いくつかのものが泡沫的に生まれたり消えたりして、確実な一つというものはあまり存在していない。あったにしてもせいぜい「風景」が限界だ。だが、君のものは「世界」だ。あまりにも大きすぎるんだよ。生まれたり消えたりすることもない。全てが一つの世界の中で起こっているんだ。これは、驚くべきことなんだよ。もし君が望むなら、「この世界に存在する別の世界」として、君が存続し続けて、その中に君の意識が永遠に生き続けることも、不可能ではないだろう。魂とは『絶対にして永遠』なのだから』
「本当ですか!?　それならば、わたくしの幸せは確定したも同然ですわね！　……いや、そうではなくて……」
そうそう、今悩んでいるのは、『現実の理里くんが欲しくて仕方ない』ということでした。心象風景こそ至高であるのに、なぜ現実を求めてしまうのか。
それを問うと、彼は答えてくれた。
『その問いは、実に嬉しい限りだよ。たとえ君がひとつの世界として確立できるとしても、今君が生きているのは、人界に他ならないのだからね。彼岸（ひがん）に全てを求めてはいけない。大事なのは此（し）岸（がん）で、いかに生きるかなのだよ。この日この時に、この世界で幸せになることが重要なんだ。ほら、君も薄々勘付いているんじゃないかな？　ひとりで空想にふける時間は、確かに楽しいものだけれど、なんとなく普通の楽しみから外れているんじゃないかって』
「それは……」
否定はできなかった。この楽しみは、誰とも分かち合えるものじゃない。自分だけしか幸せになれない。それは……それは、なんとなく寂しいな、とも。
『君は、今この世界で、理里くんと幸せになりなさい。たとえその後ひとりになるとしても、ひとつの世界になってしまうとしても、その記憶が、きっと君の世界をもっと豊かにするだろう。……それじゃ、おやすみ』

それきり、彼は黙ってしまった。
（この日この時に、この世界で幸せになる……ですか）
そう……確かにそうですわ。準備期間としては、この人生は長すぎると思っていました。でも、今この瞬間も、わたくしという人間の歴史の一ページだということを、すっかり忘れていました。
歴史というのは、多くの人間が全力を注いで、命を賭けて紡いできたものです。自分の歴史を紡ぐのには、何よりも全力を賭して向かわなければならないではないですか。わたくしが、そんな重要なことを、これほど長い間失念していたとは。
もちろん、心象世界に行きたいという理想は変わりませんが。
（もう少し、今を生きてみてもいいかもしれませんわね♪）
公領真龍の中で、何かが変わった、一夜のことだった。

★

（ふう……もう、寝付いたか）
真龍の中に住む男は、その世界にある森に建てた、小さな小屋で、ひとり達成感に笑顔がこぼれる。
きっと、自分の子どもたちとも、こんな会話をする機会があったのかもしれない。真龍は自分の子と同じようなものだと考えているが、彼女には彼女の両親がいる。やはり……自分の子どもを、再び可愛がりたいという気持ちもある。
それが果たして許されることなのかは分からない。でも……いつの日か、そんな瞬間が訪れるのを待って、男は生きるのだ。
（……にしても）
彼女に、『異能力者である』と伝えたのは、少し早計だったかもしれない。彼女の異能は、私の目から見ても、あまりに強すぎる。『自分の中に完全な世界を持っている』というのは嘘じゃない。だが、彼女の異能はそれだけではない。

あれは、その世界の中にあるものを、現世に取り出す力。生命の創造だって不可能じゃない。人の身には過ぎる、禁断の異能だ。使い方を誤れば、彼女はとてつもない外道に堕落してしまう。もっと人の何たるかを、あるべき姿を学んでからでなければ、あの異能を使わせるわけにはいかない。そのために私が異能を制御している面もある。
彼女がそれを使うに値する人間になるその時まで、この異能は封印しておかなくてはならない。その術式はすでにかけておいた。あとは、はずみで封印が解けないように監視しておかなくては。
……といっても、
（それほど、暇なことをできる立場でもいられなくなってきたな）
現界直後のクロノスを倒そうとしたが、思わぬ邪魔が入って奴は逃げおおせてしまった。それから四カ月。ついに、恐れていた事が、いやそれ以上のことが起きてしまった。
〝始原の五神（オリジナル・フィフス）〟のうち二柱の出現。加えて、魔王の加勢。クロノスが何らかの勢力を形成することは読んでいたが、まさかここまでの巨大勢力を味方につけていようとは。
革命の日は近い。奴らが大戦争を……第二次巨神大戦（ザ・セカンド・ティタノマキア）を起こしてしまったなら、世界は目も当てられない事態に陥ることになる。それだけは、絶対に避けなくてはならない。
「止められるのは、俺だけだ」
俺がこの世界に姿を現せば、それは即座にヘルメスの『全智の書』に記され、追っ手どもが押し寄せてくることだろう。だが、そんなことは関係ない。雑兵の百匹や千匹を潰すことなど造作もない。俺は俺のやるべきことをやるだけだ。
マロン。また、少し留守にするよ。今度こそ、もう戻って来られないかもしれない。
君には本当に世話になった。強引に住まわせてもらっていたが、

君の世界は心地よかったよ。君の事は、本当に娘のように思っていた。お別れの挨拶はできないが、君はきっと素敵なレディになるだろう。

自分の心の中にメッセージをまとめて、男は右手を宙にかざす。すると、その先の空間が渦を巻き、歪み、そしてひとつの孔(あな)が生まれた。

男はその孔を両手で広げ、ぐいっと押し通る。

その先にあったのは、豪奢な調度品に彩られた、真っ暗な部屋――真龍の自室だ。

「よっ、と」

音を立てずにベッドから飛び降りると、『出入り口』が閉じる。

そして、可憐な少女の寝顔。

「……さよなら、マロン」

男は、新たに生み出した空間の孔に消えていった。

★

翌朝八時。今日も真龍は、自転車に乗り、愛しい人を尾行する。

「はぁ……少し息切れしていらっしゃいますね、怪原くん……尊いですわ……これは、写真に収めておきませんと……」

愛用の小型カメラ（公領グループ特注）を取り出し、スコープをハンドルの中間に配置。ズーム全開。画面に映るその御姿(みすがた)を心ゆくまで堪能しながらも、シャッターを押す。

「……っと、いけないいけない。つい連写してしまいましたわ、うふふふ♪」

夢中で彼の写真を撮るこの瞬間。このひとときこそ至高。もしかすると、自分は写真家に向いているのかもしれない。

しかし、この３２ＧＢのメモリーカードも、そろそろ空きがなくなってきた。はじめ２ＧＢのものを買ったが１週間ともたずに使い切り、その反省をもとに大きめの容量のものを買ったのだが、これもダメだった。近所の家電量販店にはこれ以上のものは売っていないのでどうしようもない。

確かに、「もう少し今を生きてみよう」という心境の変化はあった。だが、理里をこっそりと観察するこの行為は、『彼を自分の心の中に確立させる』という目的を抜きにしても辞めることができなかった。

楽しい。楽しいのだ。バレないように身を隠し続けるスリルが。真龍の前では見せてくれない、無防備な表情がどんどんと露わになる様(さま)が。これをずっと楽しめるなら、彼の心なんていらない。自分はただ、陰から彼を見守る事さえできれば、それでいいのだ。

「ほんとーに、いいわけ？」

「ええ、もちろんですわ。だって今わたくし、こんなにも心が躍っているのですから……ひゃんっ!?」

いつの間にか、隣に何者かが立っていたことに、真龍は全く気付いていなかった。がしゃーん、と音を立てて自転車が倒れる。

「ど、どちらさまですのっ!?」

「はーん？」

慌てて振り向いた先にいた女性は、けだるそうな声で聞き返す。

真龍とは違って、明らかに地毛ではないブロンドのツインテール。日焼けサロンで焼いたらしい真っ黒な肌。ボタンが三つほど外されたブラウス、だらしなく羽織ったピンクのカーディガン、短すぎる紺のスカート。今どき珍しいルーズソックス、ラメがコーティングされているスニーカー……俗にギャルと呼ばれる人々らしき見た目。背は高く、百七十センチくらいはありそうだ。

これでもかとマスカラが盛られた、つけまつげ全開の目をぱちぱちさせて、ニヤニヤと笑いながら彼女は続ける。

「んな事はどーだっていいじゃん。それよりさ、そーんな陰気なことしてて楽しいわけ？　ほんとはあの子のこと、手に入れたいんじゃねーの？　このまんまだとあいつ、ずっとあの姉貴に捕らわれたままだよ？」
「ど、どうしてそこまで怪原くんの家の事情を知っているのですか！　あなたは、いったい誰なんですか！」
「質問に質問では返さなくない？　疑問文には疑問文で答えろって学校では教えてなくない？　さ、答えろよ」
挑発的に、どこかの殺人鬼のようなセリフを吐いて、謎のギャルは問いかける。
だが。真龍の答えは、もう決まっている。
「当たり前です。そもそも、怪原くんには決まった人がいるのです。その幸せを壊してしまうのは、相手の方にとっても不幸ですし、怪原くんに迷惑をかけることにもなります」
「その相手が……『もう死んでる』って、言ったらどうする？」
「っ**!?**」
真龍は目を見開く。
「そんな……シオンは、行方不明のはずでは**!?**」
「死んだよ。とっくの昔、あのオリオン座が空に戻ってきた日にな。それも、あんたのだぁーいすきな、りーくんに殺されたんだよぉ？」
「そんな……そんな、まさか」
嘘だ。嘘だ嘘だ、嘘だ。あのシオンが、死、それを怪原くんが、まさか、いやそんなことあるわけが、心中未遂？　いや、違う、違う違う違うの、有り得ません、あの怪原くんに限って
「信じられない？　じゃ、これ見な」
そう言ってギャルが取り出したのは、一枚の写真。真龍の顔に貼り付けるかのように、文字通り目と鼻の先に差し出されたそこには――
「な……！　嫌ああああああ！！！！」
真龍はその場を駆けだそうとする。しかし、
「**!?**」
息を吸いかけて。そこにあるはずのものが、無いことに気付く。
――息が、吸えない。
「――――、――――！」
声を出そうとしたが、声帯は震えているのに、聞きなれた音が出てこない。
「あー。言い忘れたけど、あんたの周り、『空気』無いから。安心しろ、殺しゃしねーよ。ちょーっと眠っててもらうだけだから……って、聞こえないか！　あっはははは！」
ギャルが何か楽しそうに笑っている。だが、笑い声も聞こえない。手を伸ばせば届くはずなのに、世界がそこにない。
あるのは、この苦しみだけだった。
『あぁっ……だず、げで、怪原、くん……――――』
ああ、だめ、助けを求めては、あれ、なぜ？　わたくしの愛する人に助けを求めるのがなぜいけないの？　だって今、わたくし、こんなにも苦しいのに、だめっ、迷惑、かけちゃ、ああ、でもっ、あなたが、あなたが、今すぐ欲しい――ひょっとして、わたくしはまちがっているの？　ああそうなんだ、好きな、ものは、手に入れ、なくちゃ、ずっと、こんなふうに、ひとり、くるしい、だけっ、ああ、いますぐっ、たすけてたすけてたすけて――っ――ざざ――ざざざ――ざざざざ――ぶつり。
がくん、と、真龍の身体から力が抜ける。
「……よーし、仕込みはこんなもんか」
意識を失った真龍を担ぎあげたギャルが手を地面にかざすと、ふわり、と、ギャルの身体は宙に持ちあがる。そのまま十メート

ル、二十メートル、三十メートルほど上昇して、
「さて、かーえろ。明日、たのしみだなーっ♪」
空に舞い上がったギャルは、真龍を右肩に乗せたまま、いずこかへと飛び去っていくのだった。

★

「えぇ～と、つまりぃ～、ここが筆者の言いたいことなんですぅ。とゆーわけで、問三の答えは～」
（ね、む、いっ……寝ちゃダメだ、寝ちゃダメだ、寝ちゃダメだ！）
真龍が謎の女に誘拐されてより二時間後、朝の十時ごろ。現在、県立柚葉高校二年四組では、おそらくこの学校内で一番の美貌と催眠能力を持つ女性教師・綾城心（あやしろはあと）による六時限目の現代文の授業が行われている。一列につき七人×六列のこの教室の、右から二番目の列のちょうど真ん中に座る理里の目から見ても、その惨状は明らかだった。
ざっと辺りを見回したとき、意識がはっきりしている生徒は、片手で数えられるほどしかいない。次に、うつらうつらどうにか睡魔と闘っている者が、理里を含めて数名。あとはてごわすぎる敵に敗北した屍の山。一年生のはじめのころは、「美人な先生だから頑張るぜ！」と意気込んでいた男子も多かったのだが、その勇士たちも、今や見る影もなくヨダレを垂らして爆睡している。
「はぁ～い、次は十二ページの四行目ですね～。ここ、赤ペンで線引いてくだ～い」
全ての元凶はこの声だ。なんというか、温かい太陽の光に包まれながら野原で日なたぼっこをしているように感じるというか、母の胸に抱かれる赤子の気分になるというか、不思議な安心感に包まれて、ぽわぽわと睡魔が湧きあがってくるのだ。

普段ならばこの睡魔には負けることがないはずの理里が、今必死でこの甘ったるい声の誘惑と戦っているのは、いつも真後ろの席から向けられているはずの視線が、珍しくそこにないからだ。
本来であれば、彼の後ろには公領真龍が座っている。熱烈な後方からの視線にさらされ、授業に全く集中できない……というのが普段の状況だ。が、その視線には、ある意味で緊張感を与えてくれ、授業中に寝ることはなくなったという、微妙なメリットもあった。
だが、彼女はどういうわけか、今日は学校を休んでいる。いつもなら理里の家の玄関の十メートル南の電柱の裏に彼女はスタンバイしていて、そこから尾行されるのだが、今日はその位置に彼女の気配がなかった。やっと心を入れ替えてくれたか……と、ちょっとした安堵もしたのだが、単なる欠席と分かって、それはそれで残念だ。
「……」
眠気覚ましに、くるくるとシャーペンをもてあそびながら、左手にはめた、俺にしか見えない、白地に黒の水玉のシュシュを見つめる。
……これを見るたびに、少し切ない気持ちになる。俺たちは、もう結ばれている。彼女がこの世からいなくなる寸前に、俺たちはお互いの思いを確かめ合った。互いが、『好きな人』だと認め合った。そして、彼女は俺の腕の中で、夜空に旅立っていった。
それから四カ月。オリオン座は、もう夕暮れすぐの時間帯にしか見られなくなってきた。夏になれば、サソリに怯えて、夜空にはもう出てきてくれなくなる。
あいつは、『待ってる』って、言ってくれた。だから俺も、いつかこの世界を後にするまで待つしかないんだ。あんなふうに彼女に会えることなんて、きっともう二度とない。俺はただ、夜空を

駆けていく彼女を、何億光年の彼方から眺めていることしかできない。彼女に向けて語りかけることはできても、彼女の優しい声は俺に届かない。

そして語りかけることができるのも、冬から春の中ごろまでの間だけだ。もう少しで、俺は彼女の姿を見る事さえ叶わなくなる。

（……くそっ）

笑顔がちらついた。星座の中、どこまでも続く大草原で見た、誰よりもきれいな笑顔。あと数百年、いや下手をすれば数千年、俺はこの笑顔を忘れずにいられるだろうか？　そして……どうしても彼女に届かない寂しさに、耐える事ができるだろうか？　もう、今でさえ耐えられそうにないのに。

思いが通じ合っているからこそ、それだけ思いは大きくなる。一度伝えてしまったら、何度でも、何度でも言いたくなる――

（……いや、待て。おい、嘘だろ）

そうだ。そういえば俺は、まだ一度も、彼女に「好きだ」って言ってない。『好きな人』とは言ったが、彼女の目を見て、直接愛を語ってない。

（――っ！　なんてバカなんだ、俺はっ！）

夜空の彼女に向けて語った言葉を必死で漁る。「会いたい」「寂しい」は何度も口にした。「お前が一番大切だ」くらいは言ったかもしれない。だが、何度探しても、「好きだ」も、「愛してる」も、出てこなかった。

こんなことに、なんで気付かなかったんだ、俺は。もはや前提条件と化していたからか。……バカだ、俺は。それじゃダメだろ。一番大切な言葉を、ここまできてもまだ言ってないなんて。

気付くのが遅すぎた。もう、顔を見て言うことはできない。

――けれど。

まだ、オリオン座は夜空にある。今夜もきっと現れる。その時こそ……この思いを、伝えたい。ずいぶんと遅くなってしまったけれど。これを逃せば、もう冬までおまえに話しかけることはできなくなる。その前に、一年分、いや一生分の『好きだ』を、おまえにぶつけたい。

たとえ答えが返ってこなくても。きっとおまえは微笑んでくれるから。だから……もしかすると制限時間は、あと数日間だけかもしれないけど。存分に、おまえを愛したい――

「は～い、じゃあ～、恋に悩める乙女みたいな顔してる怪原くん。答えて？」

「へぁ!?」

ゆる～い声が、唐突に俺を指名した。

「え、えっと、その」

「あら～、聞いてなかったかしら？　もしかして図星？　うふふ、青春ね～」

「っ……そ、そんなことありませんっ！」

女の勘の恐ろしさに震えあがりながら、理里は必死で教科書をめくるのだった。

★

同じころ。柚葉市役所近くの古いカフェ・『プラニスフィア』の窓際の端の席に、一組の男女が、やっとこさという様子で腰を下ろした。

「っはー、結構買ったわね！　心が満たされたわ！」

「そうか……オレの身体はボドボドだがな……」

長い黒髪を年齢錯誤なツインテールにした、気の強そうな背の低い女性。その向かいに座るのは、疲労感に満ちた顔の、背の高い総白髪の男……怪原家の長男、希瑠だった。

彼らのテーブルの下には、たくさんの紙袋が置かれている。全

て、この女性――神院優愛（かんにんゆめ）が、朝から希瑠を連れまわして、百貨店だのブティックだのをこれでもかと周って買ったものだ。
「……何よ。言いたいことでもあるわけ？」
「いや……お前さ……休みのたびに荷物持ちとしてオレを借り出すの、ホントにやめてくんない……」
「はぁ？　いっつも家でゴロゴロ寝ながらゲームしてアニメ見て漫画読んで2ちゃんにコメント書くしか能の無いクソニートに仕事を与えてやってるのよ？　しかも報酬は即日現物支給。本来あんたみたいなノミ虫はこんないい条件にはありつけないんだから、ありがたいと思いなさいよ」
「ごはぁ！」
希瑠は吐血しそうになる。この女、黙っていれば多少は美人なのに、その毒舌が全てをブチ壊しにしている。
「て、てめえ……いったいどこからそんなに流れるように罵詈雑言を吐きだせるんだ……暴言辞典かお前はっ……！」
「これだからド低能は困るわね。いい？　あんたはこの地球上で最も忌むべき人間のクズなのよ？　カースト制度で言えば非人（パリア）よ？奴隷（シュードラ）より下、マイナス方向に測定不能のランク外よ？そんな汚物に対してこれくらいの蔑みの言葉を投げかけるくらい誰だって造作もないわ」
「ピギィ！」
胸を押さえて頭をのけぞらせる希瑠。
「汚い声で鳴いてるんじゃないわよこの豚が……あっ、豚に失礼ね。じゃあ変態……ううん、変態に失礼だわ。ゴキブリ……ああ、ダメ。ボウフラ……いや、まだ失礼かしら」
「分かりました生きててすいませんでしたもうこれ以上いじめないで！　希瑠のライフはもうゼロよ！」
「ハッ。その分じゃ、『次回　怪原死す』ってところかしらね。……まあいいわ、今はこのくらいにしといてあげる」
希瑠がついに涙目になりはじめたところで、優愛は意地悪く笑い、やっと矛を収めた。
「せめて『今日は』って言ってくれ……」
「羽虫の声なんてきこえませーん。さて、何たのもっかなー」
撃沈した希瑠を気にも留めず、パラパラと優愛はメニューをめくり始める。
優愛の職業はパティシエール。怪原家がある住宅街の、東の隅っこのほうにあるケーキ店、「ディ・モールト」で働いている。その店の定休の毎週月曜日のうち、月の最後の日に、こうして希瑠とどこかに行くのが彼女の習慣となっている。
行くところは様々だ。水族館、ハイキング、時にはお城……だが、その中で最も希瑠にとって厳しいのが、今日のような『ショッピング』の場合である。
基本的に荷物は全て彼が持つことになる。そして、彼女はアホみたいに色々なものを買う。爆買いで話題の中国人ばりに買う。決して金遣いが荒いわけではないが、貯めておいて一気に放出するタイプなのだ。
ただでさえ莫大な荷物を持たされるというのに、加えて無限とも思える暴言まで飛んでくる。これが仕事なら仕事などいらぬ……と、希瑠がニートを続ける決意を日に日に固くしていく程度には、この定期イベントはハードなものだった。
「ちょっと、何抜け殻みたいな顔してんのよ。さっさと注文決めなさい」
「はーい、申し訳ございませーん」
棒読みで返して、メニューを眺めながら、別の事を考える。
優愛とは、高校のときの同級生なのだ。考えてみれば、オレは

八年間もこの毒舌を浴びせかけられ続けているわけだ。なかなかにタフだと思う。家に帰れば、珠飛亜からも同じような仕打ちを喰らうわけだし……。

顔を上げると、優愛は全力でメニューとにらめっこしていた。その様子が、なんとも子どもっぽくて、愛らしかった。

繰り返すが、別にこいつに対して恋愛感情は無い。顔はかなりいい方だとは思うが、こんなスルメみたいな身体のチビなんて、オレの女性の好みから完全に外れている。だが、小さいものを愛でる心は、誰にでも具わっているものだ。そういう点を含めて、オレはこいつを「妹のひとり」だと感じている。

「明日」なんていう、来るかどうかも分からないものになんて、これっぽっちの期待もしちゃいない。そんなものはいらないから、最高に面倒で、最高に幸せなこの地獄が、どうか永遠に続いてくれないだろうか――と、思っていたら。

「ナニ見てんのよ変態！」

「ぐぶわっ!?」

氷水が飛んできた。あれれー、おかしいよー？　オレ、ただこいつの顔を眺めてただけなんだけどなあ……いや、他意はないですよ。ほんとに。

★

その日の夕方。帰宅した理里は、手洗いうがいを超特急で済ませ、姉の珠飛亜を部屋から閉め出して制服を脱ぎすて、急いで部屋着に着替える。

窓の外を見る。空は少し暗くなり始めていて、宵の明星がまたたいていた。

だが、目当ての星座はまだ見えない。今の季節にもなれば、もう少し暗くなった頃にオリオン座は西に見えるはずだ。まだ、空が明るすぎるだけだろう。

「ねえー！　りーくん、もうはいってもいい!?」

「ん……ああ、ごめん、忘れてた。もういいぞ」

理里が許可を出すと、珠飛亜は無遠慮にガチャリとドアを開けて、部屋に入ってきた。

「まったく、りーくんも意外とシャイだよねー。わたしは別に、りーくんに着替え見られても何とも思わないのに。むしろ見てほしいくら」

「そこまでにしといてくれ……頭痛が……」

理里はこめかみを押さえる。そもそも部屋が共通（ここだけの話、寝床も共通）であるという時点でかなり精神にキているのに……これ以上醜態を晒さないでほしい……。

「んふふふ♪」

「……」

と、言っているそばから右腕に抱きついてきた。言っても無駄だと悟り、好きにさせておくことにした。

先ほど見たばかりだというのに、空が気になって仕方ない。もう彼女は現れただろうか。もう一度、外が見たい――

「えーいっ♪」

「っ!?」

窓の外に注意を向けた途端に、首に抱きつかれ、床に座らされた……というか、半分寝かされた。珠飛亜を背もたれにして、足を投げ出すような形だ。ちょうど、柔らかい胸が枕になって、落ちつく。はやっていた感情が、だんだんと穏やかになっていくのを感じる。

「……ふう」

理里は一息ついた。普段は迷惑このうえない珠飛亜の愛情だが……こういうときは、自分をクールダウンさせてくれる。

「どう？　おねえちゃんのからだ、あったかい？」
「……そうだな。すごく、あったかい」
密着する珠飛亜の身体は温かかった。物理的な温かさというのももちろんある。だが、それとは違った何か……もっと別の、感性的なところで感じられる温度が、理里を包んだ。
その体温に蕩かされ、理里がリラックスしきったころ、珠飛亜は、彼の頭を優しく撫でて問いかけた。
「……それで？　今日は、どんなお悩み？」
「っ……どうして、それを」
「だって、りーくんがあんなにスピード出すときは、だいたい何かよくないことがあったときだから」
「ハッ。珠飛亜には、かなわないな」
この姉は、俺の事に関してはなんでもお見通しだ。きっと普通の「姉」という存在よりは、良くも悪くも、弟のことをしっかりと観察してくれている。度が過ぎるのが玉に瑕だが。
「そうだなあ……できれば、あんまり言いたくないんだけどなあ……」
「だぁ～め。りーくん、約束してくれたでしょ？　さみしいときは、かなしいときは、おねえちゃんに甘えてくれるって」
「……そう、だな……」
そう……あれは、三か月前のこと。ペルセウスを倒したあと、力尽きた俺を迎えに来てくれた珠飛亜は、涙を流して俺に言った。
ちょっとくらい、甘えてほしい。もっとわたしを頼ってほしい。苦しみも、悲しみも分かち合いたい。
ニュアンスとしてはこんなところだったが……正直、いつも明るくて能天気な珠飛亜が、そこまで悩んでいるとは思わなかった。今まで「珠飛亜に心配をかけない」ことを目標としていた俺からすれば、目からウロコが落ちる思いだった。
そして、自分の間違った指針を恥じた。痛みをひとりで抱え込んではいけなかったのだ。それは自分を案じてくれるヒトに対して失礼なことだった。
だから、珠飛亜が俺に甘えてくれるように、俺も精いっぱい珠飛亜に甘えよう……と、考えを改めたのだった。
ならば今も、俺は甘えなくてはなるまい。世界でひとりだけの、世界で一番愛しい姉に。
「実は、さ。紫苑のことなんだけど」
「……ああ」
珠飛亜の声がにわかに低くなる。後ろから抱きつかれているので顔は見えないが、きっと眉間に恐ろしいほどの皺(しわ)が寄っていることだろう……だから話したくなかったんだ……。
でも、ここで言わなきゃ男がすたる。
「俺さ。あいつに、まだ一回も、『好きだ』って、言ってなかったんだ」
「ふうん……それで？」
先ほどまでとは一転、あからさまに珠飛亜は機嫌が悪い。まあ、生前の紫苑との仲は最悪だったから、当然と言えば当然のことだ。弟をとられるのが嫌だったのか、単に馬が合わなかったのか、真相は定かではないが。
少し委縮しながらも、理里は続ける。
「俺……あいつのこと、ほんとに大好きなのにさ。お互いに、『好きな人だ』って、認めあったのにさ。それだけで、ちゃんと気持ちを言葉にできてないんだ。だから……今はもう、会えないけど。せめて、夜空のあいつに、伝えたくて」
「……ふーん」
無感情な声色が返ってくる。
「だから、なんつーか、その……それで、今日は急いでました。

それだけ」
「ふーん」
「……あのさ。せめて、何かコメントくれないか」
「わたしはあの女とは永遠に分かりあえないもん。できることなら、絶対にあんなのにりーくんを渡したくないよ。でも、りーくんは、すきなんでしょ？　わたしがりーくんのことをだいだいだいだいだいだいだいだいだぁーいすきなくらいに、すきなんでしょう？」
「まあ……そう、だな」
　理里が顔を赤らめながら認めると、珠飛亜は、もう一度理里の頭を撫でた。
「だったら、どうしようもないよ。誰かをすきな気持ちをがまんするのって、いちばんつらいから。わたしのせいで、りーくんがつらいおもいをするのは、あの女とりーくんが結ばれるより、ずっといやだよ」
「珠飛亜……」
　附に落ちなさそうな声だった。でも、その言葉の裏に込められた愛は、本物だった。
「珠飛亜。大好きだよ」
「うふふ。おねえちゃんもだよーっ、んーっ♪」
　ぎゅーっ、と、珠飛亜は理里を再び強く抱きしめる。
　ちょっと常識が無くて、ちょっと愛情表現が激しすぎるけど……明るくて、いつも元気で、優しい姉。普段は邪険にしたりもするが、本当のところは、理里も彼女の事を愛しているのだった。
「……あ。そろそろ、星も見えるころじゃないかな」
　ふと窓の外を見た珠飛亜が、思い出したように告げた。
　そして、
「じゃ、がんばって。あのゴリラ女が昼寝してなきゃいいけどね」
　辛辣な皮肉と共に、その両腕を理里の身体から離した。
「ゴリラはないだろ……まあ、確かにあいつ筋肉ガッチガチのスタ〇ドみたいなの出せるけどさ……」
　少々の反論を残して立ち上がり、窓を開けて、わずかに身を乗り出す。いつものように、雲ひとつない西の空を眺めて――
　そこで、気がついた。
「……え？」
「なぁに？　どうしたの……えっ」
　理里の不穏な様子が気になった珠飛亜も、顔だけ窓から出して、辺りの空を見まわし、
　そして、目を見開いた。
「おい……ウソだろ……そんなっ……そんな、まさか」
　自分の目を疑った理里は、もう一度、見えうる限りの全天を見まわした。
　だが。そこには、ただ一つの星座も浮かんでいなかった。
「き……昨日までは、確かに、あったのにっ」
　八十八星座の内、現在までに夜空に戻っているものはたったの三つ。ペルセウス座、アンドロメダ座、そしてオリオン座だけだ。
　多少田舎であるためにまずまず星がきれいなこの柚葉市で、この時間帯に西の空に見えるのは、金星及びオリオン座。しかし、今、唯一見えるはずの星座は、そこにない。
「待って……待ってくれよっ……まだ……まだ言いたいことがあるんだよっ……紫苑……っ！」
「!?　りーくんっ！？」
　理里は、その場から逃げるように走りだす。乱暴に部屋のドアを開け、三階建てのこの家の最上階から、階段を駆け下りていく。
　こんな……こんなことが、あっていいわけがない。何の疑いもなく、今日もその姿が見られると信じていたのに。なぜ、なぜ今

日に限ってっ！
「りーくん？　どうしたの？」
二階を過ぎたあたりで、母さんの声が聞こえた。でも、今はかまってなんかいられない。
玄関のドアが見えてきた。ドリフトをかけるように靴箱の前で急停止して、スリッパを蹴飛ばして、急いでスニーカーに履き換える。
「我、帰還せり！　……？　兄上、どうかなさいましたか？」
ちょうど足に靴がフィットした頃に、ドアが開いた。不思議そうな顔で、次女の吹羅と三女の綺羅が見つめていた。
「――っ！」
無視して、ドアを跳ね飛ばすように家を出る。幸い、ふたりには当たらなかった。
駆けだした。目指すのはあの公園。紫苑と、ときどき学校帰りに寄ってひとやすみした、そして三か月前にペルセウスに敗北した、あの公園。
「あああ

「っ!?」
つまづいた。
時速八十キロで、身体が前方に投げ出される。
「がっ、ぐあっ、ごほっ……ぐぁっ！」
砂の上を転がって、ブランコの鉄の囲いに打ちつけられた。血を吐く。
「はあっ、はあっ、はあっ」
白龍（ラードーン）の身体は、こんなことで死にやしない。しかし、痛いものは痛い。
力が抜けた。
「……ハハッ」
もう、何も考えられない。「なんで？」だけが頭の中でずっとリフレインしていて、身体はとても痛くて、何が何だか分からない。
「ははっ。ははは。ははははは。あはははははははははは！！」
何もかもおかしくなってきて、笑いだした。いつだって俺は愚かだ。ああそうさ、全部俺が悪い。だから罰があたったんだ。なんて貧弱で、なんて自己中心的で、なんて怠惰な、この俺――
「……は？」
見上げた、星ひとつない夜空。その中を駆けてゆく、巨大な輝きに、理里は目を奪われた。
太陽が西の空から戻ってきたかのような、黄金の輝きを放つ彗星……いや、隕石に近い。とにかく信じられないほど大きな輝きが、南西……市内屈指の大きなグラウンドがある公園の方へと向かっている。
「……なんだ、ありゃ」
とてもまともな状態ではなかった理里の心が、一瞬空白になる。
「……いや、どうでもいいか」

しかし、結局、そんな超常現象さえ気にならないほどに、彼の精神は深く傷ついていた。
座り込んで眺めた、街灯の光に照らされた時計は、ちょうど午後六時を告げたところだった。

★

――八時間前――
天界、オリンポス山頂。最高神たるオリンポス十二神が暮らすこの宮殿の門前に、今、おびただしい数の英雄たちが集っていた。国籍・人種は問わず、共通するのは『正義の戦士』ということだけの、混沌とした人ごみである。
その中に、あまり事情が分からないまま、人ごみの中にぽつりと突っ立っている、背の高い水色の髪の少女がいた。
折召紫苑（おりむねしおん）。記憶を失ったままに現世に送りこまれ、しかし『怪物を倒さなくてはならない』という英雄としての本能だけを残されたがために、愛に命を落とした、英雄オリオンの生まれ変わり。
手持ち無沙汰で、辺りの英雄たちを見まわしてみる。屈強な男が多いが、女性の姿も少なくはない。
にしても、天界と冥界から可能な限りの人を集めたというのは本当らしい。ざっと見まわしただけでも数千人はいる。何が始まるというのだろう。ライブか何かか……いや、さすがにないか。
だが、もうひとつどうしても腑に落ちないことがひとつある。
それは、
（……なんだ、あの巨大戦艦……）
神殿の脇に鎮座まします、飾り気のない鉄色の、全長二百メートルはありそうなバカでかい戦艦。これでもかと大砲を積み、武骨で攻撃的な雰囲気が漂う。
あれは、いったいなんなのだろう……目が離せない。
まじまじと戦艦を観察していると、無機質な男性の声が後ろから聞こえた。
「オリオン……いや、折召さん。あなたも大変ですね、わざわざ星座から呼び戻されるとは」
「？」
キトンと呼ばれる古代ギリシアの衣服を身につけた、気難しそうな筋肉質の男性。天然パーマの茶色い長髪を悠々と神の城の風にたなびかせている。
「……あの、どこかでお会いしましたっけ……」
「ああ……確かに、この服装では分かりませんか。では、これでどうでしょう」
そう言うと、男は懐からヘアゴムとフレームレスの眼鏡を取り出して、髪を頭の後ろでまとめ、右手で眼鏡をかけた。
すると、
「えっ！？　確か、生徒会の」
「そうです、手塩御雷（てしおみかづき）です。まあ、直接話したことはありませんし。分からないのも当然ですか」
語る彼の顔に表情は無い。この生命感の無い雰囲気を、確かに紫苑は知っていた。
確か、彼は高校の一年先輩で、生徒会の副会長か何かをやっていた男だ。去年の秋ごろに、行方をくらましたという話があったが……。
「……！　まさか先輩も、リサに!?」
「リサ？　ああ、あのトカゲ男のことですか。ええ、そうですとも。反撃する暇もなく、左目の光で一瞬にして石にされ、絶命したのですよ。ミノタウロスを屠った英雄が、テュフォーンの息子とはいえ、一介の雑魚に敗れるなど。ふがいない話です」

「……ミノタウロス……それって、頭が牛で、身体が人間の？」
「ええ、そうですよ？　私の真の名はテセウス。自慢ではありませんが、ヘラクレスとペルセウスに並び、ギリシア神話の三大英雄に数えられる者です」
「はあ……」
前世の記憶も、神話に関する知識もないので、名を告げられてもピンとくるはずはない。だが、なんとなくすごい人だということは理解した。
「多少なりとも、私と貴方は現世で縁があった。そして、今回は共に闘う仲間です。ですので、あらためてごあいさつしておこうと思いまして」
「ああ、それはどうも……あっ、もう始まるみたいですね」
「神王ゼウスさまの、おなーりー！」
「ははーっ！」
噂をすれば何とやら。集った全ての英雄が跪く。
天使のトランペットが鳴り響く中、現れたのは、身長二メートルを超す大男。白く長い髭をたくわえた、壮年の男性。
「面（おもて）を上げよ」
拡声器もないのに、その声は広場全体に響き渡る。全員が、言われたとおりに顔を上げる。
「此度は、わしの号令に応じてくれたこと、嬉しく思う。じゃが、今はいかんせん時間が無い。なので主題から話そう。
――数時間前のことだ。あの、憎むべき最強にして最悪の魔神……テュフォーンが、人界に姿を現した」
「!?」
どよめきが起きる。
「……ついに、この時が来てしまいましたか」
紫苑の隣にひざまずいた手塩も、神妙な面持ちで眼鏡を掛け直した。
記憶がないために、事の重大さがいまいち実感できない紫苑が、戸惑いながらも問う。
「えっと……テュフォーンって、たしか、あたしたちが生まれた理由になった怪物……でしたっけ？」
「ええ、そうです。十五年前のクリスマス、奴は天界に二度目の襲撃をかけました。我ら英雄と、オリンポスの神々の力で、総力を挙げて討伐を試みましたが……撃退するのが精一杯でした。
そのままテュフォーンは、どこかに逃げ去ってしまった。この世のすべての知識が記された「全智の書」にさえ、彼の所在は記されていませんでした。
テュフォーンは、空間干渉の権能を持っています。奴はその能力で空間に穴を開けて、さまざまな世界を旅することもできます。しかし、ただの世界間の移動では、「全智の書」に記されるはず。つまり、奴は「全智の書」の権能が及び得ない世界……生物の心象世界にいる、ということが分かったのですよ。
最後に反応があったのは、柚葉市でした。だから、あなたを含め、多くの英雄は、奴を宿した人間、もしくは怪物のいるあの街に転生していくのです。
その宿主となっている可能性が高いのが、テュフォーンの眷属たる怪原家の者たち。あろうことか、奴らは柚葉市に住んでいる。これはもう、ほぼ百パーセント、あの家の誰かがテュフォーンを宿していると見ていい。奴らは逃げも隠れもしないのですから、そこを狙うのが効率的でしょう？」
「静粛に、静粛にー！」
天使の叱責で騒ぎが収まる。テセウスも、「これは失敬」と口を閉ざした。
「……皆も知っておる通り、奴は一度世界を滅ぼし、一度天界を

火の海に変えた。それほどの強敵じゃ。
だがしかし。倒せないわけではない」
ゼウスのその言葉で、動揺していた英雄たちの雰囲気が変わった。
ニヤリと笑う者。パキパキと指を鳴らす者。
そう――彼らとて、幾多の『悪』を斬り裂いてきた、百戦錬磨の豪傑である。そこに悪がある限り、涙する人がいる限り、彼らの闘志は尽きることが無いのである。
「そなたら英雄と、我ら神々の全ての力を結集し、立ち向かう事で、一度にわたって我らは奴を撃退せしめた！　そうであろう！」
『オォ――――――――！！！』
歓声が上がる。
「まして三度目ともなれば、勝手も知れておるようなもの！もはや我らの敵ではない！　綿密な作戦を持ってすれば、必ずや奴を屠ることができよう！今ここに！　此度の戦いで、奴を滅殺すると誓おう！　最大の悪に、裁きの鉄槌を下してやろうではないか！」
『オオオオオオオォ――――――――――――――ッ！！！！』
勇士たちが奮い立つ。先ほどまでの混乱は、もう見る影もない。
「それでは、我らが魁たる、勇敢なる神々を発表する！　壇上へ！」
「「「はっ！」」」
男神と女神が二人ずつ、ゼウスの隣に立った。
「第一部隊隊長、太陽神アポロン！」
「このアポロン、誠心誠意、貴殿らを導かせていただく！」
長い金髪をなびかせて、アポロンが拳を掲げる。それに合わせ、
『オォ――――――！！！』
英雄たちも勝鬨を上げた。
「続いて、第二部隊隊長、アルテミス！」
「誇りある月の光にかけて、我らの勝利を誓いましょう！」
兄と対照的な銀髪の、スレンダーな女神が合掌した。
『オォ――――――！！！』
「第三部隊隊長、アテナ！」
「正義の名の下に、彼の魔神に断罪を！」
兜をかぶった女神が、剣を抜き、高らかに謳(うた)う。
『オォ――――――！！！』
「第四部隊隊長、アレス！」
「わっははは！　私がついている以上、貴様らを阻む者はない！」
甲冑を身にまとった巨躯の神が、腕を組んで高らかに笑う。
『オォ――――――！！！』
「そして！　我らが最強兵器、ヘファイストス！」
『あっ……』
ゼウスの言葉に、誰もが顔に斜線を落とした。
（……？）
紫苑は首をかしげる。あれほど士気の高かった英雄たちが、なぜ一気にテンションが下がるのか。いや、それ以前に、壇上には四柱の神しかいない。ヘファイストスとやらはどこにいるのか。
一瞬の沈黙が流れたとき。
それは、思わぬ場所から声を上げた。
『イェ――――――ッハハハハハハ！　テュフォーンなんぞ、この無敵戦艦ヘファイストス・Ｍｋ（マーク）-Ⅱ（ツー）が、一撃のもとに粉砕してくれるわァァァァァッ！！！！！』
「……え」
神殿の隣に停泊（？）していた巨大戦艦。その甲板のスピーカーから、大音量で野太い叫び声が聞こえたのだった。
『お、おぉー……』

付け足したような覇気のない勝鬨。
「あ、あの……あれは……」
混乱した紫苑は、隣のテセウスの方を見る。
すると……彼は、ひときわ暗い面持ちで頭を抱えていた。
「あ、あの、手塩先輩？」
「ああ……まさかあのお方がまたしても出陣なされるとは」
「先輩。せんぱーい」
「む？　あ、これは失礼。どうされましたか」
「いや……アレ、どういうことなんですか」
紫苑が戦艦を指差しながら問うと、テセウスの顔色がさらに悪くなった。
「ああ……今に分かりますとも」
「……どう考えても分かる気がしないんですけど」
「どうしてもというのなら、他を当たって下さい。私にはとても無理だ」
もはや説明する気も起きないらしい。追及しても無駄なようなので、紫苑は仕方なくあきらめた。
そんな中でも、神々の紹介は続く。
「以上がそなたらを率いる神々じゃ。細かい編成は後ほど伝えよう。
そして……そなたらの出陣より、一刻の後！　美の女神アフロディティ、我が兄・ポセイドンとハデスも、戦列に加わることとなっておる！」
その言葉と共に、呼ばれた三神が、何もないところから唐突に、アポロンたちとは反対側のゼウスの隣に姿を現した。
「英雄(ヒイロオーズ)たちよ！　わたくしの輝(スパーコウ)きに負けぬよう、精進するのですよ！」
言葉の通りにビカ――ッと光る、次元を超越した美しさの女神。
「恐れるな！　そなたらには、雄大なる海の加護がある！」
三又の槍を掲げる、青い髪の壮年の神。
「……せいぜい、俺の仕事を増やさぬように励むことだな」
中世ヨーロッパの貴族のような、黒ずくめの服を身にまとった覇気のない神が、溜め息をつく。
『ウオォ――――――！！！』
先ほどまでの冷たい空気が嘘のように、戦士たちは声を張り上げる。当然だ。これだけの神々が味方につくと聞いて、心強く思わないわけがない。紫苑も、心なしか闘志を滾(たぎ)らせ始めていた。
「その他、ヘルメスとヘスティア、そして我が姉デメテールが補給班に回る。オリンポス十二神ほぼ総出演の、これ以上ない最強の布陣じゃ。さて……これだけの大軍勢。いったい誰が率いると思う？」
ここで、ゼウスは群衆に問いを投げかけた。
ひととき、彼らの思考は停止する。しかし、数秒の後、彼らの心は歓喜に躍った。
「……おい、嘘だろ？」
「すげえええ！　すごすぎるぜ！」
「本当に総力戦だわ！」
思わず声を上げる者もいる。
（……すごい）
紫苑もその答えに気づき、口の端が持ちあがるのを抑えられない。
「そう！　この全能の神ゼウスが、そなたらを率いよう！」
『ウオオオオオオオオオォ――――――ッッッ！！！』
意気揚々。活気は十分。今、この世全ての正義の士気は整った。
「出陣は八時間後！　それまでに存分に準備を整えるがよい！」

マントを翻して、ゼウスは神殿の中へと立ち去っていく。それを見送るのは、鳴り止まない万雷の拍手だった。

★

（……）

しかし、巨大彗星が柚葉市で目撃される十分ほど前。溢れんばかりの闘志に燃えていたはずの紫苑の心は、少し沈んでいた。

（……何やってんだろ、あたし）

天界の南端。人界や冥界へと続く扉の前に整列した、軍勢の最前列。前世での戦績を買われ、紫苑は『メンバーがひとりだけの独立遊軍』としてここに配置されることになった。

他にも、何人かそういった英雄はいる。なぜかまたしても右隣に立っている手塩、左隣にあろうことか理里の宿敵である邪眼（じゃのめ）地獄（へる）、その他最強の勇者と名高いヘラクレスなどなど。

注目株となってしまったわけだが、先ほどのような戦意は、今の紫苑には皆無だった。

というのも。あの後よくよく考えてみたところ、この戦いの真実に気づいてしまったのだ。

今回の敵であるテュフォーンは、実のところ、理里の父親であるわけだ。つまり、あたしは今から、愛するヒトの肉親を殺害することになるのだ。

あの家族は温かい。きっとそのうちの一人の喪失は、彼、いや彼らにとってとても残酷なことなのではないか。

そんな、理里を傷つけたくないという思いに惑わされて、どうも気乗りがしないのだった。

悶々としている紫苑の様子を見て取ったのか、視線を前に向けたまま、手塩が言う。

「戦場において、迷いは禁物ですよ」

「……でも」

紫苑は視線をそらす。そんなことは知っている。ケンカでも組み手でも、危険な目に遭うのは心の迷いがある時だった。

「今は何も考えずに、ただ前を見ていなさい。自分がしたことの是非は、時の流れが決めてくれます。だから、今この時だけは、自分の道を信じなさい」

「……先輩……」

一ミリたりとも動かないと思っていた鉄面皮が、少し笑った気がした。

「フン。甘いな、テセウス」

もう片方の隣に立つ、ピンク色の長髪と赤いマントを夜風になびかせる、中性的な顔立ちの美青年……地獄が、鼻を鳴らして侮蔑を向けた。

「何か文句でも？　転生組随一（てんせいぐみ）のキラキラネームさん」

「そのことには触れるな！　結構気にしてるんだ！」

手塩が無表情で聞き返すと、ペルセウスは声を荒げる。

「……ごほん。とにかくだテセウス、そんな蛮人を甘やかして何になる。理屈は簡単だろう。俺たちは正義の味方で、これから悪をぶち殺す。その自覚がないのなら、悪と付き合っていた女などは、今すぐここを立ち去るべきだ」

「……っ」

これには、さすがの紫苑も虫唾が走った。目にオレンジ色の光を纏わせ、キッ、と地獄の青と金の瞳（オッドアイ）を睨みつける。

「ほう、闘（や）る気か？　いいだろう、ちょうど魔神退治の肩慣らしをしたいと思っていたところだ」

コキッ、と首を鳴らす地獄。拳を握る紫苑。溜息をつく手塩。

一触即発の雰囲気が流れた、その途端――
「もう、ダメでしょうへーちゃん！」
挑発するように顎を上げていた地獄の上半身が、突如として何者かに頭を押さえつけられ、前方にがくんと折れ曲がった。
「はっ……はな、せ……」
「はなしません！　ちゃんとあやまりなさい！」
反発する地獄の後頭部を右手一本で制し、叱責したのは、三十代後半ごろの、なんとなく理里の母と同じ雰囲気が感じられる女性。身長は紫苑と同じくらい……百七十センチほどで、体型も彼女に近く、ふくよかとセクシーのギリギリ後者側のラインを走っている。腰まで伸ばした少し巻かれた茶髪と、今は少し吊り上っているが、本来は穏やかであろう大きな目が印象的だ。
紫苑と手塩が固まっているのを察し、女性は顔をこちらに向けた。
「あっ、どうもすみません、うちの子がとんだご無礼を……なんとお詫びしたらいいのか」
「はぁ！？　うちの子⁉」
紫苑は驚かずにはいられなかった。地獄もその言い分には不服らしく、
「なにが『うちの子』だ！　俺はお前の子どもだなんて認めた覚えなんかこれっぽっちもないぞ！」
「なっ……母親に対してなんてひどいことを言うのですか！　そんなことといわれたら、お母さん泣いちゃいますぅ……しくしく……」
万力で地獄を捕らえたまま、もう片方の手で泣き真似をする、地獄の母親と名乗る女性。さすがに困惑した手塩が、遠慮がちに彼女に質問を投げかけた。
「あ、あの。ペルセウス様の母君ということは、あなたは、アルゴス王女ダナエ様ということでしょうか」
「いいえ、違いますわ。わたくしはペルセウスの妻・エチオピア王女アンドロメダ……もとい、邪眼地獄の母！　邪眼餡子（じゃのめあんこ）、四十四さいですっ♪　ぶいっ♪」
「はあああああああああああああああああああああああ⁉」
彼女がピースサインを決めた瞬間、手塩が勢いよく後方にのけ反り、地面に頭をめり込ませた。
「せ、先輩⁉　どうしたんですか⁉」
それまでのキャラを崩壊させるような手塩の行動に戸惑いながらも、紫苑はどうにか手塩の頭を地面から引き抜く。
パラパラと土埃を頭から落としながらも、手塩は瀕死の様相でつぶやいた。
「なぜ……なぜこのような悪夢が……」
「せんぱーい！　しっかりしてくださーい！」
ゆさゆさと手塩の身体をゆするが、その目に光が戻る様子は無い。
「まあ、どうしたのです？　膝枕しましょうか？」
「頼む、あと三十年くらい黙っててくれ……」
地獄はついに母の手に反抗することを諦め、その場に倒れこんだ。
「せんぱーい！　先輩がダウンしちゃったら、あたしはこのカオスに置き去りです！　どうか気をしっかり保って！」
後ろに並ぶ英雄たちがクスクスと笑っているのが聞こえるのに耐えられず、紫苑は絶叫した。
しかし……マイペースな餡子が、ついにその矛先を紫苑に向ける。
「あら、オリオンくん……いや、今は紫苑ちゃんでしたね。こんなに可愛らしくなって！　ぜひ、へーちゃんのお嫁さんになって

もらいたいわ……あ、お嫁さんはわたくしでした♪　てへっ♪」
「ごへあぁ！」
寝っ転がったペルセウスが吐血する。
「はぁ!?　マジそんなのありえないから！　あたしには、もう、好きな人が……いるからっ……」
「あら、それは残念。他のだれかさんにメロメロなのね♪」
顔を真っ赤にして、両手を前に突き出し、全力で否定する紫苑に、餡子はニヤニヤと笑みを浮かべる。なお、その際に放された手塩が「ゴツン」と音を立てて後頭部を地面に強打し、気を失った。
「そ、そのっ……なんで、そんな状況になってるんですか」
そっぽを向きながらも、紫苑は餡子に尋ねる。すると、餡子は「うーん」と首をひねる。
「それが、全くの偶然なのです。もともと同じ時代に、双子の兄妹として生まれる予定だったわたくしたちなのですが……なぜか、わたくしだけ二十年ほど早く生まれてしまって。で、あれは確か、二十七の時でしたっけ？　ひょんなことから、死んだ親友の子どもを育てることになって。そしたらそれが、へーちゃんだったのです！　ね♪」
「ね♪　で済む話か！　……運命とは、時に残酷なものだ」
地獄が溜息をつく。
「なるほど、つまりお二人は義理の親子だというわけですね」
「先輩！？　復活早っ！」
何の脈絡もなく起きあがった手塩に、餡子はうなずいた。
「そうそう！　といっても、正式な養子ってわけじゃないんですけどね。知ってます？　養子と養母って、関係を解消しても、場合によっては結婚できないんですよ？　それじゃあ、ダメじゃないですか～。だから、へーちゃんの苗字だけ、お母さんと同じに改名したんだよね～♪」
「ついでに下の名前も変えやがって……どれだけコンプレックスだと思ってんだよ……何だよ、『地獄』と書いて『ＨＥＬＬ』と読むとか……『邪眼地獄』ってどんな地獄だよロックすぎるだろアアアアアアアアアアアア！！！！」
「ちょ、お前！？」
地面を頭で連打しはじめた地獄を、紫苑は慌てて止める。しかし、
「えぇ～、お母さんはいいとおもうけどな～？　だってカッコいいじゃない？　じゃがんじごくー、じゃがんじごくー♪」
「連呼するなアアアアアアアアアアアアアア！！！！」
火に油を注ぐ餡子の言葉により、地獄のヘッドバンキングはさらに激しくなる。
「ちょ、お前、落ち着けって！」
「ペルセウス殿、冷静になるのです。戦の前に頭が呆けてしまっては、力が発揮できませんよ」
「うるせえ！　どうせなら今ここで殺せ！　殺してくれ！」
暴走する地獄は、紫苑と手塩の言葉を聞きもしない。
「あの……お取り込み中のところ申し訳ないのだが……」
「きゃっ!?」
穏やかでない気持ちになっていたところで、後ろから、囁くような声が紫苑にかけられた。
「だ、誰っ!?　……おお……」
振り返ると。そこに、巨人が座っていた。
巨人と言っても、全長五十メートルの壁から顔を出すようなものではない。しかし、体育座りをしているにも関わらず二メートルに届きそうな、いかめしい筋肉に覆われた肉体は、まぎれもなくそう表現するにふさわしいものだった。

「おお、ヘラクレス！　どうしたのです」
　知己であるらしい手塩が、喜ばしそうに起きあがって、巨人に語りかける。
（……って、ヘラクレス!?）
　ヘラクレスといえば、ギリシア神話界で最強と名高い英雄ではないか。神話に疎い紫苑でもその名は知っている。
「じきに、アポロン様が到着なされる……出陣は間近だ……なので、談笑はそろそろやめた方がいい……」
　図体のわりに小さい声で、ヘラクレスは忠告した。
「なるほど。感謝します、我が朋友よ。聞いての通りです、皆様配置に戻られますよう」
「……分かった」
「は～い♪」
「……はい」
　手塩に促されるまま、紫苑たちは元の立ち位置に戻る。
　すると、噂をすればなんとやら、チャリオットに乗った金髪の男神が、弓矢と竪琴を携えて、いつものテレポートで姿を現した。
「……皆の者！　準備はよいか！」
『ウオォ――――――――！！！』
　威勢のいい歓声。それに応え、アポロンも声を張り上げる。
「我らは、全ての英雄と神々が参戦するこの大戦の、その魁（さきがけ）である！　よって、どの部隊よりも雄々しく、どの部隊よりも闘志を爛々と輝かせなくてはならない！　その覚悟はあるか！」
『ウオォ――――――――！！！』
「冥府の王より、この戦いのためだけに与えられた幾度目かの命、その魂が燃え尽きるまで、戦う覚悟はあるか！」
『ウオォ――――――――！！！』
「何としても彼の魔神を打ち砕き！　精霊界、天界、人界、冥界……全ての平和を勝ち取る決意はあるか！」
『ウオォ――――――――！！！』
「よろしい……貴君らの熱き思い、確かに受け取った……――いざッ！　出陣ッッ！！！！」
『ウオオオオオオオオオ――――――――ッッッ！！！』
　巨大な扉が、轟音を立てて開く。その先には、真っ暗な夜空が広がっている。
　アポロンは、天馬に鞭を振るい、その宙空へと躍り出た。するとどうだろう。戦車の通ったあとに、この隊列がちょうど収まるほどの幅の、光の道が形成されていくではないか。
『ウオオオオオオオオオオォァ――――――――ッッッ！！！』
　そう。この夜、闇を照らした彗星は、英雄たちの正義の進軍の光だったのである。

★

「ぴあちゃん。ちょっと、洗濯物をみんなの部屋に持って行ってくれない？　もう少しでごはん、できるから」
「うん……わかった」
　母の頼みに応える珠飛亜の声には、いつものような明るさがない。
「……何かあったの？　もしかして、さっきのりーくん？」
「ううん、別に！　なんでもないの！　せんたくもの、なおしてくるね！」
　台所から、心配そうに顔を出した恵奈に、珠飛亜は笑顔で答え、きれいに畳まれた大量の衣服から、いくつかの山を選びとって、抱えてリビングを出ようとすると。
「……なにやってるの？　ふたりとも」
　吹羅と綺羅が、ベランダに通じるガラス戸にへばりついて、外

の夜空を見ていた。
「聞いてください、姉上……今、私たちは、未知との遭遇を体験しています……」
「未知との遭遇って、どれどれ……っ!?」
吹羅に呼ばれるままに、姉妹の左隣に立つと。
真昼の太陽を思わせるほどの輝きが、現在進行形で夜空を駆けていく。
「ちょっ、ママ！　こっち来て！」
「なぁに？　大きな声を出して……ご近所さんに迷惑よ？」
「いいから、はやく！」
珠飛亜があまりに急かすので、火の始末だけ済ませてから、恵奈はパタパタとスリッパを鳴らして、窓際にたどりつく。
「もう、いったい何が……えっ」
そして、黄金の飛行体を見るなり、目を見開いた。
「すごい、すごすぎる！　あれは絶対ＵＦＯですよ！　ね、母上！」
「き、きらも、そうおもう！」
双子は、興奮が抑えきれないようで、目を輝かせ、声を弾ませて恵奈を見上げる。
だが。
「嘘……そんな、まさか」
恵奈の顔が、ひととき青ざめる。
「？　ママ？」
「……ぴあちゃん。ひゅーちゃん。きーちゃん。ママ、ちょっと出かけてくるわ」
「？」
「母上？」
綺羅と吹羅が首をかしげる。そこに珠飛亜を加えた六つの瞳を見つめて、恵奈は告げた。
「パパが……パパが、危ないかもしれない」
「「「!?」」」
瞬間、三人の娘たちは目を見開く。
「バカな！　父上は、誰にも見つからないところで、生きているのではなかったのですか!?」
「ええ、本当はそのはずだったのだけれど……あれは、アポロンの行軍の光。オリンポス十二神の一員である彼が、人目もはばからずに軍を率いて姿を現すなんて、三世界全体の危機以外にありえないわ。そして、その理由として考えられるのは、最強の魔神テュフォーン……つまり、パパの姿をとらえたこと以外には考えられない。何せ、十五年間もそんな怪物を野に放していざるを得なかったたわけだから、見つけたとなれば、今度こそ完全に封印しようとするはずよ」
恵奈の口調は冷静だった。しかし、その裏には、怒りとも恐れともつかない、得体の知れない負のエネルギーがあった。
「なぜ今のタイミングで、そしてなぜわたしたちが住んでいるこの街に、パパが現れたのかは分からないけれど。きっと、あの人なりの考えがあってのことなんだわ。……だったら、わたしはそれを助けてあげなくっちゃ」
「「「……」」」
有無を言わせぬ声色は、その愛ゆえに。十五年会えなかった寂しさゆえに。彼女が三千年を生きた異形であるとはいえ、その歳月は決して短くはなかった。
『きっとどこかで生きている』というのも、楽観的な推測に過ぎなかった。いや、彼は不死なので間違いなく生きてはいるのだが、きっと二度と会う事はできないだろうと思っていた。三世界のいずれかに姿を現せば、ヘルメスの『全智の書』に記録されると分かっているなら、彼の権能で、この三世界以外の別の世界、もし

くは誰かの心象に逃れる以外に、追っ手から身を隠す術はない。
その彼が、この人界に姿を現した。いかほどに、この時を待ち望んでいたことか。娘たちには理屈をつらつらと並べ立てた。が、本心は、早く彼に会いたい――それだけだ。
封印なんて絶対にさせない。今度こそ、彼はわたしが救う。あの宵闇に輝く陽光を見た、その瞬間に決意した。
「……わかった」
暗黙のうちに、恵奈のその意思を感じ取ったのか。珠飛亜がうなずく。
しかし。その答えは、恵奈の想像の斜め上を行った。
「じゃあわたしは、ママについていくよ」
「!? だめよ、ぴあちゃん！ あなたたちまで、危険にさらすわけにはいかないわ！」
そう、これは恵奈自身の自分勝手な願望。命の危険を負わせてまで、それに付き合わせるわけにはいかない。
だが、そんな恵奈の思いに反し、珠飛亜たちの闘志は燃えていく。
「わたしたちだって、家族の一員でしょ？ だったら、ママに協力するべきだと思うの。ま、その前にりーくんを探さなきゃだけどね♪」
「ええ。それに、我が力を世界に知らしめるのに、これほどの好機がありましょうか。不死の毒蛇の恐ろしさ、英雄どもに思い知らせてくれる」
「き、きらも。いくつか、封印を解いてもいいから、たたかいたい」
「で、でも……」
それでも、五児の親としての立場が、恵奈の首を縦に振らせることを引きとめていた。本当なら、この子たちの事を考えれば、自分は戦場に向かう事さえ許されないはずなのに、恵奈は自分の愛を選んだ。ならばせめて、この子たちには安全でいてほしいと、そう思うのだ。
そんな母を見かねた吹羅が、「やれやれ」と両手を上げる。
「母上。よもや我らが、戦闘経験が薄いとでもお思いですか？ 母上の知らないところで、英雄たちは、ほんの子どもである我らにも戦いを挑んでいるのですよ。そのような者どもを屠れる程度には、我らにも戦闘力はあるのです。いや、むしろ、これほどのチート能力者集団が奴らに負けるなど、有り得ないことではないでしょうか」
「っ……」
それを言われると痛い。子どもたちをおびやかしうる敵は、できるだけ事前に駆逐してはいたが、先のペルセウスのように、ときどきその目をかいくぐる、もしくは恵奈の都合が合わず間引けない英雄がいるのだ。その点で、「まあ、うちの子たちは誰にも負けないだろう」という楽観的思考があったのも事実だ。
「っ、でも、相手は太陽神アポロンよ!? いや、それだけじゃない。きっと天界の全勢力……つまり、オリンポス十二神まで出てくるのよ!? いくらあなたたちでも、太刀打ちできな」
「かみさまなんて！」
恵奈を遮り、響く甲高い声。綺羅が、怒鳴ったのだった。
「き、きらたちなら、かみさまなんて、こわくないもん！ パパとママの、子どもだもん！ それなのに、しんじてもらえないなら、きら、おこる！」
目に涙を浮かべて、普段引っ込み思案なはずの彼女が、今、心からの叫びを訴えていた。綺羅の剣幕に呆気にとられ、珠飛亜、吹羅と共にぽかんと口を開けていた恵奈だったが、その宝石のような瞳に見つめられて、ハッと気付いた。

「……そうね。そうよね」
両目を潤ませたまま、ぷるぷると震える綺羅を、恵奈は抱きしめる。
「ごめんね、きーちゃん。……ごめんね、みんな。ママが、間違ってたわ。そうよね。ママは、誰よりもみんなのこと、信じてなくちゃいけないわよね」
そうだ。こんなことに、なぜ気づかなかったのか。時には、親として非情になることも必要ではあるけれど。彼らにも、ちゃんと心がある。恵奈と同じように、愛がある。
「よしっ！　そうと決まったなら、今すぐ行こっ！　あの光を追おうよ！」
珠飛亜が、左の手の平を拳で「ぱちん」と殴る。
「ええ、もちろんよ！　ただし、危なくなったらすぐに逃げてね」
「うん！」
「御意！」
もう、十五年前のあの日とは違った。恵奈にとって守るべき者は、共に戦う仲間に成長していた。
それぞれの決意を胸に、この世界最強の家族が、動き出す。

★

ところ変わって、柚葉市の中心部・神ケ舛川（かみがますがわ）中流域の河川敷。雑草がぼうぼうと生え、先日理里によって破壊されたセメント製の橋の残骸以外には人の手が入った様子の無い川岸に、ひとり佇（たたず）んでいる男がいた。
背が高く、目は細く、髪型はオールバック。黒い羽根があしらわれたコートの下に、深い緑色のスーツを着て、右手にはステッキを持った、特徴しかない見た目。
男の足元からは、四方向に、白く細い光の線が伸びている。それは、男の目視では確認できないほど先まで続いているようだ。
「しかし。僕の〝彫刻室〟に、よもやこのような使い道があるとは思わなかったなあ」
話しかける人間など周りには居ないのに、誰かに語りかけるように男はつぶやく。
すると。男の頭の中に、いくつかの声がこだました。
『なに。そこまで精巧な心象世界を持っている英雄が、あなたしかいなかったというだけの話さ』
『神々の考えることには、本当に脱帽じゃな。いくつもの異能を重ねて使うとはのう』
『妄（わらわ）は気に食わぬがな。この世で最も美しい妾が、なぜ貴様らのような凡俗と力を合わせねばならぬ』
『おいおい、そこまでにしとけよオバサン。また神罰喰らっても知らねえぜ？　英雄どうし、仲良くやろうや』
気位の高そうな男性、賢者然とした老人、気難しそうな年配の女性、粗暴そうな若い男の声がひとつずつ。あまり相性のよくなさそうな印象が聞いて取れる。
最後の男の言葉のとおり、この五人は全て〝英雄〟それも星座から転生した、俗にいうところの『星落ち』である。
口を開いた順にそれぞれ、彫刻室座、三角座、六分儀座、カシオペヤ座、祭壇座。テュフォーン出現の知らせを受け、現世にいた彼らは神の軍勢の出陣よりも前に、それぞれ柚葉市の東端・西端・南端・北端・中心に配置され、魔神をこの街から逃がさぬための結界を張ったのだ。
「これだけ制限をかけておけば、奴の動きも多少は鈍るだろう。権能はまだ使えるかもしれないが、空間転移はやりにくくなるだろうな」

『そうだね、芸術家さん。……しかし、これは何かにつけて思うのだが、アーティストというのは皆、頭が切れるのではないだろうか』

「ハハッ、よしたまえ 三角（トライアングラム）くん」

彫刻室座の男の職業は、本人の名刺には『彫刻家』と記されることが多い。ときどき、作詞家や作曲家、絵描きや物書きにもなることがあるが、基本的には石膏像を作っている。名を リ是周（りつとうこれちか）と言い、その道ではそれなりにネームバリューのある人物だった。

『妾も、そなたの作品はときどき見させてもらっているぞ。悪趣味だが、なかなかに面白い』

『わしも、君の名はよく見かけるよ。この間、雑誌のインタビューを受けていたじゃないか。大したものだ』

「いえいえ、そんな大層なことではありませ」

『ゴキゲンヨウ、英雄の皆サァア～ン！！！！　聖戦の準備はいかがDEATH（デス）カァ？』

「っ?!」

『『『『『?!』』』』』

五人の頭の中に。突如、聞きなれない男の声が、大音量でこだました。

『よもや人の身でテュフォーンに挑もうというその蛮勇、謹んで称賛申し上げましょゥ。しかァーし！！　マコトに申し訳ナイのDEATHがァ……アナタたちは、彼の魔神に挑むことナク、滅ぼされる運命にあるのDEATH！』

「くっ……」

『何者じゃ、貴様！　名を名のれい！』

六分儀座の老人が、苦しそうに叫ぶ。この男の声は、是周たちの脳を揺さぶり、今にも破裂させんばかりの大きさを誇っていた。

『ンン？　ワタクシDEATHか？　……キャヒ。キャヒヒヒヒ。キャーッヒャハハハハハハハハハハハハ！！！！』

『あ、頭が、割れる……！』

『か、ぁっ……』

『大丈夫か、オバサン……くっ』

不快な高笑いが鳴り響き、それは彼らの頭痛をさらに深刻化させた。

『ワタクシ！　このワタクシこそは！　傲慢ナル神を滅ぼし、極楽をこの世に涌現させるコトを理想とスル者！　悪魔の女王、堕天使ルシファーDEATH！』

「『『『『っ?!』』』』」

それは、英雄であるならば、一度は耳にしたことのある名前。世界で最も高名な悪魔にして、最も醜悪な悪の権化。

「き、さま……まさか、テュフォーンと同盟を……?!」

『イイエ？　彼は全く関係ありませンよ。偶然にも、日が重なってしまっただけ……そう、この世界が生まれ変わる、記念の日にネェ！』

『てめえ……！　何をたくらんでいやがる！』

祭壇座の若者が、怒りも露わに声を上げる。するとルシファーは、さらに声の調子を上げた。

『今日この日を以て！　世界の支配者は入れ替わる！　ゼウスによる放任の時代は終焉を迎え！　新たな支配者として、時の神クロノス様が、三世界を統治するのDEATH！』

「?!　クロノスだと」

確かに、クロノスは先日タルタロスの『深淵』から脱獄し、その動向は掴めないでいた。だが、それがよりにもよって、悪魔と手を結んでいたとは！

『オリンポスの神々を……甘く、見るでないぞ……きゃつらがど

れほど手強いか、お主も知らぬわけではあるまいに』
『ハッハーン。自らの体験を以てのアドバイス、ありがたいことDEATHねえ愚かな王妃よ。……DEATHが。残念なことに、天界はもう敗北してしまったのDEATHよ……』
『っ!? なんじゃと!?』
あまりに衝撃的すぎるルシファーの言葉に、声を出せたのは、六分儀座の老人だけだった。
『バカな！ 数分前、第一軍が出陣したばかりではないか！』
『ンッンー。その一瞬のうちに、天界は滅んでしまったのDEATH。詳しいことは言えませんがネ。
……オット、アナタたちと無駄話をしている暇は無いのでした。続きは冥界で、ゆっくり聞かせてあげまショウ♪』
『『『『がっ!?』』』』』
五人の頭痛が、いっそう激しくなる。
「ぐっ……何をする気だ！」
『ナニって、アナタたちが苦労して作ったこの結界を乗っ取るのDEATHよ。天界が滅んだ今、我々に対抗しうる勢力は、ここにいる英雄の軍勢のみ。それを一匹たりとも逃さないためにネ♪』
『あぁっ！』
『!? どうしました、カシオペヤ様！』
悲鳴と共に、カシオペヤの声は、それきり途絶えた。三角座の男が何度呼びかけても、彼女の返事は無い。
そのうちに、
『ぐあっ！』
その男の声も、苦悶を最後に聞こえなくなった。
『てめえ！ 何しやがっ……がぁっ！』
『祭壇の!? おのれ、許さんぞ……ふぐぅ！』
続けて、祭壇座と六分儀座の声も聞こえなくなる。

「貴様！ いったい何をした！」
「ンフフフ～、殺してはいませンよ。少し、意識を乗っ取っただけDEATH。彼らを生かしておかなければ、結界が保てませンからねえ」
その気味の悪い笑い声は、心の中ではなく、頭を抱えてひざまずく是周の真後ろから聞こえてきた。
「!?」
振り返ると。
「ハロー、素敵な英雄サン♪ 女帝ルシファーのお出ましDEATHよォ」
そこにいたのは、『奇妙』としか言いようのない外見の男だった。
いや、男と呼べるかどうかも怪しい。何せ中性的な面立ちで、顔一面に白粉（おしろい）を塗（まぶ）し、両目にはどぎつく黒いアイライン、そして口元には紫色のルージュ。身長は二メートルをゆうに超すが、水色の肌の身体は異様に痩せていて、脚などは今にもポキリと折れてしまいそうだった。
しかし、何よりも珍妙なのは服装だった。大きな宝石のあしらわれたハイヒールを履き、全身網タイツの上に、下半身はホットパンツ、上半身はバニーガールの衣装の上半分だけを引きちぎったような布で胸元が隠されているだけ。
また、この男が人間ではないと分かる部分も見て取れた。腰のあたりから、巨大な黒い翼が一対と、紫と銀のボーダーになったオールバックからは、二本の小さく黒い角が生えている。
「アナタで最後DEATHよォ。見たところ、アナタがこの結界の要（かなめ）のようDEATHねェ」
そう言うとルシファーは、悶え苦しむ是周の頭をひっつかみ、無理やり顔を上げさせる。
「はあ、はあ……」

石化の力はテュフォーンの方に全て使われてしまっており、今さらそれをここに移すことはできない。抵抗する術は無い。
しかし。
「お前たちには……屈しない……」
「ンン？　何ＤＥＡＴＨカ？」
是周が、糸のように細い目を見開く。
「たとえここで、僕が倒れようとも！　正義は、お前たちに屈しない！　見ていろ、この悪魔め」
「あー、アナタやかましいＤＥＡＴＨ。バーイ♪」
是周の頭を掴むルシファーの右手が、紫色に発光すると、「バン」と強烈な衝撃波が発せられた。是周は、その場に倒れた。
「……さァて、準備は整いマシタ！　行きナサイ、我が同胞たちよォ！」
誰もいない河原に、悪魔の王の号令が響き渡る。この街における真なる戦いの火ぶたが今、切って落とされたのである。

★

「うきゃあ!?」
柚葉市南東部、怪原家の近くにある公園。その砂場に、ひとりの天使が落ちてきた。
この見習い天使・ユーフィは、天界に起きた一大事を伝えるために、ゼウスによって人界に送られたのだ。
（こ、公園？）
子どもの姿どころか、人っ子ひとりいない夜の公園。その、ブランコの横にあった砂場に、彼女は天界から現れたのだ。
（っていうか、ここどこなの……）
てっきり、外に出たらすぐアポロン様の軍勢に出会えると思ったのだが。「力の強い天使は送れない」だの、「我が作る異界への門は五秒ともたない」だの、何かと多かった不安要素の正体がこれではっきりした。どうやら私の雇い主は、どんな不可能も可能にする完璧超神ではなかったようだ。
（と、とにかく、英雄さんたちを探さないと）
さすがに、そう離れた場所には送られていないはずだ。天界の物見の大水晶に中継されていた映像では、英雄軍はまばゆく光る巨大なＵＦＯのように見えた。あれほど目立つものなら、目撃証言も多数あるだろう。とりあえずは道行く人々に聞いてみようか。
（よ、ようし、がんばるぞ）
小さくガッツポーズをして、ユーフィが立ち上がろうとすると。
「きゃ!?」
白いキトンの、そのスカート部分を、ガシッと掴まれる感触。そのまま、砂場に引きずり倒される。
「だ、誰っ!?」
再び座り込んでしまい、いささかの恐怖心に駆られながら、後ろを振り向くと。
「……」
青年が一人。純白の布をひっつかんで、その場に倒れていた。
砂で汚れた、ところどころ破れた白Ｔシャツには血が滲み、下は黒のジャージ、足元は異様にすり減って穴の空いたスニーカー。まるで、コンビニに何かを買いに行こうとしたら、そこで交通事故に遭ってきたかのような雰囲気だ。
「は、離して！　私、急いでるの！」
ユーフィはスカートの太腿あたりを握り、青年の手を振り払おうとするが、細身の見た目からは想像できないほど、彼の右手の力は強く、全く引きはがすことができない。
「……無駄だよ」
それでもユーフィが奮闘していると、青年は、顔を伏せたまま、

柔らかい、しかしどこか哀愁の漂う声を発した。
「下級天使なんかの力じゃ、俺の腕力には敵わない」
そう言って、青年がやっと持ち上げたその顔に、ユーフィは戦慄した。
「えっ……」
青年の顔は、その右半分が緑色の鱗で覆われ、両目が爬虫類のように黄色く瞳は糸のように細く、口元には猛獣のような鋭い牙がずらりと並んでいた。
だが最も驚くべき点は、そこではない。
(理里……くん……?)
その面貌、そのどこか悲しげな表情は、まぎれもなくユーフィが……いや、『天羽夕陽(あまばねゆうひ)』が、きちんと記憶しているものだった。
「いいことを教えてやるよ」
ユーフィが呆然としていると、理里は彼女のスカートの裾を握ったまま、ゆっくりと膝立ちになり。
そして、彼女の胸倉を掴み、自分の方に引き寄せた。
「俺はな。テュフォーンの息子なんだ」
「!?」
驚愕するユーフィの表情に、理里は卑屈な笑みを浮かべる。
「つまりはお前ら天界の民の敵だ。命を絶っておいたほうがいいんじゃないか?」
「ひっ……」
恐怖と驚きで理解が追い付かず、がくがくと震え続けるユーフィに、理里は苛立ちをおぼえたようで。鬼の形相で、彼女に迫る。
「どうした。殺せよ。俺は抵抗なんてしないぞ。光の弓か何か、どうせどこかに隠し持っているんだろう? ……さあ、殺せ! お前の敵を! 醜い怪物を殺すがいい!」
「り、理里くんっ!」

混乱のあまり、彼女の口をついて出た自分の名前に、理里はぽかんと口を開けた。
「……は?」
畳みかけるように、ユーフィは理里の肩を両手で掴む。
「わ、私! 夕陽(ゆうひ)だよ! 珠飛亜ちゃんのお友達の、天羽夕陽(あまばねゆうひ)!」
「えっ……夕陽、さん?」
そう、彼女の名はユーフィなどではない。
天羽夕陽。幻象学院大学(げんしょうがくいんだいがく)に通う一年生で、珠飛亜の高校時代からの親友。
理里が気づかなかったのも無理はない。夕陽が彼と顔を合わせたことは数えるほどしかなく、また彼女自身、もともと存在感の薄いほうであったので、しかもこんな輝かしい姿になどなっていれば、珠飛亜でさえも別人と思うかもしれない。
拍子抜けしたように、怪物の顔のままフリーズした理里に、夕陽は、自分を奮い立たせて、思い切って声を張る。
「じ、自分のことを殺せだなんて、言っちゃダメだよ! 私なんかじゃ、力になれないかもしれないけどっ! よ、よかったら、お話、聞かせてよ!」
「えっ……うん……まあ、それじゃ……」
毒気を抜かれたらしい理里は、夕陽の服の襟から手を離し、その場に座り込んみ、事の顛末を全て語った。
「もう、何も信じられない。紫苑は夜空で、俺の事をずっと待っていてくれるって信じてたのに。なんで……なんでっ」
理里の目から、大粒の涙がこぼれ落ちる。
「あ、あの、理里くん」
「……? 夕陽、さん……?」
しかし夕陽は、何か申し訳なさそうな表情を浮かべていた。
「そ、その、紫苑ちゃんだっけ。私、その子がどこに行ったか、

知ってるよ」
「!?」
理里は目の色を変え、彼女の右手を両手で握る。
「教えてくれ。紫苑は今、どこにいるんだ！」
「え、えっと、実は……」
夕陽は、テュフォーンが現れてから、現在までのできごとを簡潔に話した。
「そうか、父さんが……じゃあ、さっきの光の中に、紫苑が」
「う、うん。オリオンって呼ばれてた子も、確かにいたよ。女の子だったんだー、って不思議に思ったの、覚えてる」
話を聞き終えた理里は、深刻な顔つきになる。
「んー……じゃあ、今から起きるのは、父さんと紫苑の戦いってことになるのか。俺、どっちについたらいいのかな……」
「あ、そうか……そうだね」
ロミオとジュリエット然り、愛する者をとるか家族をとるかというのは、なかなかに難しい問題である。そのあたりには、さすがに夕陽も口を出せない。
が。少し黙考して、理里は口を開いた。
「……いや。俺は、紫苑を守ることだけ考えよう」
「？　じゃ、じゃあ、お父さんはどうするの？」
神の側についている夕陽であるが、知人のこととなると、敵味方というのは関係なく心配になってしまう。
しかし、それも杞憂のようだった。
「父さんに紫苑は殺させない。だけど、俺は父さんを攻撃することはしない。……勝敗がどうあれ、俺は紫苑を守るだけだよ」
それは自分の父に対する自信であるのか。それとも愛を優先したのか。どちらかというと後者なのだろうが、これはこれで、彼の立場として最適な選択かもしれない。
「よしっ！　行こう、夕陽さん！　……じゃあ、ちょっと遠くにいてもらえないか」
「う、うんっ！　……うん？」
夕陽が離れる間もなく、突如、理里の身体から強風が発せられ、彼女はその場から数メートルほど吹き飛ばされた。
「うきゃあ!?」
後ろにあった桜の木にぶつかり、どうにかそれ以上飛ばされることはなくなった。
理里の身体から吹き上げる強風はどんどんと強くなり、やがて渦を巻き始めた。風は竜巻となり、砂を巻き上げ、彼の身を隠す。
その中から、白い光が放たれた。人の形をとったそれは、竜巻が激しくなるほどに形を変え、だんだん巨大化してゆく。
「な、なんなのよぉ～！」
その叫びもかき消す烈風の中、その閃光が一際強くなり、夕陽が思わず目を覆った時。竜巻が、前触れもなく、ぴたりと止んだ。
「な、なんだったのぉ……っ！？」
やっと目を開いた夕陽の前に。彼女の常識では考えられないモノが、威風堂々とたたずんでいた。
それは、巨大な白い龍……いや、龍のような何か。角の生えた肉食恐竜に近い顔やコウモリのような翼はまぎれもなく龍なのだが、上半身は隆々と筋肉のついた巨人で、下半身は大木（たいぼく）もかくやというような大蛇なのだ。頭には髪の毛から変化したらしい蛇が無数にうごめき、純白のウロコは、妖しく月明かりに照らされ、艶っぽい輝きを放っている。
その怪物は、ゆっくりと、もはや言葉も出ない夕陽の方を向き。
「さて、行こうか。確か南西の方に飛んで行ったはずだ」
くぐもった低い声で、夕陽を促した。
「は、はい……」

自分は、とんでもないものと手を結んでしまったのかもしれない……そんな後悔が、にわかに夕陽の心に湧き上がるのだった。

★

「……はっ！」
後方から襲いかかってきた黒い泥人形を、アポロンは持っていた弓で打ち据え、粉砕する。
（いったい、どうなっているのだ……？）
乱戦状態と化した、柚葉親水公園（ゆずのはしんすいこうえん）のグラウンド。広さは五百メートル四方、四分の三は森林と川、池でできているこの公園の、残りの四分の一を占めるここで、襲い来る泥人形たちを、必殺の光の矢の雨で射殺（いころ）しながら、彼は混乱の渦中にいた。
テュフォーンに向かって順調に歩を進めていたところ、先頭のアポロンの戦車が、何か抗えない力によって突然方向を変えられ、隊列は総崩れとなってしまった。その隙を狙ったのか現れたのがこの人形兵団。テュフォーンも見失い、天界からの連絡も無く、今はこの雑魚どもを屠り続けることしかできない有り様である。
しかも、アポロンたちが天界を出た十分後に出発するはずだった後続の補給部隊も、いっこうに姿を現さない。ゆえに、現在ここにいるオリンポス十二神は、アポロン、アルテミス、アレス、アテナ、そしてヘファイストスの五柱のみ。
よもや天界で何かあったのではないか……という不吉な予感がよぎる。だが、今はそれどころではない。
（……奴は、何者だ）
十メートルほどの高さの空中に浮かぶ、十七、八歳ほどの年頃の、黒いドレスの長身の少女。黒い兵士たちは、あの少女によって無限に生み出されつづけている。

ならば、彼女を倒せば戦況は変わるはず……というのは英雄たちも百も承知。しかし、彼女には、一切の攻撃が当たらないのだ。
矢を放てば、命中直前で軌道が逸れる。天使部隊が剣や槍で攻撃しても同じく。そして、
『くっ……なぜだ！　なぜ当たらんのだぁ！』
先ほどから空中でレーザー砲撃を浴びせかけ続けている、自称『無敵戦艦』ヘファイストスＭｋ－Ⅱも、このたったひとりの少女に手を焼いていた。
「いいかげんやめんかヘファイストス！　逸れたレーザーが全てこちらに飛んでくるのだ！　何人か死者も出たぞ！」
『何を言うかアレス！　この無敵戦艦に倒せぬ者などおらぬわ！　ましてこんな小娘ひとりになど……ええい、ならばこれはどうだ！　喰らえ、我が最強の主砲の力！』
ヘファイストスが（スピーカーで）叫ぶと、戦艦の艦首が、音を立てて四つに分割しはじめ、その奥の方から、巨大な大砲が、回転しながら姿を現す。
「待て！　それはいくらなんでもやりすぎだ！」
アポロンが制止しようとするが、ヘファイストスはノイズを発することさえしない。
『受けよ、我が怒りの劫火（ごうか）……〝殲滅（ウルカノ・イグニス）せし瞋恚の炎〟、発射アアアアアアア！！！！！』
再びの大音量の放送と共に、大河も裸足で逃げ出すような光の奔流が、主砲から放たれる。それはいともたやすく少女を飲み込み、光の中へと消し去った。
ついでにその先にあった住宅地が消滅し、数キロ先までに存在するものを全て消し炭にする結果となったが。
「だから言わないことではない！　これだから貴様は！」
『やかましいぞ太陽神！　どうせデメテール様とハデス様がなん

とかしてくれるわ！　しかし、さすがにこれだけの砲撃を喰らわせれば、あの小娘も無事ではおられまい……!?』
　アポロンを軽くあしらい、ほくそ笑んだ（つもりの）ヘファイストスは、メインカメラを疑った。
　少女は、傷一つない姿で、あいも変わらず空中にたたずんでいた。一片とてその表情を動かすことなく、冷たい視線を巨大戦艦に向けながら。
『な、なんだとオオオオオオ！』
　慟哭するヘファイストスに、アポロンは憐憫の目を向ける。
「当然だ、愚か者。奴はおそらく、テュフォーンの〝権能分与〟を受けている。言うなれば、少し劣化したテュフォーンがここにいるのと同じだ。おまえ一人で敵う相手ではない。当分、その場で待機していろ。おまえの力を発揮するのは、もう少し巨大な相手が出現してからだ」
『くっ……』
　こうまで言われ、しかも主砲が通じなくてはどうしようもない。ヘファイストスは砲撃を止め、その場で沈黙した。
（しかし、奴も厄介なものを味方につけたものだ）
　光の矢で泥人形たちを撃ち滅ぼしながらも、アポロンは心の中で悪態をついた。
　あの少女の正体は、怪物か悪魔か、はたまた人間の異能者か。それを懐柔したテュフォーンは、彼女に自分の能力を分け与え、我ら神の軍勢を足止めするための手駒としたのだ。
　攻撃が届かないのは、彼女の周辺の空間が、テュフォーンから与えられた空間干渉の権能によって歪められているため。しかも、あれだけ大質量の砲撃を喰らって傷一つないということは、そこに隙はないとみえる。
　この仮説が正しいならば、彼女を攻略する方法は、ただひとつ。
『ペルセウス。聞こえるか』
『はっ。ここに』
　若い男の返事が、頭の中に返ってくる。
『ハルパーを使い、あの少女を抹殺せよ』
　ハルパー。それは雷霆ケラウノスや治癒の杖ケーリュケイオン、不破の盾アイギスと並ぶ、ギリシア神話史上最強クラスの神造兵器。
　その刃に付与された概念は絶大な力を誇り、振り下ろした先にあるものを切断し、たとえ相手が不死であろうと殺害する。これを無効化することは、〝始原の五神〟に次ぐ第二世代の神ウラノスであっても不可能であった。
　普段はヘルメスの宝物殿で管理されているが、此度の遠征のため、先に挙げたアイギスやハデスの兜、そして翼の生えた靴と共に、それは現在ペルセウスに貸与されている。力に優れたヘラクレスよりも技巧に長けるペルセウスの方が、これらの武器はふさわしいと判断され、メデューサの討伐以来実に二度目のことである。
『御意』
　体温を感じない声のあと、つながりが切れる感覚がある。
（この敵が倒せなければ、テュフォーン討伐など夢のまた夢だ。頼むぞ、ペルセウス……）
　心の中で、最強の英雄の一角を激励しながらも、太陽の神は前方の雑兵たちに向き直った。

★

「……フン。強さが知れ渡っているというのも困りものだ」

アポロンの命を受けたペルセウスは、右手に携えた愛剣・アルゲニブを一振りし、飛びかかってくる泥人形を、斬撃によって消し飛ばす。
「へーちゃん？　どうかしましたか？」
傍らで戦っている餡子が、彼の様子が変わったことに気づき、振り向く。
その瞬間――泥人形が、両手を掲げて跳躍してきた。
「……」
しかし、地獄は特に何もしなかった。なぜなら、
「ギェエ!?」
餡子の立つ位置から五メートルほどの距離に達した瞬間、泥人形は無様な鳴き声を上げて粉砕された。
彼女の周りに無数に飛び交っている、青い光の球が、目にもとまらぬ速さで、いくつも人形の身体を貫通したのだ。
〝星落ち〟のみが持つことを許される、彼らの星座を構成する恒星を材料に作られる武器・〝天装（てんそう）〟。餡子のそれは、七十二人の〝星落ち〟の中でも最多の恒星を使って作られている。
その数、実に数十億個。
彼女を中心に半径三メートルほどの円形の領域に展開されたそれらは、敵が接近するのを自動的に感知し、彼女から五メートルの距離に達したところで抹殺する。
鉄壁の防御にして無慈悲なまでの殲滅攻撃であるこの武器こそ、かのアンドロメダ大銀河が転じた天装・『贄姫（アンドロメダ・ギャラクティカ）の螺鈿』。その輝きが視界を覆うほどに広がり、その存在をこれでもかと主張していたからこそ、地獄は餡子への死角からの攻撃にも眉ひとつ動かさなかったのだ。
しかも、彼女の天装はこれだけではない。
両手に光る、金と銀の、手の平ほどの大きさの単発式の銃（デリンジャーと呼ばれるものに近い）。聖銃アルマクとアルフェラッツだ。『贄姫（アンドロメダ・ギャラクティカ）の螺鈿』の星々を弾丸にして打ち出すこれらの武器を加えて、全部で三つの天装を有している彼女は、ここにいる泥人形どもが全員同時に攻撃してきたとしても、難なくその全てを滅ぼしてしまうことだろう。
「アポロン様からのお達しだ。俺に、『ハルパーであの少女を殺せ』と。お前は、俺がハルパーを振り下ろす間、周りを守っていろ」
表情を変えずに地獄が答えると、一瞬餡子の顔が曇った。
だが、彼女はぶんぶんと首を振り、
「わかりました。若い命が犠牲になってしまうのは、悲しいですが……世界の命運とは、比べかねますものね」
地獄に背を向け、アルマクとアルフェラッツを持ったまま、両手を左右に広げる。
すると、そこら中に瞬（またた）いていた星たちが、少女のいる方向だけを避けて、全体的に数メートルほど外側に拡散した。
「なるべく、苦しまないようにしてあげてくださいね」
「ああ。分かっている」
地獄はうなずいて、アルゲニブを持った右手を、地面に向かって、まっすぐ自分の斜め右側に伸ばした。
すると、アルゲニブが青白い光を伴って霧散する。
「英雄の号（ごう）を以（もっ）て、我が内象（ないしょう）に命（めい）ず。その扉を開き、その醜悪を晒（さら）し、秘めたる五色（ごしき）を現世（うつしよ）に示せ――
来たれ、神の剣（つるぎ）。誰人（たれひと）も抗（あらが）えぬその法で、咎人（とがびと）を断つがいい……
――〝ハルパー〟、召喚！！！！」
心象世界の扉を開く詠唱が終結した途端、地獄の手の平に、重

く固い柄の感触が現れた。
そのまま、渾身の力を込めて、ぐいっと腕を後方に引く。
「くっ……む……！」
バリバリと稲妻が、右手の先から走り、何もない空間から、大きく曲がった刀身が現れ――
「はあっ！」
ついに、それは引き抜かれた。
半径五十センチほどの真円の、ちょうど四分の三の弧を切り取り、そのまま刃にしたような、剣というよりは鎌に近いようなデザイン。しかし、鎌と呼ぶにはそれは巨大すぎた。
剣先から柄頭まで一メートルと三十センチ。剣としては一般的なサイズだが、刃が大きく弧を描き、また幅も広いせいで、表面積は比べ物にならない。
「久しいな……」
地獄は、かなりの重量があるその剣を地面に突き立て、まじまじと見つめた。
こいつとはメデューサ討伐戦以来、実に三千と数十年ぶりの再会。前々回・前回のテュフォーン戦では、テュフォーンの事情を察して情けをかけたゼウスがこれを持ち出すことを許さず、手にするどころか拝むことも叶わなかった。
借り物ではあるが、それなりに愛着のある品だ。いつかまた、共に戦える日が来ればと、期待はしていたのだが……その久々の敵が、あのような年端もゆかぬ少女であるとは。
「……」
いや、もとより迷いなどない。アンドロメダとの結婚後、ティリンスの王として君臨していたころに、非情な決断を迫られることは何度もあった。
意を決し、柄を両手でしっかりと握り、地獄はハルパーを振り上げる。
「悪く思うな。これも、貴様の選択の結果にすぎない」
少女を見据えると、ハルパーに霊気が集まってくる。照準完了の合図だ。あとはこれを振り下ろしさえすればいい。
「……死ね！」
そう言って、ひと思いに、彼は不可視の斬撃を放つ――
「っ!?」
否、放とうとした途端、彼の身体は上方に打ち上げられた。
「なっ!?」
理解が追い付かないまま、彼の身体は地上からどんどん遠ざかっていく。そんな中、地面を見下ろした彼は、さらに驚愕した。
「なんだ!?」
打ち上がったのは彼だけではなかった。彼の立っていた地面、その一区画だけが瓦礫や粉塵となって、彼と同じように、空に向かって飛んできているのだ。
「くっ！」
恐るべき速さで迫りくる、大地だったものを阻もうと、地獄が空中からアルゲニブを引き抜こうとした、その瞬間――
「はぁっ！」
「ッ!?」
一瞬、力が抜けてしまった右手から、何者かにハルパーをひったくられる。
「何者だ、貴様……っ!?」
その瞬間に、打ち上げられていた身体と瓦礫は、元の重力に従って落下を始めた。
すでに数百メートルは打ち上げられている。数年前に飴子と行った旅行で訪れた電波塔の展望台よりもまだ高く感じる。このままでは数十秒後、彼はただの肉塊と化すだろう。

だが、問題ない。
「はっ！」
地獄は両足に意識を向ける。
するとどうだろう。落下の速度は徐々に遅くなり、十秒ほどで、彼は空中に「立った」。
神々に授けられた神器のひとつ、「翼の生えたサンダル」。ヘファイストスによって現代風にアレンジされ、翼を捨てて空中歩行を可能にしたそれが、この土壇場で役に立ったというわけだ。
「どこだ、盗人！」
辺りを見回すが、ハルパーを奪い去った者の姿は無い。
「チッ……面倒なことになったな」
桃色の髪をかきむしり、アルゲニブを召喚した地獄は、再び地上へと向かうのだった。

★

「「「……」」」
数分前に怪原家から飛び立ち、やっと柚葉親水公園にたどりついた恵奈、珠飛亜、吹羅、綺羅の四人は、茂みの陰に隠れ、英雄たちの戦いを眺めていた。
「……母上。なぜ英雄どもは、父上ではなく、あの謎の生命体と戦っているのですか」
「……さあ……」
吹羅が尋ねたが、恵奈もこの状況がなんなのか、よく分からないでいた。
少なくとも恵奈の知るテュフォーンには、このような権能は無い。かといって、彼が徒党を組んで英雄と戦うなど、まずあり得ない。残念ながら、彼に味方してくれる者など、この世界には存在しないことは、十五年前のことでよく知っていた。

それに、力を貸そうとする者がいたとしても、彼は絶対にそれを認めない。これは自分だけの戦いだ、と首を横に振るはずだ。
では、あの泥人形兵団は何なのか。彼を助けることで恩を売ろうとする第三勢力か？
いずれにせよ、彼にとって良いものではないような気がするが……今戦場に出ていけば、英雄たちに敵と混同されるだけだ。何せ私たちは怪物なのだから。
「もう少し、様子を見ましょう。他に敵が潜んでいないか、探してくれる？」
「はーい」
「承知」
「う、うん」
三者三様の返答の後、娘たちは超人的な視力をもって、辺りを見回す。
その間に、恵奈は。
（……〝逆神の眼（カサンドラ・アイ）〟！）
広場をしっかりと見据え、両の眼に全神経を集中させる。
すると、彼女の見ている光景に重なるように、頭の中にイメージが浮かび上がる。
（……）
指定した時間に起きる可能性が高い未来を、頭の中に投影する異能・〝逆神の眼（カサンドラ・アイ）〟。それを使ってこの場所で何が起きるのかを視ることで、今英雄たちと戦っているのが何者なのか把握できる。
霧が晴れていくように、だんだんと鮮明になる映像。その先には――
（……!?）
この戦いの、真実があった。

「そう……そういうこと」
苦虫を噛み潰したような顔で、恵奈は拳を握った。
「視えましたか、母上」
周囲の偵察を終えたらしい吹羅が、問いかけてきた。
「ええ。これは、パパと神々との戦いなんかじゃなかった……もっと、大きなものだった」
恵奈が眉間に皺を寄せて答えると、吹羅は怪訝そうな顔をした。
「……？　どういうことですか？」
「ええ、それは――」
恵奈が答えようとした、その途端。
「お、おねえちゃんっ!?」
綺羅の悲鳴と、何かが勢いよく茂みから飛び出していく音。
「どうしたのだ、我が妹！」
吹羅が問いかけるより速く、恵奈は綺羅の方に駆け寄っていた。
しかし、既に遅かった。
「っ……」
茂みに空いた大きな穴。そして、上空へと翼を羽ばたかせる獣――珠飛亜が真の姿となり、戦場の真っただ中に躍り出ていた。
「ぴあちゃん！　戻ってきなさい！」
呼びかけるが、怪物の姿となった娘からの返事はない。
「仕方ないわねっ……」
ため息をついた恵奈の身体が、一瞬まばゆい光に包まれ、次の瞬間には、彼女の身体も空中に飛び出していた。
舞う黒い翼。牡牛のような二本の角。大蛇と化した下半身には宝石のじゃらじゃらとついた腰巻き、大きすぎる胸の見えてはいけない部分だけを、申し訳程度に隠す歪な星形のアクセサリー。この世で最も美しい異形・エキドナの姿だ。
「聞き分けの悪い子は、お仕置きしちゃうわよっ！」

一度翼を動かすだけで、珠飛亜との距離が、人の身体四つ分は縮まる。それを二度、三度と繰り返し、ついに彼女の尾に手が届く――寸前。
若い女性の声が、恵奈の動きを止めた。
「おいおい。邪魔してんじゃねえよクソババア。今、超（チョー）イイトコじゃね？」
挑発するような話し方。もともとは低い声をわざと高くしているかのような猫なで声。その全てに恵奈は覚えがあった。
「あなた……はっ……！」
鬼のような形相となり、声の聞こえてきた左側を振り返る。
「ハァーイ、おひさ～。大地の女神、ガイアちゃんだよ♪」
空中に浮き、ピースサインを決めてその場でくるっとターンしたのは、金髪ツインテールを小さな黒いボールのついたゴムでまとめ、白いブラウスとピンクのカーディガンをだらしなく着崩した、浅黒い肌の少女。下品な笑みを顔に貼り付け、肉感的な肢体で同性さえも誘惑するような色気を放つ彼女は、スカートのポケットからスマートフォンを取り出し、
「うん、今日も決まってるっ！」
パチパチと自撮りを始める。数枚撮ったところで、やっと彼女は恵奈のほうに目を向けた。
「エッキー、めっちゃ久々じゃん。ちょうど十五年くらいだっけ？　いーや、忘れちゃった」
「ふざけないで。何をしに来たの」
恵奈が敵意も露わに睨みつけると、ガイアは腕を組み、鼻につく笑みで言葉を返した。
「はーん？　何って、今起きてることの全部ですけど？」
「……全部？」
その意味が理解できず、恵奈が眉根を寄せると、ガイアは「や

れやれ」と言うように首をかしげた。
「だから。英雄どもを邪魔したり、天界を滅ぼしたりとか」
「っ……!?」
恵奈は耳を疑った。
「天界を、滅ぼす!?」
「うん、そうだよー。なんなら試しに行ってみな？　たぶん何もかもなくなって、見渡す限りの荒原になってるから」
確かに、不可能なことではない。彼女の権能・〝梵天掌握〟は、自然現象すべてを操る力を持つ。この星と同じくらいの広さしかない天界なら、荒野にすることなど朝飯前ではある。だが、まさか本当に実行に移してしまうとは。
恵奈が呆気にとられていると、ガイアは何かを思いついたように、口の端を吊り上げた。
「ああ、行こうっつっても無理だったねー。自由に世界を移動できるあんたの夫は、私が破滅させちゃったもんねえ！」
「……っ！」
十五年前、ただ享楽のためだけに恵奈たち家族を人質にとってテュフォーンを脅し、彼に世界を滅ぼさせようとしたのは、この女なのだ。この女さえいなければ、自分たちはゼウスの黙認によって平和な生活を送れていたし、星座が消え去るようなことにもならなかった。
今すぐにでもこの女を殴り飛ばしたい衝動を、恵奈はぐっと抑え、彼女に背を向け、遠ざかっていく珠飛亜に向かって羽を動かそうとした。
が、
「よそ見してんじゃねえよ」
瞬時に目の前に回り込まれ、行く手を阻まれる。
「どきなさい。わたしは忙しいの」
「私だって、暇だからっててめーにちょっかい出してんじゃねーよ。あのままにしといたほうが、面白くない？」
そう言って、ガイアは珠飛亜の飛んで行った方向を指差した。
「……？　何があるというの？」
「てめーの目は節穴かよ。もっとよく探せ」
言われるまま、恵奈は真っ暗な夜空に目を凝らす。すると、
「うそ……あれは……そんなっ」
その先に。一部分だけ、空間のベールのような球体に包まれた、ひとりの少女がいた。
虚ろな目で眼下の世界を見下ろす彼女は、恵奈が確かに知っている人間だった。
「あれは確かに、りーくんの同級生の！　なんで、あの子がっ」
「ははーん、驚いた？」
恵奈が驚愕すると、ガイアは腕を組み直す。
『なんで？』って今言った？　それはどっちの意味？　凡人と思っていたヤツがこんなところにいるから？　それとも……てめーの夫の権能を、なぜ使ってるのかって？」
そう……恵奈が驚いたのには、二つの理由があった。
ひとつは、見知った顔の人間がなぜここにいるのかということ。だが、それよりも重要なのが、ガイアが言った二つ目の理由だ。
なぜ、この少女は自分の周囲の空間を捻じ曲げている？
「気になる？　気になるぅ？　教えてあげよっか？」
組んだ腕で胸の谷間を強調しながら、ガイアが空中を歩いてすり寄ってくる。
「くっ……！」
「素直に言っちゃいなよ、聞きたいってさぁー。ガキの事なんかどうでもいいから教えてほしいって言えよ。なあ！」
「黙りなさい！」

詰め寄るガイアを振り払い、恵奈はホバリングを解いて飛翔した。彼女にとっては、今そこにある謎よりも、娘のほうが優先すべきだった。

しかし――

「がはぁっ!?」

飛び出した彼女の身体に、文字通り、電撃が走った。

「あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ !?」

同時に、ゴロゴロと言う轟音が辺りに鳴り響く。バリバリと身体が振動し、恵奈の身体を焼き焦がす。

「いいかげん調子乗ってない？　私(あーし)を誰だと思ってんの？

〝始原の五神(オリジナル・フィフス)〟のひとり、大地様(ガイア)なんですケド？」

いやらしい笑いをかき消し、怒りを湛(たた)えた表情のガイアの頭上には、いつのまにか黒い雲が集まっていた。

これこそ、自然現象を自在に操作する権能の力。瞬時に雨雲を発生させ、恵奈に雷を落としたのだ。

身体から煙を上げながら落下していく恵奈に、ガイアは再び嘲笑を向けた。

「ババアはおとなしく寝てな。何もできずに、すべてが蹂躙されていくのを眺めながらなぁ！　あっははは！」

★

さて、突然飛び出した珠飛亜はというと。

（……悪い冗談はやめてよ。なんで、キミが）

宙に浮かぶ少女に向かって、一直線に飛行を続けていた。

常人の数倍の視力によって夜闇を見渡したとき、彼女の目に映ってはならないものが映ったのだ。黒いドレスを身に纏い、ところどころ黒のメッシュが入った長い金髪を夜風になびかせる少女は、少し様変わりはしていたが、まぎれもなくいつぞやのストーカー女だった。

詳しいことは分からない。だが、何か彼女が悪事に手を染めている事だけは、無感情に両手から人形を生み出し続けるその行為から見て取れた。

本来なら自分には関係のない人間。しかし、珠飛亜はどうしても他人事には思えなかった。

彼女は、理里のことが好きだと言った。理里のことを何の遠慮もなく溺愛できる珠飛亜がうらやましいと言った。だが、珠飛亜からしてみれば、むしろ彼女の方がうらやましかった。

確かに姉という立場でなら、理里と臆面なくイチャつくことはできる。しかしその立場にあるからこそ、珠飛亜と理里が結ばれることは永遠に叶わない。こんなにも、誰よりも、世界でいちばん愛しているっていうのに。

でも、他人である彼女なら何の障壁もない。珠飛亜を阻む『最後の一線』が、彼女と理里の間には存在していない。

だから、彼女にはがんばってほしかった。一途に、盲目的なまでに理里を求める姿に、いつしか自分を重ねていた。彼女にならば、りーくんを任せても構わないと思った。

なのにお前は、こんなところで何をしているんだ。そう思ったら、居てもたってもいられなくなって、飛び出してしまった。

『グオオオオオオオオッ！！！！』

翼の生えた人面のライオン・スフィンクス。珠飛亜の真の姿だ。耳まで裂けた口を顎が外れるほどに開き、彼女は咆哮した。

突進し、細身の少女に、その身体が衝突する――

（っ!?）

寸前で、獅子の巨体はぎゅいんと進む方向を変え、上方に飛ん

で行ってしまう。
（やっぱり……こいつに、まともな攻撃は当たらない）
以前に戦ったときも、この妙な能力で、珠飛亜の攻撃はすべて彼女に届かず、アサッテの向きに行ってしまった。これをなんとかしない限りは、かすり傷さえ負わせられない。
上空に留まり、攻略法を思案しようとした時。
「……？」
彼女が、こちらを見上げていることに気付いた。虚ろな目で、異形となった珠飛亜の目を、しっかりと見据えている。
（なんのつもり？　……いや。もしかして）
閃いた珠飛亜は、目を閉じて、翼だけを残して変身を解く。
筋肉でごつごつとした怪物の身体から、スマートな肢体に戻った彼女は、先ほど自分の突進を曲げられたギリギリの位置……ちょうど、相手の手が届く距離まで近づいた。
「久しぶりだね」
彼女に聞こえるかどうかは分からない。それでも、攻撃が届かない以上、これが唯一の賭けだった。
「わたし。りーくんのおねえちゃんの、怪原珠飛亜だよ。あのときはいろいろひどいこと言って、ほんとにごめん」
ごめん、で許されることではないのは承知の上だ。今は、この子に語りかけることが重要だ。
「りーくんが他の誰かにとられちゃうなんて、認めたくない。わたしは、ずっと、ず――――っと、りーくんといっしょにいたいの。……だけど。だけどさ」
なぜだろう。何度も、確認してきた現実のはずなのに。なぜ、視界が曇っていくんだろう。この瞳から、涙がこぼれ落ちていくんだろう。
「わたしはっ……わたし……わたしは……」
滞空したまま、珠飛亜はその場で泣きじゃくりはじめた。
出てこない。決定的な一言が、出てこない。これを伝えなければ、彼女には分かってもらえないのに、どうして。
「ひくっ……ひっく」
何度も目をこすり、涙を拭う。言え。言わなくちゃだめなんだ。これを認めなくっちゃ、わたしも、この子も、前に進めない。だから震えて、わたしの声帯。動いて、私の唇……！
「……！」
思いが通じたのか。目の前の彼女が、動いた気配があった。
「！」
ぱっと顔をほころばせて、珠飛亜は頭を上げた――
そして、絶望した。
確かに。確かに、彼女は動いていた。手が届きそうなほどのその先で、先ほどまで空中に直立不動だった彼女は、開いた右手を珠飛亜の方に向けていた。
生気など欠片もない、機械のような表情で。
「っ……」
涙は引いた。その顔が、あまりにも冷酷すぎたから。
殺気を感じた。何らかの攻撃を仕掛けてくる気だ。しかし、珠飛亜の身体は動かなかった。
かざされた手の先、珠飛亜の目の前の空間に、裂け目が開き、少女の姿がより鮮明になる。
「あ……あ……」
少女の右手に、黒い液体の渦のようなものが発生する。逃げろ、と理性は警告する。でも、翼は呆けたように一つ覚えで滞空を続けたままだ。
「……」
ズドン、という重い銃声のような音と共に、黒い液体は撃ち出

された。正面から珠飛亜の身体にそれは直撃し、一瞬にして彼女の身体を覆い――

次の瞬間には、珠飛亜の姿はその場に無かった。

★

「ククク。なかなかに善戦してくれるではないか、英雄ども」

親水公園の西側にある柚葉市立図書館、その屋上。眼下に広がる戦場を、まさしく神の視点で眺める男がいた。

その男の身体は、『黒』に覆われていた。腕や左胸など、ところどころに白いローマ数字が浮かび上がっている程度で、服を着ているのか裸なのかも分からない。ただ、古代ローマ風の兜をかぶっていることだけは見て取れる。

男……いや、その神の名はクロノス。かつて天界を支配したが、ゼウスによってその王座を追われ、タルタロスの深淵へと幽閉されていた前時代の神王。

三か月前、深淵から脱獄した彼は、ガイア、ルシファー、タルタロスと同盟を結び、今日この日、天界に戦を仕掛けることを企てていたのだ。

当初の予定では、タルタロスが天界を全て飲み込み、その後クロノスが人界に神の存在を宣言し、人界と天界の新たな支配者に返り咲くはずだった。が、テュフォーンの出現によって、神々の戦力の一部が人界に漏れてしまったことにより、少々予定が狂ってしまった。

だが。それもまた面白い、とクロノスは考えた。

一気に滅ぼしてしまったのでは味気ない。ならば、一旦タルタロス様には休んでいただき、最後に残った英雄と神々は、我が自ら倒そうと。そして、我の力を存分に見せつけ、屈服させるのも一興だ。

「新しい王サマは、戦が御趣味かい？」

傍らで問いかけたのは、車椅子に座った少女……いや、少年。黒く艶のある髪を腰まで伸ばし、上下グレーのスウェットという気の抜けた格好の彼こそ、〝始原の五神（オリジナル・フィフス）〟の一柱・タルタロス。先ほど天界に赴き、その全てを飲み込み滅ぼしてきたところだ。

「いいや、あまり好かぬ。流血は痛ましく、悲しいものだ。だが、それが起きるのが正しい戦いであれば話は別だ」

戦場から視線を逸らさずに、クロノスは続ける。

「これは我の、そして人間たちのための理想の世界を作り上げるのに必要な戦い。人を導くという使命を忘れた当代の神々を駆逐し、輝ける楽園を取り戻す。その道を阻む者を、我はもはや『人』とは思わぬ」

「……ふーん」

興味なさげに、タルタロスは車椅子から立ち上がり、屋上のへりに立つ。

「それじゃ僕は、戦場見物でもするとしようか」

そう言い残して、彼は屋上から飛び降りた。

「……」

落ちていくタルタロスを、クロノスは黙って見つめる。

「……フン。今のうちにせいぜい楽しんでおくがいい。貴様らもいずれ、我に滅ぼされるのだからな」

でなければ、あの者と言葉を交わしたりなどするものか。

タルタロスだけではない。ガイアもルシファーも、クロノスにとっては一時的に利用しているだけの存在に過ぎない。自分は正義と戦わなくてはならなかった。そして正義に勝てるものが悪だった。だから悪を利用した。それだけだ。

いや、自分自身、利用されていることは分かっている。そもそ

も、ゼウスの人界に対する放任をクロノスに教えたのは、他ならぬガイアだ。だが、あの女の動機がその状況に対する問題意識などであるはずがない。あの女は常に混沌を求めている。此度もまた、より大きな混沌を求めて、我に声をかけたのだろう。
ルシファーはさらに始末が悪い。奴が求めているのは、混沌の中でも血と狂乱だ。天使でありながら、歪んだ性質を持って生まれてしまったあの男（女？）は、我が知る中でも最も醜悪な生物だ。あれは生かしておくことさえ許しがたい。
だが、そのような悪と手を結んでいでも、我は理想を遂げなくてはならない。それが、力を持って生まれた者の義務なのだから。
「さて。そろそろ行くとしようか、我が同志よ」
力強い声で言い放ったクロノスの後ろには、彼と同じく身体が真っ黒に染まった、十一の人影が跪いていた。

★

「姉上！　姉上ええええええええ！！！！」
「ひゅら、だめっ！　今行ったら、あぶないよっ」
母に続き姉が屠られたことで理性が決壊したのか、飛び出そうとする吹羅を、綺羅はどうにか羽交い絞めにしてその場にとどめた。
吹羅に飛行能力は無い。綺羅には、無いことはないが、翼を解放すると恐ろしい事になる。ゆえに、上空にとどまるあの敵を今すぐに飛んで行って殴りつけることはできないし、雷を降らせてくる相手に対抗できるかどうかは、正直怪しい。
見たところ、あの二人は英雄サイドではないようだ。黒いドレスの女性が人形を生み出し続けているのが何よりの証拠。そしてそこに向かう姉を止めようとする母を阻んだあのギャルも、その味方とみていいだろう。
ならば、きっと英雄たちが倒してくれる。今自分たちにできることは……。
「おちついて、ひゅら！　とりあえず、ママを助けようよ！」
暴れる吹羅に、綺羅は背中から呼びかける。
倒れた母をあのままにしておくのは危険だ。人形たちに襲われるかもしれないし、英雄たちに踏みつけられてしまうかもしれない。まずは彼女の回収が先だ。
綺羅の言葉に、吹羅はハッと気づき、やっと動きを止めた。
「はあ、はあ……すまない、取り乱してしまった」
「いいよ。はやく、ママのところ、行こ」
申し訳なさそうに肩をすくめる双子の姉に優しく微笑みかけて、綺羅は前方に視線を移す。
恵奈が落ちてきた場所までの距離は二十メートルほど。その間、泥人形と戦う英雄たちをくぐり抜けていかなくてはならない。
「まずは母上の回収だったな。姿を変えて行くか」
「うん」
互いにうなずいた二人は、目を閉じて、全身に力を込める。すると、変態が始まった。
吹羅の身体には、だんだんと緑色の鱗が生えはじめ、両脚が癒合し、ひとつになって伸びてゆく。複雑な髪型はほどけ、側頭部からは二匹の蛇がにょきりと生える。
そこまで変化したところで、突如、衣服を突き破り、彼女の腰から一匹の大蛇が顔を出した。見る見るうちに、二匹目、三匹目、四匹目と増加し、それは六匹目でやっと止まった。
そして完成したのは、上半身はところどころ鱗が生えた人間の身体、下半身は大蛇、そして腰から六匹、頭から二匹の蛇を生やした、グロテスクな外見の怪物。二つに割れた舌を、唯一人間のものである口からチロチロと出し入れし、唇を舐める。

綺羅のほうは、白い肌から漆黒の布が生えてきて、それが彼女の身体をぐるぐる巻きに拘束する。
その状態から、さらなる変化が始まった。ばきっ、ぐしゃ、ごきっという、関節が外れるような生々しい音と共に、身体の部分部分が巨大化し、筋肉が発達していく。口には牙が生え、布のところどころから、金色の毛がはみ出す。
やっと不快な音が止んだ時、四本足でそこに立っていたのは、拘束具で厳重に縛られた、ライオンとおぼしき生き物だった。最後に全ての足首に、バスケットボール大の鎖付き鉄球が現れ、そこで変化は止まった。
九つの頭を持つ不死の毒蛇・ヒュドラと、獅子の前半身・山羊の後半身・蛇の尾を持つ怪物キマイラ。可憐な少女たちが隠し持つ、醜い本当の姿だった。
「さて、行くか！」
『グルル』
変身前と変わらぬ声で気合を入れる吹羅に、綺羅は唸り声で返す。珠飛亜や恵奈、吹羅と違って人の顔を持たず、また他の家族ほど自分の力をコントロールすることもできない綺羅は、変身すると言語機能を失ってしまうのだ。
意を決して、ふたりは茂みから飛び出した。
「わあっ?!」
「何だ、新手か?!」
混乱する英雄たちを他所に、ただまっすぐに、二人は母の元へと駆け寄る。
「攻撃は我が防ぐ！　母上をくわえて、速やかに離脱しろ！」
『グルル！』
了解、と言うように、綺羅は獣の声で答える。
幸いなことに、英雄たちは人形の相手で精いっぱいのようで、邪魔はしてこない。あと少し、あと少しで、ママのところにたどり着ける――
『グオオ?!』
その直前。綺羅の目の前の地面が、噴き上がった。間一髪、綺羅は立ち止まる。
「なぁ。ここは神と神の戦場だぜえ？　そんなところに、どうしてめえらみてえな異端者（イレギュラー）がいるんだぁ？　なあ流楠（るくす）」
「おうともよ、兄貴。今ここにいていいのは、『英雄』と『神』と、そして『悪魔』だけだよなあ」
土煙の向こうから、よく似た若い男の声がふたつ。
「何者だ、貴様ら！」
吹羅が隣で叫ぶ。すると、ふたつの声は同時に「くっくっく」と笑った。
「何者だ、と聞かれたら名乗るしかねえかなあ。なあ流楠」
「おうともよ、兄貴。それが礼儀ってもんだよなあ」
煙の向こうで、何かが動いた気配がした。すると、
『「?!」』
立ちこめていた土煙は、みるみる地面に戻っていく。
そして……すっかり元通りとなってしまった地面の、その向こうに立っていたのは、髪を虹色に染め、じゃらじゃらと体中にアクセサリーをつけた、瓜二つの二人の男たちだった。
綺羅たちから見て右側の男は、右手に指の部分が無い手袋、そしてところどころに赤い宝石のアクセサリーをつけ、左側の男は、兄と左右対称になる場所に青い宝石のアクセサリー、そして左手に裏返しになった、兄と同じデザインの手袋をはめていた。
綺羅たちが警戒心ＭＡＸで彼らを観察していると、右側の男が、口を開く。
「俺は鹿縞木（かしまぎ）　洲斗（しゅうと）。こいつは弟の流楠（るくす）だ。……つっても、前世

の名の方がよく知れ渡ってんだがなあー。
おいクソガキ。『ふたご座』って名前くらい、さすがに聞いたことあるよなあ？」
「何っ!? 貴様ら……まさか」
吹羅が驚きを露わにすると、流楠がケタケタと笑う。
「ああそうさ。占いなんかでも有名だろ？ 俺たちはソレだ。
〝黄道十二星将（ゾディアック・トウウェルブ）〟が一角、双子座のカストルとポルックス。それが俺たちの前世だ」
〝黄道十二星将（ゾディアック・トウウェルブ）〟。全天八十八星座の英雄たちの中でも、ペルセウスやヘラクレスを除き、最強クラスの力を持つと言われる十二人の英雄たち。
「そんな大物が、いったいこんなところで何をしている！ 見たところ、英雄の味方と言うわけでもないようだが」
「くっくっく、こりゃあ驚いた。こいつ、ガキのくせに見る目あるじゃあねえか」
いやはや恐れ入った、と洲斗は頭をボリボリと掻く。
「確かによお、ゼウスの旦那にゃあ感謝してるよ？ 俺のあとを追って死にたいって言ったこいつに胸を打たれて、あのおっさんは俺たちを星座にしてくれた。けどよお……」
「おうともよ、兄貴。なんかさ、暇なんだよ」
「……何？」
双子の言葉に、吹羅は耳を疑った。
『星座の中』じゃあ、なんかおもしれえことねえかなー、って毎日退屈してたよ。そしたら、ちょうど十五年前だ……あの魔神（テュポーン）が、とんでもねえことやらかしてくれやがった。
あの絶望感、あの混沌……もうね、俺たちゃ心が震えたよ。世界にゃあこんな刺激的なモンがあるんだ、ってな。奴の捜索のために転生させられたわけだが、こっちとしてはサインでも頂きたいくらいだ。なあ流楠」
「おうともよ、兄貴。本当に心酔して、あいつのことを可能な限り調べ倒して、探し回ったさ。
でも、その過程でなあ……気づいちまったんだよ。優秀な俳優を生かすのには、優秀な監督が、常に必要だったってことにな」
「……何が言いたい？」
吹羅が眉間に皺を寄せると、洲斗と流楠はニヤリと笑う。
「つまりは、今あそこに浮かんでる黒ギャルさんが、俺たちの『監督』ってことさ。ここにいる全ての人間と神を操っているのは、あのお方なんだ。なあ流楠」
「おうともよ、兄貴。それも今だけじゃない。十五年前も、その前も、神々の戦いにはみんなあのお方が関わっている。そんなビッグネームの下で働けるなんて、これ以上の名誉があるかい？」
「……そんなことのために」
双子のニタニタ顔が、吹羅には腹立たしくなってきた、拳を握り、キッと二人の顔を睨む。
「そんなことのために、恩人を裏切ったというのか？ ただの自分たちの楽しみのためだけに？」
すると、双子は。
「「ああ、そうだよ？」」
当然のように、何の悪びれもなく、そう答えた。
「だってよう、恩義じゃ人は生きていけねえよ。てめえら怪物はどうか知らねえがよお。人間の人生にはエッセンスが必要なんだ。なあ流楠」
「おうともよ、兄貴。楽しみっていうスパイスがなくっちゃあ、そりゃ死んでるのと同じだ。そう考えたら、俺たちの行動はごく自然じゃないか？ 人間らしい営みだろ――」

どがん。
「……おいおい、何しやがる」
グラウンドをえぐる音。先ほどまで黙って話を聞いていた綺羅が、ついに動いたのだった。
『グルルルルルルル』
先ほどまで洲斗たちが立っていた場所には、彼女の爪が突き刺さっている。直前で双子は逃れたが、あと一歩遅ければ、彼らは無残に肉片を撒き散らしていたことだろう。
「ああ。ああ、我が妹よ。お前の怒りは分かるとも」
蛇の下半身をのたくらせ、吹羅は綺羅に歩み寄り、筋肉の盛り上がったその肩を撫でた。
「人間でない異形の存在である我々でも分かる。貴様らのその行いは、人の道に反している。恩義を忘れ、自分の快楽だけを追い求める貴様らの姿は、もはや人間ではない。それは、異形にも劣る、ただの犬畜生だ」
「……ああ？」
吹羅の言葉に、双子はついに笑みを崩した。
「きっと貴様らの『監督』とやらも、同じ心理で動いているのだろうさ。つまり、貴様らは全員まとめて駆逐されるべき害獣だということだ」
一時も目を離さず、吹羅は啖呵を切る。
「ここにいていいのは、『英雄』と『神』と『悪魔』だけ……だったか？　いいや、それは違うな。これは本来、我らの父・魔神テュフォーンと、英雄との戦いだ！　断じて、貴様らなどに水を差されてよいものではない！」
英雄を倒し、神を倒し、我らは真の安寧を手に入れる。ここで行われるのは、そんな戦いだったはずだ。それを邪魔し、汚したこいつらを、断じて許してなるものか。
「行くぞ、綺羅。こやつらに、本当の双子の絆というものを見せてやろうではないか」
『グルオオオオオオオオ！！！！！』
獅子の雄叫びが、夜空に響いた。

★

「珠飛亜先輩っ?!」
珠飛亜が消滅するのを、紫苑も人形と戦いながら、しっかりと目撃していた。
そして、それを行ったのは、間違いなく。
「マロン！　どうしてこんなことを！」
美しかった金髪にはところどころ黒が混じり、雰囲気もかなり変わっているが、あれは間違いなく、紫苑の生前のクラスメート、公領真龍（くりょうまろん）だ。
「目を覚ませ！　お前は、ただの人間だろ！」
真龍は人当たりのいい性格だったため、紫苑とも多少は仲良くしていた。それゆえに、この現実は信じ難かった。きっと悪い奴に騙されて、こんなことをさせられているんだ。
呼びかけ続けていると、彼女がこちらを向くのが微かに見えた。
「聞いてくれ、マロン！　あたしだ、紫苑だよ……っ?!」
しかし。その返答は、先ほど珠飛亜を消し飛ばした、黒い泥のようなものだった。
ギリギリでかわすと、それはビシャッと音を立ててペンキのように地面を黒く染めた。
「話を聞け……くっ」
呼びかければ呼びかけるほどに、泥の雨は激しくなる。
「そっちがその気なら……あたしだって、手加減しない！」

自分の心に刻むように叫んで、紫苑は跳躍した。すると、腰に巻いていたベルトにつけられた三つの青い宝石が、光を放ち、舞い上がる彼女の身体を加速させる。
「オリオンのベルト」と呼ばれる、彼女の腰にあたる三つの星。それを天装に変えたものだ。
「はああああああああああああっ！！！！」
襲い来る泥を全て躱しながら、瞬時に真龍と同じ高さにたどり着く。そして、
「オオオオオラアアアアアアアアアア！！！！」
もう二つの天装である籠手・ベテルギウスとリゲルを嵌めた手で、全力の右アッパーを、彼女の顎に叩き込もうと――
「っ……」
しかし。真龍が右手を下から上に挙げると、それはヘファイストスの砲撃や珠飛亜の突進のように、唐突に軌道を変え、紫苑の身体は右方向に飛ばされた。
（ダメか……でもっ！）
「ウラアアアアアアアアアア！！！！」
もう一度、紫苑は攻撃を試みる。
「ッ！」
またしても攻撃は逸らされる。紫苑は地面に突っ込んでしまう。だが、もう一度
「!?」
顔を上げると、泥が飛んできていた。瞬間、珠飛亜が消滅していくさまが頭をよぎる。
すぐさま右側に身体を転がす。だが、その動きに沿って、二、三発目が飛んでくる。
「くっ！」
今度は前に身を投げ出す。だが、そこにも飛んでくる。とっさに地面についた右手を軸に、身体を回転させ、ブレイクダンスのような動きで身をかわした。右脚を泥がかすめそうになった。
そのままの動きで、後方に飛び退き――
ごつん、と背中に何かがぶつかった。
「がはっ!?」
それは、このグランドに点在している街灯だった。金属の柱に背骨をしたたかに打ちつけ、激痛が走る。
そして、その隙を見逃してくれるほど、頭上の少女は甘くない。
「！！！」
三つ。ここぞとばかりに、三つも泥を同時に飛ばしてくる。
かわそうとするが、背中の痛みが、紫苑の身体を自由に動かさない。
「っ――――」
敗北を覚悟した、その時。
「はあっ！」
シュン、と斬撃が閃き、三つの泥は同時に一刀両断され、紫苑と、その前に立った人物を避けるように通り過ぎていった。
「ったく。余計な手間をかけさせるな」
「お……おまえは」
なびく薄いピンク色の長髪。白いマント。さほど身長は高くないが、その殺気は彼を本来の身体よりも大きく見せた。
「邪眼（じゃのめ）、地獄（へる）！」
「くっ……！」
真龍の泥から紫苑を守り、彼女の目の前に立ちはだかった地獄。だが、その泥を立ち切った天装・聖剣アルゲニブが、彼の腕を引っ張っていた。
「なんだ……何が起きてるっ……！」
その剣が向かう先は、「泥の中」。刃にこびりついた泥に、剣が

引きこまれようとしているのだ。
（そうか……そういうことか！）
その現象を目にし、紫苑は先ほど珠飛亜が「消えた」カラクリに気がついた。
珠飛亜は消えたのではない。この「泥」の中に吸い込まれたのだ。
「邪眼！　剣から手を離せ！」
「チッ！」
舌打ちをして、地獄はアルゲニブを放す。すると、「ぎゅいいいいいん」という、回転ノコギリのような音と共に、アルゲニブは泥の中に消え、後には、残った泥だけが地面に落ちる。
「来るぞっ！」
紫苑の警告の直後、またしても泥が飛来する。ふたりは左右に飛び退き、どうにかそれを躱す。だが、真龍はすでに次の泥の準備をしている。
「アン！」
「任せて、へーちゃん！」
地獄が呼びかけると、後ろで餡子の声がした。
『贄姫の螺鈿（アンドロメダ・ギャラクティカ）』！！！！！」
次の瞬間、数えきれないほどの青白い光の球が、真龍のもとへと飛んで行く。
「……！！」
意表を突かれた顔をした真龍は、即座に泥を消し去り、その場でなめらかな球面をなぞるように、せわしなく手の平を動かした。すると、光の雨は、それぞれ強引に真龍を避けるような動きをし、全て彼女には当たらず過ぎ去っていく。
だが。
「ふふふ、これで終わりだと思わないでください？　ママの銀河の星々は、まだまだたくさんありますよ！」
両手を上方にかざしながら、餡子は自信ありげに笑う。
真龍の周りには、まるで夜の繁華街のような眩しい光が、至るところに飛び交っていた。そしてその全てが、休まず真龍を攻撃し続ける。
「これで当面の間、この子はこちらに手出しできません！　今のうちに、策を考えてください！」
その言葉は、ここまでひとりで戦っていた紫苑にとって、何より頼もしく聞こえた。
「ありがとう、餡子さん！」
「いえいえ！　未来の娘のためなら、なんのこれしきっ！」
「だからそれは絶対に無い！」
「……ごほん。とにかくだ。どうする？」
気まずい空気に耐えられず、紫苑が口を開いた。
「そうだな。ここまで見ていた限りで、分かった事がふたつある」
「お？　何かあるのか？」
戦士の目つきで首肯し、地獄は続ける。
「奴は、空間を操作している……と、アポロン様が言っておられた。だが、その効果が及ぶのは、奴の手が届く範囲だけではないだろうか」
「なるほど。つまりどういう意味？」
ごく自然な感情で紫苑が問うと、地獄はため息をついた。
「お前な……。お前の渾身の右アッパーが捻じ曲げられたのは、ちょうど奴が腕をまっすぐに伸ばした時の手の位置と、大体同じじゃなかったか？」
「えっ……そうだったっけ」
「お前も戦士なら、それくらい観察しておけ。常に頭を働かせながら戦うんだ。

ともかく。まだ断定はできないが、奴の空間の壁の範囲が分かった。これがひとつ。そして、重大なことがもうひとつ……奴は、あの泥で攻撃する度に、空間の壁を解除している」
「あっ……」
それは、紫苑にも心当たりがあった。
最初、紫苑のパンチが逸らされたのは、真龍が珠飛亜を泥で消し去った直後だった。そして、餡子の攻撃を受けたときも、紫苑に泥で攻撃した後。
そして。その両方で、真龍は手を動かした。それによって、空間の壁が生成されていたとしたら。
「泥が放たれた直後に攻撃すれば、あいつを倒せる？」
「そういうことだ」
ニッ、と地獄は口の端を歪めた。

★

「かっ……は……」
咳き込んで、恵奈は目が覚めた。
「はあ……はあ……」
どれくらい眠っていたのかも分からない。周りでは、まだ英雄たちが、泥人形と戦っている。
公園にひとつだけある時計が目に入る。時刻は六時二十一分。
……なんだ、まだ数分しか経っていなかった。
ズキズキと痛む身体を奮い立たせ、立ち上がろうとするが、腕に力が入らない。
かろうじて動く首だけで、頭上を見上げると。真上では恵奈が墜落したときと同じように、ガイアが空中に浮いていた。
憎い。全てを壊したあの女が憎い。そして、そんな外道に全く敵わない自分が恨めしい。

そもそもの話。ガイアはこの世に最初に生まれた神々の一柱である。これが何を意味するかと言うと、彼女には『親』というものが存在していない。親の助け無しに、自分の力だけで、精霊界から人界に出てきた魂なのだ。そんな絶大な力を持った神に、メデューサの血を引いているとはいえ、一介の怪物のわたしが敵うわけがなかった。
珠飛亜はどうなったのだろう。見たところ姿が無い。もしかすると、あの子に倒されてしまったのかも――
「っ……」
その言葉を思い浮かべただけで、恵奈の心中（しんちゅう）に激情が走った。わたしは、自分の子どもを守れなかったのか。最も大切な、家族を守れなかったのか。
そうではないと信じたい。信じたいけれども、頭をよぎる可能性の現実は、恵奈を打ちのめすのに十分な威力を持っていた。
「くっ……うっ……」
涙がこぼれる。一歩も動けない無力感で、戦う英雄たちを眺めながら、恵奈は泣いた。
「ひっく……くっ……うう……」
果たして、自分の敵とは何だったのだろう。ここにいる英雄たちだったのだろうか。ああ、間違いなくそれは正しい。この者たちは、わたしの愛する人を殺すためにここに来たのだから。
でも。もっと別の、本当にわたしが倒すべき相手が、いたんじゃないのか。身命を賭して挑むべき相手が、いたんじゃないのか。誰のためでもなく、わたしの信条を守るために、戦うべき相手が。
そう、わたしが、倒すべき相手は――
「くっ……！」
その者の顔を思い描き、その者をキッと見据えた途端、動かなかった身体が、動いた。

手を砂地について、身体を起こす。蛇の身体をくねらせて、とぐろを巻いて立ち上がる。
見上げた人影が動いた。こちらに気づいたようだ。
だが、何もしてこない。いつだってあの人はそう。自分が面白いと感じる方向にだけ進む。
ならばその隙、突かせてもらう。
「焼べるは我が命。熾るは我が怒り。燃ゆるは、我が魂」
右手を鎖骨の間のあたりに当て、恵奈は詠唱を始める。
「全てを灼き尽くし、断ち斬り、灰燼へと帰す煉獄の焔よ。幾重にも揺蕩う服膺の一欠片を喰らい……今こそ、我が命に応えよ！」
すると、手の甲から、黒い炎が発生する。その右手を真上に掲げる。
「魂魄転生……」
炎はゆらぎ、やがて何かの形をとりはじめる。右手の部分は細く短く、その先は太く大きく、しかし薄く。
『黒燄煉劫儛』第一形態〝巨剣〟」
そして完成したのは、刃が極端に大きな、黒い炎でできた剣。幅は約一メートル、長さは刃の部分だけで二メートル近く、柄も入れるとそれ以上。
これこそ、恵奈のもうひとつの異能・『黒燄煉劫儛』。記憶をランダムにひとつ消費することで、決して消えない黒い炎の武器を作り出す。
しかし。
「焼べるは我が命。熾るは我が怒り――」
彼女の詠唱は、それだけでは終わらなかった。

「――今こそ、我が命に応えよ！」
二度目。黒い炎の鎧、狂戦士の鎧が、彼女の上半身を覆う。そして、鎧の肩口から、左右二本ずつ、合計四本の腕が飛び出した。
だが、まだ彼女は止まらない。
「焼べるは我が命。熾るは我が怒り――」
三度目。二本の、脇差ほどの長さの剣――双剣が現れる。彼女は、右手にあった巨剣を一番後ろの左腕に持ち替え、真ん中の腕に双剣を持たせた。
四度目。死神が持つような狩鎌が、奥の右手に現れる。
五度目。彼女本来の左手が、オーソドックスな槍を掴む。
六度目、最後の詠唱。残る一番手前の右手に現れたのは、柳葉刀……俗に「青龍刀」と呼ばれる、中国に古くから伝わる刀の、刃を取り外して長い棒の先に取り付けた、なぎなたのような武器。三国志の英雄・関羽の愛用品として名高い、偃月刀である。
剣、双剣、偃月刀、槍、狩鎌、そして鎧。六種類すべての武器を同時に扱う、『黒燄煉劫儛』の終極形態。
「全形態〝究極戦女神〟」
目指すは宙に浮かぶ大地。この世で最も美しき異形、そしてこの世で最も醜い天使は、飛翔する。

★

『グルオアアアアアアアア！！！！』
獅子となった綺羅は、跳躍し、双子に襲いかかる。

「「おっと、危ねえ」」
双子は左右に飛び退き、それを避ける。が、
「はぁっ！」
そこに、後方にいた吹羅の腰から生える蛇たちの口から、一斉に強酸性の毒液が発射される。
「おお!? 何しやがる！」
「あぎゃー！ 俺のズボンがぁ！」
それは洲斗の靴の先端を溶かし、流楠のズボンの裾に穴を空けた。
「てめえ、毒はずるいだろ！」
「そーだそーだ！ てめーが言ってた、人の道に反するってやつじゃあねえのかあ!?」
「あいにくだが、我は人間ではないのでな！ 何をしても構わんのだ！ クハハ！」
言い放ちながら、吹羅はさらに毒液を浴びせかける。それをかわしたところに、さらに綺羅が飛びかかる。
「くははは！ 跳ね回れ、逃げ回れ！ そうら、肉が溶けるぞ！ あーっははははは！」
『グオオオオ！！』
近距離で綺羅が攻め、中距離で綺羅が援護射撃。コンビネーションのとれた二匹の戦闘スタイルに、鹿縞木兄弟は翻弄される。
「チッ……なめんな、クソガキャあ！」
振り下ろされる綺羅の爪をなんとか避け、二人は一旦距離をとる。
そして、洲斗は右手、流楠は左手を、地面に当てた。
「〝慈光(ホワイティ・クラウン)に包まれし謙虚な道化〟……！」
「〝闇(ブラッキィ・オーギュスト)に染めにし愚かな道化〟……！」
前者は毒液の射程まで近づこうとする吹羅の足元、後者は跳びかかってくる綺羅の真下に、意識を集中させる。
「『回帰(リターン)』！」
「『逆転(リバース)』！」
瞬間。はじめの邂逅の際と同じように、綺羅の足元の地面が、地雷でも踏んだかのように爆発する。
『グオオオ!?』
「綺羅っ!?」
綺羅の巨体は爆風に打ち上げられ、上空にすっ飛んで行く。
いや。飛んでいると表現するには、その軌道はあまりに直線的すぎた。的確に言うならば……それはまるで、落ちているかのようだった。
「貴様ら！ 綺羅に何をした……む？」
しかし。それを行ったはずの双子の、その片割れ……洲斗は、思わぬ事態に混乱していたようだった。
「おい、どういうことだよ……！ なんで、なんで『回帰(リターン)』が発動しない！」
〝慈光(ホワイティ・クラウン)に包まれし謙虚な道化〟。右手で触れたものを『回帰』させるその能力は、確かに洲斗の意思によって発動され、ヘビ女の足元の地面を原初の地球の状態まで巻き戻し、灼熱の大地で彼女を焼き殺すはずだった。だが、その能力が発動しない。弟の異能はちゃんと発動し、あの獣の周辺の重力を『逆転』させ、天高くまで敵を吹き飛ばしたというのに。
「兄貴、どうした!?」
洲斗の異変に、流楠も気づき、一瞬、吹羅から目を逸らす。
それを、吹羅は見逃さなかった。
「はあっ！」
距離を詰め、射程内に入ったところで、毒液を放つ。

「チッ！」
舌打ちをするが、双子はその場を動かず、流楠が左手に力を入れる。
『逆転（リバース）』！」
すると、再び地面が噴き上がり、毒液はそれに巻き込まれて、上方へと向きを変える。それと同時に、綺羅の居たあたりでは地面の上昇が止まり、土や岩が、バラバラと本来の方向に落下し始めた。
「ふう……ありがとよ、流楠」
「お、おう。でも、どうしちまったんだよ兄貴。右手が発動しないなんて」
「ああ……何かの間違いだとは思うけどよ」
きっと、集中の度合いが足りなかったのだ。こういうこともあるさ、と自分を納得させて、洲斗は土煙の向こうに意識を向ける。
おそらく奴は、目の前に噴出する土の柱を回り込んでこちらに攻撃してくるはず。ならば。
「流楠。『逆転』を解いて、さっきの黒いのに効果を移せ。お前はあっちに集中しろ」
「了解、兄貴！」
洲斗に言われるまま、流楠は目の前の重力逆転を解除し、
『逆転（リバース）』！」
綺羅が打ち上げられた場所に異能を再発動させる。
そして洲斗は、今度は全神経を、地についた右手に集中させ。
「〝慈光（ホワイティ・クラウン）に包まれし謙虚な道化〟」
未だ姿を現さない敵の姿を、しっかりとイメージし。
『回帰（リターン）』！」
今度こそ、確実に異能を発動させた……はず、だったのだが。
「っ！？　どうしてっ！」
やはり、地面がマグマに変わることはない。
「ククク。焦っているな、貴様」
余裕ぶった声が、降り注ぐ瓦礫の向こうから聞こえてくる。
「ふざけんな！　今日はちょっと調子が悪いだけだ、今に見てやがれ！」
（落ちつけ……心を乱すな……）
こんな経験は初めてだ。だが、俺の異能は黄道の星座の栄誉としてアポロンから授かったものであるから、通常の異能力と少し違うのかもしれない。多少の不備があったっておかしくない――
「ああ、非常に、非常に残念な話だが。いくら貴様が足掻こうと、念じようとも、その右手は応えぬぞ？」
「うるせえ！　てめえに何が分かっ……」
そこまできて、洲斗はやっと気がついた。
「てめえ……まさか」
今までの異能の不調。あり得なくはないと思った自分は愚かだった。だが、だがしかし。そんな異能など、聞いたことが無い。
「ククク。クッククククク。クハハハ、クッハハハハハハハ！！！」
やっと晴れた土煙。その先に現れた怪物は、これ以上ないほど愉しそうに嗤っていた。
「これこそが、我が異能〝穢（ヘレティカル）れた世に生まれ墜（ラ）ちた異端者の奏（プ）でる旋律は、仄暗い概念と確（グ）かな唯物論を覆（マ）す〟の力！　異能を武器とする者の天敵、異能無くして成立しないこの〝異端的行動〟は、『我の身体に触れ、我に影響を及ぼす、すべての異能による攻撃を無効化する！』」
「なあああああにいいいいいい!?」
驚きのあまり、洲斗はその場に倒れこむ。
「バカ言ってんじゃねえ！　そんなふざけた異能が、てめえみて

えな一介の怪物にあってたまるか！」
「くっくっく。ああそうさ、許されないかも知れないさ。しかし、我としても本当に心苦しいのだが……これは現実だ。そう、我こそが最強という、現実だ！　クッハハハハハ！」
天を仰ぎ、毒蛇は笑う。それは、不死の蛇龍の真なる力。
もともと、ガイアより三世代目……つまりはゼウスと同じ世代にあたる怪原家の子どもたちには、弱体化しているとはいえ、神の権能に届きそうなほど、いや、それすら超えるほどの力が秘められている。そして、現状それを最も引き出しているのが吹羅なのだ。
彼女の異能は、およそこの世に存在する全ての異形・英雄・超能力者が持つ異能の全てを凌駕し、それらの頂点に立っている。これを超える者は、生命がこの世に誕生してより数人しか現れていない、神さえ超えるほどにその才能を極めた異能者・「法（ロウズ）」しか存在していない。その新たな一人として最も近い立場にいるのも、また吹羅である。
「純粋な武技によって異形を相手にする英雄であれば、まだマシだったのかもしれぬがなあ。事実、前世の我は武技に優れたヘラクレスに敗れた。だが、異能に頼る貴様らの立場に立ったなら……相手が悪かった。そう言い訳するしかないな」
六つの蛇の頭が、鎌首をもたげる。口を開き、その舌から垂れる一滴は、ジュワリと地表の砂を溶かす。
「ま、待てっ！　忘れたのか、お前の同類の命は流楠が握ってるんだぜ！　俺に手出しをすりゃあ、即座に流楠がお前のきょうだいを、宇宙の果てまで打ちあげやがるぞ！」
「そ、そうだぜえ！　俺の〝闇に染めにし愚かな道化（ブラッキィ・オーギュスト）〟は、『逆転』のスピードを自在に調整できる！　今すぐてめえの親族を成層圏まで放りだせるんだぜ！」
洲斗は、腰が抜けて立ち上がることができなくなっていた。その態勢で両手を前に突き出し、彼は怯える顔で吹羅を脅した。流楠も、左手を地面についたまま、冷や汗を流しながら、やかましく叫んだ。
だが、吹羅は、そんな彼らに鼻で嗤った。
「ハッ、安心しろ。我は貴様らを殺しはしないとも」
「!?　どういうことだ！」
息ぴったりに動揺する双子に、吹羅は笑いをこらえる。
そして、宣告した。
「なぜなら。我が手を下すより先に、貴様らは裁きを受けるからだ」
「はあ!?　何言って――」
洲斗のその言葉を最後に、彼らが二の句を次ぐことはなくなった。
突如、空から舞い降りた轟音。そして蒼炎。彼らの視界一面がそれに埋め尽くされ。
次の瞬間、彼らがひざまずいていた場所には、二体の氷の像が残っているだけだった。
そしてその間で、大地を踏みしめていたのは。
「よくやったぞ、綺羅。お前なら、必ず戻ると信じていた」
黒い布に覆われていた身体。その背中の部分が少しほつれ、空いた空間からは、巨大な一対の青い炎の翼が生えていた。
『蒼炎以地涌紅蓮（コキュートス・ラピスラズリ）』。全てを飲み込み凍りつかせる、無限の蒼き焔を発生させつづける、綺羅の異能力だった。重力の逆転された空間から、空を飛んで逃れた綺羅は、上空でこの異能を発動し、そのまま双子に突っ込んできたのだ。
ちなみに、この場でその能力はすでに吹羅によって無効化されているため、これ以上炎が生み出されることは無い。

『グルル』
人懐っこく、吹羅の蛇となった下半身に顔をすりよせる綺羅。
「ハハッ、よせ。まだ戦いは終わっていない……次は、奴だ」
目指すは、上空に未だ留まっているギャル。先ほど恵奈が起きあがり、アレに向かっていったのは確認した。母が戦うと決めたのならば、子はそれを全力で援護するのみ。
「我らも行こうぞ。あのふんぞり返り具合、奴が双子の言っていた『監督』か？　まあよい、どの道倒すだけだ……む？」
翼のある綺羅に乗せてもらおうと、吹羅が下半身を屈めたとき。ふいに、思うように蛇の身体が動かないことに気がついた。泥の中に、だんだんと沈んでいるような。
「……何っ!?」
見ると、知らぬうちに、吹羅と綺羅の周辺の地面が、黒く染まっている。
「なんだこれはっ……！　身動きが、とれぬ！」
『グルルル、グオウ!?』
同じように、綺羅も泥に足をとられていた。だんだんと、沈んでいくのが目に見える。
いったいなんだというのだ、この現象は。〝穢れた世に生まれ墜ちた異端者の奏でる旋律は、仄暗い概念と確かな唯物論を覆す〟が発動しない以上、異能攻撃ではない。だが、それ以外には説明がつかない。
「あきらめろ、君の異能は通用しない。異能は、権能には勝てないんだからね」
「誰だ!?」
前方から聞こえた少年らしき声に、吹羅は顔を上げる。
そこには、至極気の抜けた格好の子どもが座っていた。上下はグレーのスウェット、傍らには車椅子。ポテトチップスをバリボリと齧りながら、沈みゆく吹羅たちを、ニヤニヤと眺めている。髪は艶のある黒色で、地面に垂れるほど伸ばされているが手入れはされているらしく、幼い顔立ちも相まって、性別を判断するのは困難だ。目の白い部分は真っ赤に血走り、視力があるのかどうかも怪しい。
「いやー、双子座との戦いは楽しませてもらったよ。圧倒的な無双っぷり。中学二年生が考えたようなバカ強い異能。俺ＴＵＥＥキャラとは、君のことを言うんだろうね……でも。そんな君を瞬殺する僕は、もっと無双キャラだよねえ！
僕の名はタルタロス。『深淵』とか『始原の五神の一柱』とか、いろいろ肩書きはあるが……とりあえずは、『最強の神』と覚えてほしい」
「タルタロス……だと……」
その名前に、吹羅は顔を顰めた。
先に名乗ったものは然り、彼にはもう一つ、吹羅たちにとって重要な肩書があったのだ。
「お祖父様！　あなたが、なぜ、こんなところにっ」
「ん？　お祖父様だって？」
彼は、魔神テュフォーンの父。つまりは吹羅たちの父方の祖父だ。
「ああー。君らもしかして、テュフォーンのガキ？　ずいぶんと大きく育ったもんだねー。ま、怪物は怪物なんだね」
そのことに、タルタロスも気づいたようす。しかし、彼は眉ひとつ動かさず、また自分が展開した黒い泥の沼を消すこともしなかった。
「なぜっ……なぜ、我らに、このような真似を！」

「んん、なぜかって？　そうさなあ……最強は、僕だからだ」
「な……に……」
まとわりつく泥は、吹羅の身体を芯から……いや、魂から冷やしていくような冷たさがあった。寒さに震えながら、吹羅が問うと、タルタロスは、いやらしく笑って答えた。
「なんかさー、自分が最強だとか思ってるやつ見ると、ムカつくんだよね。どこ探したって、一番強いのは僕に決まってるのにさー。そういったゴミどもは定期的に掃除して、最強は誰かってのを知らしめる必要があると思うんだ。だから、君にも消えてもらう。……ああ、そうとも。僕は強い。強いんだ。ククク。クハハ。クッハハハハハハ！！！！」
真っ赤な目を見開いて、タルタロスは叫ぶ。
「俺（おれ）TUEEEEEEEEEEEEEEE！！！！　ハッハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！」
「あ……あっ……あああああああああああ！！！！」
一定の深さを過ぎた途端。沼の底が抜けたように、吹羅と綺羅の身体は黒い深淵の中に落ちていった。

★

「ちょっと待て！」
ところ変わって、グラウンドの西側。真龍を倒す計画を立てていた紫苑は、地獄の考えたその方法を聞いて、即座に彼の胸倉を掴み、自分の方に引き寄せた。
「それじゃ……それじゃ、あいつが死んじゃうじゃないか！」
詰め寄る紫苑に、地獄は苛立ちの視線を向ける。
「おい。よもや貴様、今さら『見知らぬ少女を殺したくない』とでも言うのではあるまいな」
「違う！　あいつは……友達なんだ。あたしのことをわかってくれる、そう何人もいない人のひとりなんだっ」
ただ、人当たりがいい性格というだけかもしれない。でも、あいつはあたしに話しかけてきてくれた。冗談を言って、笑いかけてくれた。
だから、なんとしても生きたまま正気に戻してあげたいのに。
なぜ、この男は。
「あいつは普通の人間なんだ！　そんな奴がお前の左眼を喰らったら、無事じゃ済まないじゃないか！」
紫苑が睨みつけた地獄の、左右色違いの、金と青の瞳。その左目は、アルゲニブと同じく彼の『天装』のひとつだった。
『邪眼アルゴラ』。かつて彼が斬り落とし、自らの武器としたメデューサの首は星となり、天装となって彼の眼窩に収まったのだ。
「ほう。普通の人間、か。ならばあの泥人形は何だ。あの異能は何だ。黒く染まり、宙に浮くあの姿は何だというのだ！　……確かにお前の友人は、元々はただの人間だったかもしれない。だが今のアレは、化け物以外の何者でもない！」
地獄は紫苑の手首を掴み、そのまま身体をひねって、彼女を投げ飛ばした。
「痛っ⁉」
背中から叩きつけられ、視界に星が舞う。
「それを切り捨てられぬとは、やはり貴様は甘すぎる！　たとえ誰であろうと悪は滅ぼす！　それが英雄の義務だとなぜ分からない！　なぜその義務を果たせない！」
地獄は激昂していた。紫苑を殴りこそしなかったが、その言葉は、自分の心の指針を汚された怒りに満ちていた。
「もういい、貴様はそこを動くな。……アン！　『螺鈿（ギャラクティカ）』を解除しろ！」

「えっ……でも」
戸惑う餡子に、地獄は額に青筋を浮かべて怒鳴る。
「いいからやれ！　俺が奴を仕留める！」
「待て！　やめろおおおお」
紫苑は立ち上がり、地獄に掴みかかる。
「この、離せ！　邪魔だ軟弱者！」
「うるさい！　おまえにマロンは殺させない！　あたしが守るっ」
地獄と紫苑が乱闘の様相を呈し始めた、その時。
「「っ?!」」
戦場の喧騒すべてをかき消すほどの地鳴りが、彼らの後方で響いた。ふたりの身体は、一瞬宙に浮き、どさっと落ちる。
「今のは……?」
後ろを振り向いた紫苑。その視界に入ったものを見て、彼女は愕然とした。
「なんだ……ありゃ……」
『黒』夜空にまぎれて見えづらいが、体の表面が『黒』で覆われ、ところどころに白くローマ数字が浮き上がった、身の丈百メートルにも及ぶ巨人が、そこに立っていた。
『ごきげんよう、英雄の諸君。そして我が末裔どもよ』
口があるのか無いのか分からないが、とにかく人間で言うそのあたりから、厳(おごそ)かな声が聞こえる。
『我が名はクロノス。かつての神王であり、そして今再び、その座に返り咲く者。
今日この日をもって、この世界を統べる神は入れ替わる。怠惰に染まりきったオリンポスの十二神は廃され、我がその座につくのだ』
「……何を言うか！」
遠くで戦っていたアポロンが、真っ先に反論の声を上げた。
「貴様などが王位に就くことを、我ら十二神が許すわけがなかろう！　それに、貴様は若き日の父上に敗北した身！　我らに敵うわけがない！」
『フハハ。それは些か見当違いというものだぞ、アポロン。我が奴に敗れたのは、奴に母上の援護があったからよ。だが、その母上は、今は我に味方している。貴様は見ておらぬか？　そこで全ての顛末を眺めておられる、その御姿を』
そう言って、クロノスは公園の外の上空を指差す。
そこでは、黒い炎の鎧に身を包んだ怪物と戦う、ギャルの姿があった。
「おいクロノス、話に巻き込むなよなー。今、最高にイイところなんだからよお」
黒い怪物の放つ剣や槍を身軽に避けながら、ガイアはニタリと笑って返す。
「そんな……あれは、まさしく……」
『母上だけではない。無限の深淵タルタロス。悪魔の王ルシファー。……そして』
愕然とするアポロンをよそに、クロノスは天に右手を掲げる。
すると、彼の身体を覆っていた「黒」が、霧となって、その腕からだんだんと、夜空に広がり始める。
「なんだ……？　なにが、始まるんだ?!」
混乱し、紫苑は辺りを見回す。その間に、「黒」はもくもくと広がり、やがて円形に公園の上空を囲った。
瞬間、
「ッ?!」
その霧の輪から、ピシャリ、と稲妻が走る。それもひとつだけではない。公園全体を取り囲むように、一、二、三……いや、数えきれなかった。

が、その直後。先ほどのものにも勝る巨大な地響きが、その答えを出した。
「おい……嘘だろ……」
稲光が走ったその場所に。クロノスと同じく、身体が真っ黒に染まった、十一体の巨人が現れたのだ。
それを見た、紫苑の左斜め前方向、少し遠い場所にある噴水のあたりで戦っていたアテナが、驚きの声を上げる。
「バカな！　あれは、ティターン神族(ティタノマキア)?!」
『ああ、そうだとも。かつて巨神大戦において貴様らに打ち負かされ、深淵へと封印された十二神。牢獄そのものが味方に付いた以上、その中に幽閉された囚人は出入り自由というわけだ。もっとも、永遠に『落ち』続ける地獄のせいで、我以外はすべて心を闇に冒され、ただの傀儡となってしまったがな。この身の醜き黒も、その弊害よ。
だが、問題ない。こやつらは人形……しかし、非凡なる戦力を持った人形だ。我が命によって、我に仇なす不届き者を全て灰燼へと帰す無敵の兵器となった』
確かに、巨人……いや、巨神たちには、命の気配がしない。その巨体を寸分も動かさぬまま、じっと立っている。
『さて、そろそろ伝令が到着したころだと思うが……アポロン。天界が滅んだことは、もうその耳に入れておるか？』
「何だと?!」
『ほう。その様子では、まだ聞いていなかったらしいな。では、我が直々に教えてやろう。
天界はすでにタルタロスの腹の中だ。そこにあったものは全て、深淵に飲み込まれたよ』
「な……」
愕然とするアポロンに、クロノスはさらに追い打ちをかける。
『ゼウスも、ハデスも、ポセイドンも……誰も彼も、何もかも、今は無限の奈落に落ち続けている。残るはアポロン、アレス、アテナ、アルテミス、ヘファイストス。貴様らのみよ。だが、ゼウスさえも手こずった我らに、若輩者が敵うかな？』
「くっ……」
紫苑は歯がみした。
あのゼウスでさえも苦戦し、今は敗北してしまった敵。ティターン神族とやらに加え、厄介そうな神が他に二柱も。さらに悪魔も味方についている。
戦力差は絶望的。もはやあたしたちは、刈り取られるのを待つだけの雑草にすぎない。
しかし。
「……あきらめるもんか」
声に出すと、思いは一気に巨大化した。
「あきらめるもんか！　あたしたちは、あんたなんかに絶対に負けない！　あたしはまだ、何が何だか分かんない、とんだ見習いだけど！　それでも……あたしたちは、正義のヒーローなんだ！　ヒーローが、負けちゃいけないんだっ！」
見上げる巨大な影に向かって、叫んだ。すると、影は首をかしげ、
『ほう。確か貴様は、あの無礼者の……。ク。なかなかの蛮勇を誇るではないか。さすがは荒くれ者の狩人よ。どうやら、はじめにすり潰されたいと見える』
右の拳を握る。次の瞬間、
「っ?!」
その拳は、紫苑の目の前にあった。
これほどの巨体のはずなのに、動く気配が全く無かった。足音さえ聞こえなかった。これほどに巨大な拳では、もはや避ける余

裕も無い。
ごうっ、という衝撃の風は、長い水色の髪を揺らす。その大質量が通過し、この身は塵と消える――
寸前で、何かに攫われた。
（え？）
直後、とてつもない轟音が、耳を穿つ。粉塵は舞い、視界が煙る。
だが。その土埃も、音も、だんだんと遠ざかっていく。この誰かの腕の中に抱かれたまま、下の方に。
やっと晴れた視界。そして、紫苑を抱く腕の正体も見えた。
白い鱗に覆われた、たくましい腕。ギラリと光る黒い爪は、紫苑を傷つけないように、身体をどうにか避けている。
直接見たわけではなかったけれど。知っている。あたしは、この腕を確かに知っている。
「あ……あ……」
「……大丈夫か、紫苑。よく、がんばったな」
少しくぐもって低いけれど、この優しい声色も知っている。自然と、視界が潤んでくる。
たった三か月しか経ってない。それでも、すごく懐かしく感じた。
あの日から、あまりにも求め続けてきた声だったから。
「リ……サ……っ！」
「久しぶりだな。元気に、してた……か」
見上げた先には、いかめしい角と数えきれないほどの蛇の髪を生やした、白い龍の顔があった。彼も涙をこらえきれないようで、笑っているのか、泣いているのか、その中間のような顔の表面の、白い鱗を伝う一滴。
かつて自分の家族を守るため、死ぬ事を諦めたその龍――ラードーン。それは、あたしの大好きな、誰より愛しているヒト……怪原理里の、戦う姿だ。
「もう、大丈夫だ。お前は、俺が絶対に守ってみせる」
「リサ……リ、サ……！」
名前を呼ぶことしかできないで、紫苑がその胸にうずくまる中。白龍は、翼を広げた。

★

「んん……」
板張りの床の感触に、珠飛亜は目を覚ました。
「ん……あれ？　わたし、どうなったんだっけ……ひっ**!?**」
起きあがって辺りを見回し。
そして……珠飛亜は、言葉を失った。
そこは、何もかもが黒く染められた、怪原家のリビングだった。四人がけのソファも、綺羅専用のクマのクッションも、兄のロボットのプラモデルも。母が奮発して買った四十インチのデジタルテレビも。食器棚の上の、花瓶に生けられた一本の桜の枝さえも。
だが。珠飛亜が恐れおののいたのは、もっと別の事だった。
「うそ……でしょ？　みんな……みんな！」
ソファに座る背の低いふたつの影は、きっと吹羅と綺羅だ。台所に立つのは恵奈。テレビの前に寝そべるのは希瑠。
そして。食卓に座る、見おぼえのあるボブカットは、まぎれもなく、珠飛亜。
その全てが真っ黒になって、蝋人形のように動きを止め、その場にとどまっていた。
「あ……あっ……ああ……」
そして、黒い珠飛亜のいる食卓、彼女の右隣の席には。
――これでもかと光り輝く、理里の姿があった。

「りー……くん……？」
談笑しているのか、笑顔のまま固まった理里。他の面々とは違い、一点の黒い染みも彼には無い。ただ、こんなに生き生きとしているのに、時間が止まってしまったかのように、彼が動く気配もまた無かった。
だが、異変の中の異変は、これだけではない。
「だ……れ……？　あなたは、だれなの？」
黒い珠飛亜とは逆側、理里の左隣。そこに、いるはずのない七人目が座っていた。
理里以外の家族と同じく、黒く染まった姿。長い髪と華奢な体つきから女性と分かる。理里は、その謎の女に向けて、笑いかけている。
「いや……いやあああああああああああ！！！！」
駆けだそうとすると、ガツン、とドアにぶつかった。
「痛っ……えっ」
引き戸を動かそうとするが、びくともしない。
「……っ！」
寝転がった希瑠を踏んづけて、今度はベランダに走る。窓ガラスを突き破れば、飛んで外に逃げられる。
しかし。
「きゃあ!?」
割れない。渾身の力で、怪物の力で体当たりを喰らわせたにもかかわらず、ガラス戸はびくともしない。
「なんでっ！　なんでよっ！」
何度も体当たりを繰り返すが、ヒビひとつ入らない。そのうちバカらしくなってきて、その場に座り込んだ。
（……どうしたらいいの。もしかして、一生このまま？）
わたしの家ではないわたしの家。そこに閉じ込められてしまった。引き戸もガラス戸も動かない。壊せない。絶望のままに、外の景色を見ると。
あることに、気づいた。
（……!?）
それは、街灯。この部屋にいる理里の他に、唯一この暗い世界を照らすその電球のひとつは、ベランダの近くにあった。
その、明かりの中に。
「あれは……りーくん!?」
理里だった。
丸いガラスの向こう。フィラメントがあるはずのその場所に、理里の笑顔がある。上半身だけを双眼鏡でのぞき見たような感じだ。
他の街灯も、見える範囲で確認すると、確かに何かしらの人影……いや、理里だ。理里が中に映し出されている。そして、それが暖かな輝きを放っている。
（なんなの、これ……。もしかして、夢？）
そうか、夢ならば納得がいくかもしれない。なんだ、夢なら安心じゃないか。にしても趣味の悪い夢を見たものだ。理里以外の全て、自分でさえも闇に染まった世界など。こんな夢さっさと終わらせて、目覚めなくては。
……いや。そうしたいのはやまやまだが、気になることがひとつある。
（じゃあ……アレは、いったい誰なの？）
理里の隣の何者か。それが気になる。
不気味だが、おそるおそる、近づいてみることにした。
「ふう……」
と。行ってみれば、どうということのない距離だった。動かない自分、動かない理里。そして動かない誰かは、もう手の届く近

さ。
まずは、じっと観察してみる。背丈は珠飛亜より高い。百七十センチくらいか。髪はよく手入れされている。腕も足も細く、スタイルがいい。
「……」
整った鼻筋。シャープな顎のライン。シルエットだけでも、かなりの美人と分かる。でも、何か引っかかる。
「……どっかで見たような……」
芸能人か誰かか？　そう何度も見ていないはずだ。見覚えのある、この高い鼻……。
「……ん？」
唸り続けていると。彼女の髪の毛が、一本だけ、まぶたにかかっているのが目に入った。
それは、まばゆいばかりの金色の髪だった。まるで絹のような、繊細なきらめき
「！！！」
珠飛亜の中で、全てが繋がった。
「キミ……キミは……」
同時に、全て思い出した。
先ほどまで、わたしはこの女を説得しようと試みていた。けれどその声は届かず、わたしは黒い泥に飲み込まれた。
そう、飲み込まれたんだ。
泥が当たった瞬間に、泥の中に引き込まれるような感覚があった。そして、いつの間にか気を失っていた。
「そう……そういうこと、なんだね」
わたしは泥に飲み込まれた。そう、黒く染まった金髪の少女が放った泥に。
これは、わたしの夢なんかじゃない。この子が見ている夢……もしくは、この子の『心の中の世界』『魂の中』だ。
この子は、何者かによって黒く染められた。だからこの子の心の中も真っ暗に、いや、真っ黒になった。そこに、あの泥によってわたしは吸い込まれたんだ。
この子に何があったのかは分からない。どこぞの怪物か、はたまた悪魔か悪神かにでも毒されたのだろう。
「……」
彼女の隣に目をやる。笑顔のまま固まって、光を放つ理里に。
ここまでされても、彼女の理里への愛は消えていない。いや、理里だけが、彼女の最後の希望だったのかもしれない。
『心の中の世界』とは、きっとその人の理想の世界。すなわち、ここは彼女の理想。この一家団欒の風景に、自分も加わりたい。そんな夢。
「……生意気言ってくれちゃって」
こんなにも完璧に再現された内装。彼女が何をしてここまで知ったのかは想像に難くない。
「ねえ。わたし、キミの名前も知らないけどさ。キミのその執念だけは、すごいなって思ってるんだ」
彼女が座る椅子を回転させ、彼女の正面に立つ。
「なのに。なのにさ。こんなところで何してるわけ。……りーくんのこと、好きなんじゃないの!?　こんなに、これ見よがしに最後の希望みたいに光らせて！　自分も、他の人も真っ黒にしちゃったくせに！　なに一人前に守ってるの！　りーくんを守っていいのはわたしだけなの！　他の誰にも渡したくないのに！　こんな……こんなの、見せられたら」
知らず知らずのうちに、涙が頬を伝う。
さっきは言えなかった。怖かった。認めてしまうのが。
だけど今なら、勇気を振り絞れる。この子は希望を残した。残

せたんだ。だったらわたしだって負けてられない。今度こそ、現実と向き合うんだ。向き合う勇気を出すんだ。
「わたしはっ……どれだけ願っても！　祈っても！　りーくんとは結ばれないからっ！　だからキミが、わたしのかわりになってよ！　こんなところで止まってないでっ！　わたしのかわりに、しあわせになってよっ！」
涙が一滴、床に落ちた。瞬間、
「……えっ？　な、何……」
珠飛亜の身体が、光り輝き始める。

★

「あはは、ノロいノロい！　もっと俊敏に動けよ、ババア！」
「チッ……！」
舌打ちしながらも、恵奈は双剣を繰り出す。しかし、ガイアは風のように舞い、それをいとも簡単にかわしてみせる。
「ちょこまかと！　少しはおとなしくしなさい、悪い子ね！」
「ははぁ〜ん、残念。私、いい子ちゃんとかマジ大っ嫌いなんだわっ！」
言い放ち、ガイアは右手を恵奈にかざす。
「喰らえコラァ！」
「っ！」
すると、突風が吹き荒れ、恵奈の身体を押し戻す。その隙にガイアは、今度は空に手をやる。
「こいつはどうかなあ！」
雷鳴がとどろく。幾本もの稲妻が、後退した恵奈にめがけて放たれた。だが、恵奈はそれを、目にも止まらぬスピードで回避し、次の攻撃をガイアに放つ。
未来視の力、〝逆神の眼〟だ。投影する未来が遠くなるほどにそれにかかる時間も増すが、ほんの五秒先程度の未来であれば瞬時に分かる。その性質を利用し、恵奈は常時この眼を発動させた状態で、この戦いに臨んでいるのだ。
「はあっ！」
「チッ……コザカシイ真似しやがって！」
上段、槍の突き。左下から放ったそれは、ギリギリで避けられる。が、それもすでに『視えた』こと。
「せいやあっ！」
すでに、同時に狩鎌で右側から水平に斬りこんでいる。これを避ける術は無い。全ては予定通り。たとえこの女が何をしてこようと、未来が視えるわたしには関係ない――
「ぐ」
と、勝利を確信した矢先。恵奈の脳裏に、ありえない未来が映った。
それは、ガイアの一息で、自分の鎧……この『黒燄煉劫儛』が、かき消される映像。
「そんなっ……どうしてっぐ」
「視た？　じゃあ、これも予定通りって感じぃ？」
老獪とも無邪気ともとれる笑みを浮かべて、ガイアは、「ふっ」と息をひとつ、恵奈に向けて吹いた。
瞬間。ごうっ、と、一陣の風が吹き抜ける。それは恵奈が視たとおり、彼女の炎を、まばたきもせぬうちに消し去った。
「あ……ああ……」
武器を失った恵奈の首を、ガイアはむんずと掴む。
「今度こそ、戦いが終わるまでてめえは一歩も動かさねえ。ここでシビれていやがれ」

「あぁっ!?」
ガイアの手から電撃が迸る。それは恵奈の身体を伝い、全身を蹂躙する。
しかし、それでは終わらなかった。恵奈の指先、尾の先端、頭頂部から、その雷は溢れ出し、やがて地面へと至り、巨大な雷光の十字架を形成した。
「あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ」
「コロシはしねーよ？ だってお前、生かしといた方が面白えもん。……じゃあねぇ、エッキー。また、遊ぼうねぇ♪」
「待あっ……っで……あああああああああ！！！！」
諸悪の根源は、闇の中に溶け込み、消えた。

★

『フッ……フフフ。フハハ。フハハハハ、フハハハハハハハ！』
拳をかわされたクロノスは、その場に膝をついたまま、狂ったように嗤いはじめた。
『どこまでも無礼な奴よ！ 我が神罰を妨げるとは、ラードーン！ やはり貴様は、我を邪魔立てするか！』
しゃがんだままの態勢から、黒い拳が一気に振り抜かれる。
それを左側に飛んでかわし、理里は一旦クロノスから距離をとって、公園の外のマンションに着地し、紫苑を降ろす。
「紫苑。戦いが終わるまで、ここで待っててくれないか」
「えっ……」
紫苑は戸惑い、龍の巨体を見上げる。
「もう、危険な目には遭ってほしくないんだ。あの黒いのとか、ガイアやタルタロスは、残ったオリンポスの神々がなんとかしてくれるかもしれないけど……ルシファーの部下は、とんでもない精鋭部隊だっていうじゃないか。そんな厳しい戦場に、紫苑を置いておきたくない」
「……リサ……」
もう二度と、失いたくない。そう言っているのだと分かった。だが。
「悪いけど……それはしたくない、かな」
「!? なんでだよ！」
驚く理里の、黄色く光る両目を、紫苑はしっかり見据える。
「実は、あっちの方にマロンがいるんだ」
「ああ……それは、俺も見たよ。なんだってあいつが……」
首をひねる理里に、紫苑は続ける。
「さっきクロノスが出てきて、やっと分かった。あいつは、クロノスに何かされて、おかしくなってるんだ。
……あたしは、あの子を助けたい。リサ以外で、あたしとまともに話してくれるのは、あの子だけだったんだ。人生で二番目にできた友達だったんだ。その友達が苦しんでるのは、見過ごせないよ」
「……」
龍は困った顔をした。『グルルルル』とそれらしいうなり声をあげて、こめかみ（らしき場所）に右手を当てる。
「大丈夫だって！ この四か月、英雄の力を操れるように、アルテミス様とずっと特訓してきたんだ！ 天装も、あたしが使いやすいように改良したし。今じゃ「ひとりだけの独立遊軍」に任命されるくらい、強くなったんだぜ？ ほら！」
シュッシュッ、とシャドーボクシングをする紫苑。
「……ふっ」
理里は、なんだか意地になる自分が馬鹿らしくなってきて、笑ってしまった。
そうだ、彼女はオリオン。海王ポセイドンと人との間に生まれ

た半神。数々の難を乗り越え、悲劇的にではあるが、最後には星座にまでなった英雄だ。
「仕方ないな。気をつけろよ」
「やったあ！」
ガッツポーズをする紫苑。理里は、それを微笑ましく眺める。
「大丈夫、きっと無事に終わるさ。戦いが終わったら……また、落ち合おう」
「うん！　がんばろうな！」
がつん、と拳を合わせる。
まるで友情のような愛。だが、これでこそ、彼らなのかもしれない。
「さあ、行くぞ！」
「おう！」
理里は翼を広げ、紫苑はベルトを光らせ。ふたりの戦士は、それぞれの戦場に飛び立った。

★

『クッ……まあよい。羽虫の一匹など何時でも潰せるわ。さあ、我が眷族よ！　我が覇道を阻む最後の障壁を、跡形もなく踏み潰せ！』
クロノスが号令をかけると、十一柱の巨神たちが、ゆっくりと動き出す。
『オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　！』
人とも獣ともつかぬ唸り声をあげ、ある者は拳、ある者は蹴りで、はるか大地のちっぽけな英雄の群れを押し潰す。
「うあああああああああああ！」
「逃げろ！　逃げるんだ！」
混戦状態だったグラウンドから、蜘蛛の子を散らすように、英雄たちは頭上の衝撃から逃げ去りはじめる。
その中を、紫苑はひとり、真龍のもとへと飛んでいた。
（……無事でいてくれ、マロン……）
餡子が『螺鈿（ギャラクティカ）』で動きを封じている以上、向こうから攻撃してくることはないはず。この間にペルセウスが動いていなければいいが。
――と。
「うわあ**?!**」
熱気が頬を掠めた。振り返ると、黒い神……ティターン神族のうちの一体が、炎を纏った手をこちらにかざしている。
（あいつら、ただデカイだけの人形じゃないのか**?!**）
彼らとて、それぞれに権能がある。自我を失っていても、権能で戦った記憶が、本能が、その力を呼び起こす。
「……くっ！」
立て続けに二発、三発と、炎の球が飛ばされる。驚くほど的確なその狙いをどうにか回避して、紫苑は真龍のいる場所を目指す。
すでに姿は見えている。あと少し、もう少し――
だが、寸前で、彼女は巨大な手につままれた。
「っ！？　あああああああああああ**?!**」
真龍の近くにいたティターンが、蠅を箸で掴むように、紫苑の動きを読み、人差し指と親指で捕まえたのだ。
「はなせ、このっ！　ゴラァ！」
トンネルほどもある指をボカスカと殴りつけるが、全く通じない。その間に、巨神は紫苑を持っていないほうの手の、人差し指の甲を親指の腹に引っ掛け、紫苑の目の前まで持ってきた。
それは、我々が古来より見慣れてきた、たった二本の指から放たれる最大の衝撃……要は、デコピンである。
「くそっ、やめろ！　あたしにはまだ、やることがっ」

紫苑がわめく中、ギチギチ、と、目の前の巨大な指の筋肉が音を立てる。数秒後の衝撃を予感し、紫苑が思わず目を閉じると。
「……!?」
震動は訪れた。ただし、後ろから。
『オ　オ　オ　オ　オ　オ　!?』
何か後ろからの攻撃を喰らったらしい巨神が、態勢を崩し、ゆっくりと倒れていく。指の力が抜け、その隙に紫苑は離脱した。
「はあ、はあ……いったい、なにが……」
滞空し、結果的に紫苑の命を救った何者かの姿を確かめようと、地面に崩れ落ちる巨神の後ろを見る。
大きさはティターンと同じくらい。その輪郭だけは分かった。巨大な翼、のたくる下半身、そして蛇のような髪の毛。
「……え？」
一瞬、先ほどまで会話していた白龍(理里)の面影が頭をよぎる。だが。巨神が膝をついたことでその全貌を顕わにしたその龍は、黒色だった。
黒、と言っても、ティターンたちのような、闇そのものといった色合いではない。月明かりを反射するその鱗は、清い光沢のある、何とも言えぬ艶やかさを持っていた。
「おまえ、は……」
出陣前に観た、十五年前の戦いの記録映像。その中心で暴れ狂った龍も、同じ鱗を持っていた。
『勇敢な少女……いや、英雄よ。ここは私が引き受けよう。早く、君の守るべき者のところに行きなさい』
目の前の龍は、重く、しかしどこか底のほうに暖かさを持った声で、紫苑を促す。
「……！　は、はいっ！」
呆然としていた紫苑は、ピシッと背筋を伸ばし、再び真龍のほうへと飛んでいった。
『キサマ……！』
クロノスはその龍を指差して、ギリギリと歯ぎしりをした。
「まさか……お前は……！」
アポロンは、その龍を見て、自らの神弓を取り落とした。
『オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　！』
二柱の巨神が、龍を目がけて、ゆっくりと走ってくる。
『……』
龍は、それらの方向に両手を伸ばし、ガシッ、と、何もない空間を掴む。
『……グオオオオオオオオオオオオ！』
そして、一気に引き寄せた。
『『オ　オ　オ　!?』』
ちょっとした高層ビルでは追いつかない高さの二つの巨体が、大質量をものともせず、跳んだ……否、跳ばされた。磁石のようにふたつの身体は引き寄せられ、
『『！！！』』
勢いよく衝突し、互いの全身の骨を粉砕させた。
『さて。次はどなたかな？』
落下し、倒れこむ二柱に見向きもせず、龍は残りの巨神たちを見据える。
『このテュフォーンが、全てお相手しよう。何なら、世界ごと滅ぼしてやっても構わないが？』
ゴキリ、と首を鳴らし、最強の魔神がついに動く。

★

『バカな！　なぜ貴様が、神に加担する！　……っ』
激昂するクロノスの目の前に、テュフォーンとまったく同じ姿

の、色違いの白龍が現れる。大きさとしては十メートルと、父よりはかなり小さいものの、その風格は十分だ。
「余所見をするな。お前の相手はこの俺だ」
『怪原……理里ッ……！』
クロノスはそのまま叩き落としたい衝動に駆られるが、なんとかこらえる。
『……クク。よかろう。ならば、それ相応の舞台というものを用意しようではないか』
その言葉の意図を察し、理里は身構える。
『……〝皇帝（ジ・アイソレータ）〟！』
「〝崩戒の鎮魂曲（ヴァイオレート・レクイエム）〟・超越（イクシード）！」
瞬間、彼ら以外の全ては静止する。何もかもが動きを止め、彼らだけの世界が完成する。
時間停止の権能と異能。この三世界を見渡しても彼らしか所持していない、最強クラスの力。
『ククク。我が〝皇帝（ジ・アイソレータ）〟に対抗しうる力を持った者は、ゼウス以外では貴様が初めてだ。だが、奴と違うのは、貴様にはそれ以外の武器が無い。いや、無いわけではないが』
「ああ、分かってる。この左眼は、お前には効かないんだろ？」
基本的に、神に異能は通じない。それは理里のような、『光を照射されたものを石化する』といった、概念系の異能力者に特に顕著だ。
『貴様に勝ち目は無い。それでも、我に歯向かうと申すか？』
「……ああ。退いたところで意味は無いし、俺が倒されたら、きっとお前はみんなを……俺の家族を殺しにかかる」
『ほう、察しがいいな。なぜ気づいた？』
クロノスが興味深げに問うと、理里は静かに答えた。
「お前みたいな〝意識の高い〟奴は、異形（俺たち）みたいなモノの存在を許さないって見てきたからだ」
今までに戦ってきた数々の英雄たち。その何人かは、異形であるというだけで理里たちの存在を許さない、理不尽な主義の持ち主だった。そんなものは、もう見慣れていた。
『〝意識が高い〟、か。なるほどな……ククク』
その言葉を噛みしめるように、クロノスは嗤う。
『およそ我ほど〝意識が高い〟神もおるまいよ。我の理想は〝人間と神が恒久的に繁栄する世界〟。人類を導き、争いや貧困を消し去り、全ての魂を幸せに導く。それを可能にするのは、我をおいて他にないと自負している。
その理想郷に、醜いモノは必要ない。理想は美しくなくてはならないからだ。異形（貴様ら）の排斥など、当然のことだろう？』
「……やっぱりな。お前は、俺が一番嫌いなタイプの神だ」
理里は、左手を掲げる。
「確かに俺の異能じゃ、お前には勝てない。だけど、『法』ならどうだ？」
『……？　何を言っている』
クロノスが首をかしげると、理里の左手が発光する。
そして、その手の平に、一個の金色のリンゴが現れた。
『ッ！　貴様、それは！』
『『フードーン』』。この俺の本当の名前の意味を、よく考えた。よく調べた。……そして、たどり着いたんだ。俺の〝崩戒の鎮魂曲（ヴァイオレート・レクイエム）〟には、その先がある」
動くはずの無い空気が動き、理里の身体がひととき竜巻に包まれると、次の瞬間、彼は人間の姿に戻っていた。
「俺の正体は『龍座（りゅうざ）』。かつて英雄ヘラクレスに敗れるまで、世

界の西の果ての庭園・〝ヘスペリデスの園〟を守り続けた、百の頭を持った龍。十五年前、父さんの襲来で、その庭園もまた失われたとされていた。

だけど。〝庭園〟は、あったんだ。俺の中に隠されて、今日まで眠っていたんだ」

〝崩戒の鎮魂曲（ヴァイオレート・レクイエム）〟は「心象世界を展開する」能力。重力の嵐という、極端に攻撃的な性質の〝世界〟を持つ彼の心の中心は、黄金の庭園を守るのに最適の場所だった。庭園の所有者であるヘラは、天界の至宝を守るため、英雄たちとは別に、理里を人界に転生させたのだ。

「そして、この果実の効果も知っている。神が食べても特に変化は無いが、普通の生き物が食べたら、異能が発現する。そして、異能力者なら……食べた者を、『法（ロウズ）』に変える」

『！！！』

『法（ロウズ）』。神をも従える、絶対の法則となった異能。全能ではなく少数の能力を極めた者のみが到達できる、異能の究極形。それを作り出す禁断の果実が、この黄金のリンゴなのだ。

「俺は、今再び進化する！　この〝法則〟で、お前の理想を破壊する！　家族を守るために……そして、すべての異形を守るために！」

ガリッ、と、理里は勢いよくリンゴを齧った。

身体が金色の粒子のような光を放ちはじめる。それが量を増していくほどに、理里は徐々に空を昇っていく。光はだんだんと彼に集まり、固まって、結晶のようになっていく。髪は逆立ち、長くなる。

一対の翼が、背中から顔を出した。同時に、アンモナイトの化石のように渦を巻いた角が二本生え、尾が生え、足の方から、彼の身体は金色の鱗に包まれていく。

そして、ひときわ光が強くなり、輝きの末に誕生したのは、龍と人間の中間のような怪物。顔は元の理里と変わらないが、頬のあたりに鱗が生え、そこからほぼ全身が金色の鱗に覆われている。禍々しい角とコウモリのような翼、とげとげした尾は、悪魔のような雰囲気だと見る者もいるかもしれない。

渦巻く重力は時すら支配し、その左眼の輝きは生きとし生ける者すべての肉体を石化させる、「守る」には些か攻めに偏った彼の「魂」の姿、『真なる真の姿（トゥルーオブトゥルー）』――

その名も、蝕陽龍（アポピス）。

「〝法則〟、執行」

理里は左目の異能、『神蛟眼（エクスナーガ・アゲイテ）』を発動する。本来紫色であったその光は、今は金色になっていた。

しかし。それはクロノスに向けて放たれたのではない。

「我こそは〝灰滅（かいめつ）〟の使徒。この三世を縛る数多（あまた）の理（ことわり）を超え、今、新たな戒（かい）をその律令（りつりょう）に刻まん」

光は円形、そしてその中心に五芒星を描き、魔法陣のようなものを、理里の顔の前に形成する。左目は、光を放出し尽くしたのか、瞳が白くなる。

「顕（あらわ）れたるは第十の〝法〟……

〝胤螭（ヴィーネブル・レヴティン）の宝剣〟ッッッ！！！！」

最後の詠唱。それが終わると、魔法陣から、ゆっくりと、光の刃が現れる。

数秒かけて、ようやく全貌を露わにしたそれは、黄金の剣だった。西洋風の両刃に、何かしらの古代文字のようなものが彫られた、長すぎず短すぎない両手剣。

目の前に浮かぶそれを、理里はひったくるように右手で掴みとり、その刃をクロノスに向ける。
『……フン。ずいぶんと派手な見た目になったものだ』
が、その変化の一部始終を見終えても、クロノスは動じなかった。
『だが、所詮は怪物よ。神の王たる我が、そのようなモノに負けることなどあり得ぬ。……ふむ。しかし、こうも大きさが違ったのでは、やりにくい』
クロノスがそう呟くと、黒い竜巻がクロノスの身体を包む。
『クク。随喜せよ、矮小なる異形よ。世界を統べるこの王は、貴様と対等の条件で戦う事を決断した』
風が止んだ時、そこにいたはずの黒い巨神は消え、代わりに、全身の筋肉を隆々と盛り上がらせた、理里より頭三つ分ほど身長の高い、半裸の壮年の神が浮いていた。
白い長髪、太い眉。眼光は鋭く、少し皺の目立つ顔は彫りが深く、何者をも寄せ付けぬ風格を放っている。下半身には黒い鎧を纏い、その腰の後ろには、刃が円形に歪曲した、とんでもない大きさの剣が差してある。上半身のところどころにある黒い炎のようなタトゥーは、おそらく先ほどまで彼の身体を覆っていた闇の名残だろう。
「我が面貌を晒すは、タルタロスに封じられてより、実に四千年以来のことよ。その刹那に立ち会った名誉、ここで終わる短き一生の宝とせよ」
「……知ったことか」
毒づいた後、理里は剣を構え、飛翔した。
「ハッ！」
半秒の後、剣戟。クロノスは提げていた巨大な剣を抜き去り、飛び込んでくる理里の剣を撥ね返した。
「ぬぅッ！」
その動きのまま、巨刃は上段に振りかぶられ、一気に振り下ろされる。理里はそれを、右側に羽ばたいて躱す。
その、直後。
「っ!?」
クロノスの正面にあった、はるか五十メートル下の地面の木々が、街が、まっぷたつに切り裂かれた。
「クク、驚いたか？　これこそ、神器ハルパーの力よ」
先ほど双子に盗ませた、すべてを斬り裂く剣。理里が〝法〟となってもクロノスが動揺しなかった理由には、この武器の存在もあった。ヘファイストスが鍛造したこの剣には、〝法〟に匹敵する強制力を持つ『切断』の力が付与されているのだ。
「後ろに退くだけでは、この剣の刃からは逃れられぬ。指の一本でも軌道の上に残したならば、この不死殺しの剣は、即座に貴様の身体を粉微塵まで切り刻むぞ？」
「……ハッ。それは、お互い様だ！」
剣を避けた動きのまま、理里はくるっと回転し、そのままクロノスに突っ込む。
ガキン！　と刃がぶつかり合い、つばぜり合いとなる。
「やはりな。貴様の剣は石化の力が結晶化したもの。闇雲に突進する以外の攻撃をしてこない以上、何かしら刃に能力があるとしか考えられん」
「ああ。この剣は、斬った生き物を石化させて、確実に絶命させる。かすり傷でも石灰の塊になるぜ？　せいぜい、気をつけるんだな！」
ぐぐぐぐぐ、と力を込めた後、両者は互いに弾き飛ばされる。
だが、退くことはしない。
「……はぁっ！」

「ムンッ！」
再び突進。ぶつかり合う刃。斬撃のみを残して通り過ぎ、数メートル進んだところで理里は翼でブレーキをかけ、振り返り、またしても突撃をかける。
しかし。
「ハアッ！」
クロノスの掛け声と共に、ぶうん、と何かがうなる音がしたかと思うと、理里の剣は、その手を離れ、宙に弾き飛ばされていた。
「なっ!?」
「同じ手が何度も通用すると思うな、凡夫が！」
クロノスが、ハルパーを持った左手を素早くひねり、
〝胤螭（ヴィーネブル・レヴティン）の宝剣〟を撥ね飛ばしたのだ。
「死ねェいッ！」
クロノスは柄に右手を添え、ハルパーを構える。横に薙ぎ払おうという魂胆だ。
「……くっ！」
振り抜かれる巨剣。それを下方向に飛んで避け、理里は落ちていく剣を追う。
だが、
「かかったな、下郎！」
「っ!?」
瞬間、黒い蜘蛛の巣のような網に、理里は捕らわれた。
「こ、これはっ」
網は、静止した上空の飛行機、はるか下の地面に建ついくつかの建造物、そしてクロノスの下半身の甲冑につながっている。タルタロスの闇を変形させたものらしい。
いや、そんな分析をしている暇は無い。
「滅びよ、ラードーン！」
「っ……」
ハルパーを振り上げるクロノス。細胞まで跡形もなくなる斬撃を予期し、理里は目を閉じる。
（……あれ？）
しかし。いつまでたっても身体を粉微塵にする痛みはやってこない。
訝しげに思い、目を開くと。
「が……はっ……」
「!?」
大上段に剣を振りかぶったクロノス。その脇腹を、水色に光り輝く、鍔の部分に巨大な羽根が折り畳まれた両刃の剣が貫通している。
「これは……！？」
開いた口がふさがらない理里に、どこからか現れたその剣は、声を発した。
『りーくーん！　助けにきたよっ！』
「えっ……珠飛亜っ!?」
いつもの快活な笑顔の代わりに、その剣は、折り畳んでいた翼を広げた。

★

「マロン！　大丈夫か、マロン！」
クロノスと理里の戦いが始まる直前。ティターンを振り切り、なんとか真龍のもとにたどりついた紫苑は、空間の壁を叩きながら、悶え苦しむ彼女に呼びかけていた。
『ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　！　！』
目の前で、この世のものとは思えぬ喘鳴をあげる真龍。その胸から、水色に光る刃が突き出しているのだ。

「チクショウ……ペルセウス、何をした！」
「違う、俺じゃない！　お前が帰るまで見張っていたら、突然そうなった！」
「なっ!?　……いや」
今は口喧嘩をしている場合じゃない。改めて真龍に顔を向ける。
『ア　ア　ア　ア　ア　ア　！　！』
「しっかりしろ、マロン！　すぐに助けるから！」
と、口では言うものの、方法が思いつかない。空間の壁に阻まれている以上、真龍を助けるどころか、指一本さえ触れられないのだから。
刃は、胎児が生まれ出るように、徐々に真龍の胸から出でてきている。刃が姿を現すほどに、光は強くなっている。
「くそっ、どうすれば……っ！」
ひときわその光が強くなり、紫苑は目が眩む。まばゆい閃光が、視界のすべてを包み込み、そして――
『え――――――いっ！！！！』
「……え？」
聞き覚えのある若い女性の声が、紫苑の右側を通り過ぎていった。
「珠飛亜先輩っ！？　いや、まさかな……あっ!?」
目を開けると、先ほどまで宙に浮いていた真龍が、撃ち落とされたように落下している。
「ちょっと待てええええええ！！！！」
自分が落ちているかのような悲鳴を上げて、紫苑は真龍を掻っ攫い、そのまま着地した。
「ふう……手間、かけさせやがって……」
彼女から〝黒〟は消え、一糸纏わぬ姿となった。美しいブロンドの髪も、もとどおりだ。
そして。
『待っててりーくん！　おねえちゃん、今行くからねっ！』
真龍の胸から飛び出した水色の剣は、クロノスのいる方へと飛び去っていく。
「先輩……そっか。先輩が……」
あれほど苦しんでいたというのに、真龍の胸には傷が無い。理屈は分からないが、どうもあの剣が……いや、珠飛亜が〝黒〟を祓ってくれたようだ。
「……ありがとう、ございました」
飛んでいく剣に、紫苑は一礼した。
「……キャヒヒ。やってくれましたねえ」
「っ!?　誰だ！」
その背後から、低い女性の声がかけられる。
振り返るとそこには、珍妙な格好をした、水色の肌の肉感的な美女が立っていた。
「この同盟が生み出した最高傑作を、よくもまあ白紙に戻してくれたものＤＥＡＴＨネ。これは、懲らしめないといけませんねェ……キャヒヒヒヒ♪」
不気味な笑い声をあげて、女は紫苑に手をかざす。
「さあ、マイダーリンズ！　この不届きナ英雄共ヲ、蹴散らしてしまいなサイナ！」
すると、彼女の後ろの空間が、雨を受け入れる水たまりのように、いくつもの波紋を打つ。
そして、その中から。
『ウオオオオオオオオオ――――――ッ！！！！』
黒い鎧に身を包んだ、中世ヨーロッパの騎士のような外見の兵士たちが、陸続と現れる。
「な、なんだっ！？」

戸惑う紫苑に、美女は高笑いを向けた。
「キャーッハハハ！　これこそ悪魔の女王であるワタクシ、ルシファー直属の精鋭部隊〝血百合の花束（ブラッディ・リリィ・メルトラバーズ）〟！　泥人形の製造が止まってモ、マダマダ戦は終わりマセンよォ！」
「くっ……！」
新たな軍勢が、紫苑に迫る。

★

「くっふふふ……面白くなってきたじゃあないか」
同じ頃。吹羅と綺羅を飲み込んだタルタロスは、ティターンが現れてより、再び市立図書館の屋上に戻っていた。
あのガキどもはなかなかに楽しませてくれた。驕り高ぶる者が屈服する様は、本当に見ていて飽きない。最初の方は心地よい悲鳴を〝闇〟の中で聞かせてくれていたが……今はもう、声も出さなくなった。ひととおり満足した彼は、あとは見物でもするかとここに帰ってきたのだ。
「しかし……アレは、気に入らないな」
彼の視線の先に居るのは、傍若無人に暴れ回り、ティターンたちを翻弄する黒い龍……すなわち、テュフォーンだった。
先ほどから五体もの巨神があの龍に倒された。クロノスを除いた十一のうち半分近くだ。……ああ、言っている間にも六体目が潰される。
兵力差をものともしない、圧倒的な強さ。それを見せつけられ、虫唾が走った。
「キミも、ボクの奈落に捕らえてあげよう……む？」
立ち上がり、魔神に向かって飛び立とうとしたタルタロスは、背筋に異変を感じる。
「なんか、寒いな……」
寒気がする。いや、背筋だけではない。全身の、身体の芯のような部分が、寒いのだ。
病になどかからないこの身体が、風邪を引いたわけでもあるまい。しかし気温はさほど低くない。むしろ暑いくらいだ。だというのに、何だこの寒さは――
「……!?」
不穏に思ったタルタロスは、たまたま目に入った自分の手の甲を見て、度肝を抜かれた。
「何だ……なんだ、これは！」
手が、凍っている。正確には霜が降りているような状態だが、その白い面積はだんだんと増えている。
『そろそろ気づいたか、暗黒神！』
「っ!?　お前は！」
そんな中、タルタロスの頭に、吹羅の声が響いた。
「お前、何をした！」
『ハッ、簡単なことよ。我が愛する妹の異能が、貴様の深淵を絶賛凍結中だ！』
「バカな！　異能は神には効かないはずではっ」
声を荒げるタルタロスに、吹羅は挑発的な口調で説明する。
『ああ、そうだとも。だが、それは肉体の話だ。心の中の世界であれば、異形も神も変わらぬであろう？　貴様の弱点は、この深淵そのもの！　心象世界を展開し、それを武器とするなら、世界そのものに攻撃すればよい！　無限の奈落は、無限の炎で凍りつかせるのみよ！』
「キサマ……何をバカげたことを……！」
毒づく間にも、タルタロスの身体は、刻一刻と動かなくなっていく。体温が失われ、肌が、髪が、凍っていく。

「うそだ……この、ボクが……こんな……こんなはずじゃないのにいいいいいい！！！！！！！」
その叫びと共に、原初の神の一柱は、氷像と化した。

★

『りーくん！　今助けるからね！』
珠飛亜が変身したらしい剣は、自ら刃をクロノスの胴から引き抜き、翼をはためかせて、理里の方へと飛んでくる。
「ちょっ、危な！？」
『えいっ！』
目にも止まらぬスピードで宙を舞った彼女は、理里を縛る網を、鮮やかに切断した。
『これで王子様は自由の身！　やったね☆』
「あ、ああ……」
戸惑いながらも、理里は空中でぴょんぴょんと跳ねる剣をまじまじと見つめた。
一体、彼女に何が起きたというのか。いや、そもそもコレが本当に珠飛亜なのか？
だが、そんな問答をしている暇（いとま）は、彼には無い。
「キサマ……許さぬ、ぞ……」
クロノスが、出血する脇腹を押さえながらも、動き出している。
「珠飛亜！　ちょっと借りるぞ！」
『えっ』
落ちていった剣は、また作れる。今は何か武器を手に入れなくては。そう考えた理里が、珠飛亜の柄を握ると。
『あんっ❤』
無駄に艶っぽい声が出た。
「ば、バカヤロー！　何だよ今の声！」
『だ、だって、くすぐったくて……えへへ』
照れ笑いする珠飛亜。……今、確信した。このマイペースさ、珠飛亜に間違いない。
「どこを……見ている……！　我を、愚弄するか！」
「わ、危なっ!?」
ぶうん、と斜めに斬撃が飛んでくる。こればかりは受け止めることはできないので、左側に飛んで避ける。
「いくぞ、珠飛亜！」
『うんっ！』
剣を構え、理里は飛翔する。時の止まった世界の中に割り込み、タルタロスの闇を切断するほどの力を持った珠飛亜は、きっと〝法〟クラスの存在になっている。ハルパーとカチ合っても問題はあるまい。
「オラァ！」
「ぬんっ！」
ガキン、とぶつかる刃の、二撃、三撃と続いた四撃目。
『いっくよ――――っ……〝勇・装・聖・剣（ブレイブリー・カリバーン）〟！！！！』
つばぜり合いとなった状況で、珠飛亜の刃が放つ光が、さらに強さを増すと、クロノスが、だんだんと押され始めた。
「何ィ!?　バカな！　我が、一介の小娘なんぞにイッ！」
それは、珠飛亜の『勇気』の顕現。感情を水に呼応させて武器を作り出す異能・〝漣水精装（アクア・ジェネレイド）〟は、ついに彼女自身の体の水分を材料とし、彼女を『全てを斬り裂く剣』に変えた。
タルタロスの闇も、真龍の空間の壁も、時間さえも斬り裂くその剣に、限界は無い。心に勇気ある限り、彼女は無限に強くなる。
『『いっけえええええええええええ！！！！！！』』
バァン、と、ハルパーは弾かれ、クロノスは態勢を崩して後退

する。
その隙は、逃さない。
「〝胤螭の宝剣（ヴィーネブル・レヴティン）〟ッ！」
手元を離れた法剣を分解し、再構成する。だが、一から作るのではない。
『おおおお!? なに、なに!?』
珠飛亜の身体（刃）が、黄金に輝く。
石化の光の粒子を、珠飛亜を骨組として、上から服を着せるように、金の装飾として作り直す。
『せいやあああああああああああ！！！！！』
急降下。後ろに退がったクロノスをめがけ、一気に剣を振り下ろす。そして――
斬撃は、しっかりとその胴体を捉えた。
「な……バカ、な……」
隆々と盛り上がった大胸筋に、大きく斜めに刻まれた傷。
その切り口は、だんだんと、石のように白く固まっていく。
「あっては……あってはならぬ……！　我が、我が失われるなど！　我が消えては、人類は永遠に救われぬ！」
ハルパーを取り落とし、傷口を掻きむしるクロノス。その様子を、理里は冷ややかな目で見つめていた。
「理想郷を築きたい、と言ったな？　確かに、それは人類にとっては良い話かもしれない。けどな。そこに住む者を、「醜い」なんて基準でお前が勝手に決める以上、それは全人類の理想だなんて言えない。ただのお前の箱庭だ」
「貴様！　我が尊き理想を貶めるか！　我が導き、我が治めてこそ、人類は永久に栄えるというのに！」
「その、『人類』ってくくりが気に入らないな」
黄金と水色に彩られた剣を、理里はクロノスに向ける。
「この世界に住んでるのは何も人間だけじゃない。それが見えていなかったから、お前は負けたんだ」
「な……に……」
白は徐々に広がり、時の神の身体を蝕んでいく。びきっ、ばきっ、と、氷にひびが入るような音と共に、石像と化していく。
「我が理想が……夢が……滅びて、いく……」
その言葉を最後に、白い彫像となったクロノスは、遥かな大地へと落下していった。

★

「くっ……なかなかやりマスね！」
「そっち、こそ……はあ、はあ」
新たな軍勢と戦う英雄たちの上空。紫苑とルシファーは、実に二十分にもわたる空中戦を展開していた。
はじめ、ルシファーは得意の精神支配で紫苑に攻撃したが、残念ながら紫苑の前世での恋人・アルテミスの加護によりそれは無効化され、以来こうしてずっと、シンプルな殴り合いが続いている。ルシファーの方は黒魔導のような遠距離攻撃も具えており、紫苑にとってはなかなかに厄介だ。
美女の姿で登場したルシファーだったが、途中から紫苑が思いのほか強敵だと察し、今は痩せた男の姿に戻っている。
「ハァ……いつまでもやっていても埒が明きませン……！そろそろ、終わりにしましょウか！」
ルシファーが両手を掲げ、紫色のオーラの球を生成する。先ほどから何度も見せられた攻撃。だが、今度のものは段違いに大きい。
「若き勇者ヨ！　ココがアナタの墓場ＤＥＡＴＨ！」
「っ……！」

紫苑の身体の十倍近いサイズのそれが放たれる。距離は十メートルほど。恐るべきスピードで迫りくる魔弾から、逃げる術は無い。

……なら、逃げなければいい。

「は　あ　あ　あ　あ　あ」

紫苑は腰に拳を溜め、エネルギー弾を迎え撃つ。

「オオオオラアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

ぶつかり合う拳と魔弾。全ての力を右手に集める。

「ク……！」

ルシファーも負けてはいない。両手を紫苑の方にかざし、闇のエネルギーを送り続ける。

「オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　！」

「ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　！」

全神経を、この一撃に込める。天装・聖拳リゲルは擦り切れ、今にも砕け散りそうだ。

だが、

（まだ……終われない！　こいつを倒して、リサと会うんだっ！）

「〝記憶解放（メモリー・リベレイト）〟！！」

「ナッ!?」

紫苑の籠手に、銀色の紋章が浮かび上がったかと思うと、魔弾にかかる抵抗が突然増加した。

「こ……コレハッ!?」

ただ増したのではない。まるで拳そのものが増えたかのように、いくつもの箇所から、魔弾が押し戻されている。

「バカなッ！　ワタクシの全力ヲ!?」

「これはっ……あたしの、今までの、攻撃だっ……」

驚くルシファーに、紫苑は魔弾に力をかけながらも言い放つ。

「今まで打ってきたあたしの拳は……そのエネルギーは……ひとつ残らず、この聖拳が『覚えて』いる！　それを、一度だけ再現できるのがっ……あたしの、天装の、能力っ！」

右のリゲル。左のベテルギウス。これらは紫苑のパンチの「エネルギー」と「軌道」を記録し、一度限り再現する力を持っている。日々の鍛錬の時から、この戦いまでに打った全ての拳による攻撃の「記録」を、紫苑は一度として使わず残していた。

「オオ……ラァッ！」

ついに、魔弾はその進行方向を変え、ルシファーへと向かって弾かれる。

「がふぅ!?」

直撃。上空へと吹き飛ばされるルシファー。

それを、紫苑は逃がさない。

「オオオラアアアアア！！！！」

両の拳を構え、矢の如くルシファーに突進する。

「ちょ、待ちナサイ！　か弱いレディにこんなことしていいのＤＥＡＴＨカッ！」

「悪いけど、あたしも女なんだよっ！　潔くボコられろッ！」

その籠手には、またしても古代の象形文字のような紋章が浮かび上がっている。

「……オラァ！」

鮮烈な右フック。しかし、その拳は一発ではない。

パンチが繰り出された瞬間に、紫苑の腕が何十本にも増えたような幻覚を、ルシファーは見た。

「がほあぁあああ！？」

全身に衝撃。だが、拳の雨は、まだ終わらない。

「オラァ！　オラァ！　オラァア！」

「げげぶがびぼぼぼ！」

数百発もの鉄拳が、ルシファーに炸裂する。モーションは一発

ずつ。されど命中するのは無数。
「オオオオラアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」
ついに、今まで見えていた紫苑の拳も、目にも止まらぬスピードでルシファーの身体を穿ち始める。その分だけ、彼に浴びせかけられる衝撃の量も増していく。
「ばぐぶごぼげばあああああああああ！！！！」
最後の一発、左ストレート×１０００。全身の骨を砕かれたルシファーは、そのまま夜空の彼方へと吹っ飛ばされていく。だんだんと遠ざかり、その姿が確認できなくなったとき。
「おっと。オマケだぜ？」
紫苑が指を鳴らすと。
「びぎゃあああああああああああああああああ！！」
再び、ルシファーを襲う拳の嵐。
実は、紫苑の左拳・ベテルギウスにはもうひとつ能力がある。パンチを命中させた相手をも記録し、その「再現」の能力を、これまた一度に限り、遠く離れた場所にいても命中させられるのである。
悪魔の体の耐久力の大幅なオーバーに、元々丈夫な方ではないルシファーは耐えられるはずもなく――
爆散。夜空にキラリと光る星となり、彼の身体は完全に消滅した。
「棒きれみたいな身体でよく戦ったな！　次からはもっと鍛えてきやがれ！」
ガシン、と籠手を合わせる紫苑の両腕は、およそ女子高生とは思えぬほど引き締まっていた。

★

「紫苑！」
「リサ？　……えっ」

戦いを終えた理里が駆け寄ると、紫苑は怪訝な顔をした。
すでに、他の場所でも戦いは終わりつつある。ティターンは魔神の活躍で全て倒され、泥人形は全滅し、残るルシファーの部隊も、ここから遠くにいるあと数十名ほどとなった。
「あっ……ごめん。俺、進化しちゃった」
「あ、ああ。そういうことね」
金色に輝く怪物の身体が、一瞬竜巻に包まれ、次の瞬間、それは紫苑が見慣れた、人間の姿に戻っていた。
「うん！　やっぱり、リサはこっちのほうがいいな！」
「ハハ……そうかな」
紫苑は無邪気に笑う。照れくさくて、目を逸らしてしまう。
いかほどに待ち望んだこの再会。いかほどにもう一度見たいと願ったこの顔。この姿。なのに、直視できない――
『ちょっとー。おねえちゃんの見てる前で、イチャつかないでもらえますかー』
「「ひゃっ!?」」
悶々としていると、突然、剣（珠飛亜）が喋った。
「珠飛亜……当分、どっか行っててくれ。邪魔だ」
『やだ……りーくん、おねえちゃんをのけ者にするの？　おねえちゃんさみしい……しくしく……』
「姉貴を夜空のムコウにシュウウウ――――ッ！！！！」
『超ッエキサイティ――――――ン！！！！』
天高く投げられた珠飛亜は、そのまま綺羅星となって消えていった。
「お、おい……あれ、大丈夫なの」
「問題ねえよ。翼があるから適当に飛んで帰るだろ……。そ、それより」
困惑する紫苑に、理里は顔を赤らめて、声をかけた。

「その……伝えたいことが、あるんだ」
「……？」
突然の申し出に、紫苑は首をかしげる。
「あ、あの……その……」
しかし。切り出しておいて、理里は詰まってしまう。
（何を恥ずかしがってるんだ俺は！　あれほど、今日こそ言わなきゃって、決意してたじゃないか！　いや、目の前にして言う事になるとは思ってなくて……いざ顔を見たらっ）
「リサ？」
ほら、紫苑も困っている。はやく言わないと、彼女を待たせるのはダメだ。ああ、でも、なんか照れくさくって……
……あれ。
「リサ、どうしたんだ？」
眉をハの字型にして、困ったふうにしている紫苑。その口元は、少し歪んでいる。こらえきれない笑いが、漏れだしているように。
「お、お前！　演技してるだろ！　実は全部分かってんだろ！」
「さあ……なんのこと？　あたしバカだから、ぜんぜん分かんないなぁ……ちゃんと、リサの口から言ってもらわないと」
と、しらじらしい言葉を並べながら、ついに紫苑はニヤニヤを隠そうともしなくなった。
その態度に理里が憤慨していると、後ろから肩を叩かれる。
「あきらめろ。男は口では女に勝てん」
「なっ……って、邪眼地獄!?」
うんざりとした顔の地獄が、いつのまにか後ろに立っていた。
その隣にいる妙齢の女性は……誰だ？
「あら～、あなたが紫苑ちゃんの好きな人です？　けっこうカワイイ顔してるじゃないですか～♪」
女性がニコニコ笑いながら言うと、今度は紫苑が茹で上がった。
「ちょっ、餡子さん!?」
「あら、違うんですか？　めちゃくちゃ良い雰囲気ですけど……だったら、お母さんの子にしちゃおうかな～♪」
「そ、それはダメですっ！　リサはあたしの！　……あっ」
先ほどの自分と同じような笑みを浮かべられ、墓穴を掘ったことに気付いた紫苑は、その場に崩れ落ちる。
その様子を見てほくそ笑んだ地獄が、理里を促す。
「……ほら。何を言うつもりか知らんが、さっさとしろ」
「っ……」
かつて負けた恨みをここで晴らしに来ているのか、地獄の顔は見た覚えがないほど愉悦に満ちていた。
「あーもう！　わかったよ！　言います！　言いますから、ほっといてくれ！」
「おお、そうか。じゃあどうぞー」
「リサくん、がんばって！」
地獄たちに見守られ、理里は深呼吸をひとつ。
「……はやくしろよ」
調子を崩されていじけた紫苑は、人差し指でグラウンドの砂をいじくっている。
もひとつ深呼吸。そして、大きく息を吸って。
「好きです！　あなたのことが、好きですっ！　今まで会った誰よりも、これから出会う誰よりも、大好きですっ！」
……はは。一回も言ってなかった分、一気に三回も言ってしまった。
「……ふふ」
悶々としていた紫苑は、一瞬呆れたような顔になって、でも最後には、全てを慈しむ女神のような微笑みを浮かべた。
「あたしもだよ、リサ。あなたのことが、大好きです」

「紫苑……！」
もう、理里は我慢できなかった。
「ひゃんっ!?」
飛び込み前転のようにして、座っていた紫苑に抱きつく。
「好き……すき……紫苑、だいすきっ！」
「ちょ、お前、何やって!?」
倒れ込んだ紫苑に、理里は頬ずりをする。そのあまりに積極的な行動に、紫苑は顔を真っ赤にしていたが、どこか、嬉しそうだった。
「フン、くだらん。『好きだ』しか言ってねえじゃねえか」
「そうですかー？　私は初々しくて微笑ましいと思いますけど……あーっ、見てたらお母さんも抱きつきたくなってきちゃいました！　えいっ♪」
「やめろババア！　加齢臭が移るわ！」
かつて同じ日に引き裂かれた二組の男女は、今、奇遇なことに、またしても同じ日・同じ場所で結ばれるのだった。

★

「あらら、終わっちゃったじゃない。どうするの？　ガイアちゃん」
この世界のどこか、「夜」ある場所にある、秘密の宮殿。その玉座の間に、三柱の神が集まっていた。
ひとりはガイア。残りは、玉座に座る黒装束の美女と、その傍らに立つ、四十代くらいの痩せた男性。
〝始原の五神（オリジナル・フィフス）〟のうち、〝夜〟と〝冥府〟を司る神……ニュクスとエレボスである。
「また何か面白いもん見つけるよ。何年後になるかは知らねえけど」
「ふうん。あなたの趣味だし、とやかく言うつもりはないけれど。あまり恨みを買うと、そのうち痛い目に遭うわよ？」
ニュクスの心配そうな眼差しに、傍らのエレボスも、賛同の視線をガイアに送った。
「あはっ、そりゃねえよ。私（あーし）無敵だもん。誰も止められやしねえよ……ククク」
混沌を求める女神は、次の快楽を見据え、妖しく嗤う。

★

「えぇー……」
「むむ……」
吹きすさぶ夜風の中。ハルパーの斬撃だのヘファイストスの砲撃だので壊滅的な被害を受けた柚葉駅周辺で、たたずむ男女が一組。怪原希瑠と神院優愛だ。
「ちょっ……コレ、どういうことなの!?　地震!?　店の中では揺れなかったわよ!?」
「んー……」
「なんなのよぉー！　こんなことってある!?」
瓦礫の山と化した駅前通り。しかし、どういうわけか、彼らがお茶していた喫茶店はまったくの無傷だ。三階建のテナントの二階より上は吹っ飛んでいるにもかかわらず。
一時黙った希瑠は、「ハッ」と鼻を鳴らして、含み笑いをした。
「そうさなあ。狐……いや。三つ首の犬にでも、化かされたんじゃないか？」

★

――数週間後――

梅雨がその影をちらつかせ始める五月下旬、ある晴れた日の朝。理里は、学校に行くため、駐車場横の自転車を押し出した。

「いってらっしゃい。無事故で、ケガなく、帰ってきてね」

「ああ。もちろんだよ」

見送る母。その隣には、

「今日もしっかり、がんばってくるんだぞ！」

顔に大きな傷のある、金髪の三十代前後の男性……父・手本だ。自らの権能により、タルタロスの深淵の中からオリンポスの神々を助けた功績、そしてガイアに脅されていたという情状酌量により、かつての罪は不問となり、晴れて家族と過ごすことができるようになったのだ。また、その捜索の目的を失った英雄たちも、そのほとんどが夜空に帰り、星座はほぼ全てが元通りとなった。

「うん、父さん！」

「気をつけてな。……ああ、それと」

自転車を走らせようとした理里に、手本は歩み寄り、耳打ちする。

「マロンのこと、よろしく頼むぞ」

「……ああ……」

心の中に住んでいたこともあって、父は真龍の思いを知っており、陰ながらも応援しているのだ。こちらとしては、ただのストーカーという印象しかないのだが……。

「……まあ、仲良くやるよ……」

「よし、それを聞けて安心したよ。……今度こそ、行ってらっしゃい！」

「いってきます！」

バンッ、と背中を叩かれて、理里は自転車を走らせる。

★

「よう」

柚葉市の、中心より少し北に位置する団地。そのD棟の前で、キキッ、とブレーキをかけて、理里はそのポストのあたりに立っていた、水色のポニーテールの少女に声をかけた。

それをまとめるのは、白地に黒の水玉のシュシュ。

「おはよ。ちょっと遅かったんじゃない？」

少し女の子らしさが増した口調で問いかけたのは、もちろん紫苑だ。

「ああ……朝のニュースに見入っちゃってさ。ほら、colorsが新曲出したらしいんだ」

colorsとは、理里が愛してやまない三人組テクノ系アイドル。今年で結成十五年になり、メンバーはもうアラサーのはずなのだが、むしろ年月が過ぎるほどに美しさを増している……と、理里は評している。

「へー。何カ月ぶり？」

「きっかり半年ぶりだよ！　ハミガキのCMも決まってるんだ！」

「ははっ……そりゃ、楽しみだな」

自転車を降りて押しながら、理里と紫苑は歩き出す。この紫苑の家のある団地から、高校までさほどの距離は無い。徒歩でも十分弱あれば着く。

と、

「ちょっと待ったあああ――――っ！！！」

「うおお!?　……って、珠飛亜かよ……」

前方の電柱の陰から飛び出し、珠飛亜は呆れる理里をビシッと指差す。

「りーくん！　そしてゴリラ！　ここを通りたくば、わたしを倒

してから……と言いたいところだけど。実は、紹介したい人がいるんだ！」
「……は？」
理里と紫苑は、思わず目が点になった。
「……どういうことだ？　あの珠飛亜が、まさか彼氏なんて」
「うーん……一応美人だから、ありえない話じゃないけど」
そんなコソコソ話もよそに、珠飛亜は自分が出て来た電柱の裏から、何やら抵抗する人影を引っ張り出そうとする。
「ほら！　いつまでもシャイになってちゃだめだよ！」
「いや、でも、わたくしはっ」
艶やかなブロンドが、ちらちらっ、と。だが、結局は抵抗できず、人影は理里たちの前に押し出された。
「って……マロン!?　なんでここに？　お前の家、ずっと向こうだろ？」
紫苑は驚き、理里は頭を抱える。
背の高い細身の身体、どこか日本人離れした整った顔立ち……そして、一度見たら忘れない、鮮やかに輝く金の髪。
もじもじと気まずそうに目を逸らすのは、まぎれもない公領真龍。
「この子も、一緒に学校に行きたいんだってさ。ねえ、いいでしょりーくん？」
「いやあ……」
冗談でも肯定はできない。何せこれまで自分につきまとってきたストーカーだ。
しかし、
「いいんじゃない？」
隣の紫苑は、あっさりと頷いた。
「お前……空の上から見てなかったのかよ……」
「見てたさ。でも、マロンは悪い子じゃないし。何より、リサは誰にも渡さないからな！」
臆面もなくそんなことを言われ、理里は顔を赤くする。
が……そのセリフが心地よくない人物は、奇しくもここに二人とも揃っている。
「ん？　ごめん、今なんて？　ウホウホ言ってるようにしか聞こえなかったんだけど」
「シオン……いくら友だちでも、その言葉は聞き捨てなりませんね。尊崇すべき怪原くんを、自らの所有物とは……僭上慢にも程がありますよ？」
史上最恐のアルカイックスマイル×2が、紫苑に詰め寄る。だが、負けじと紫苑も、顎を上げて腕を組み、
「何だあ？　ケンカなら買うぜ？　何なら、誰がリサに一番ふさわしいか、今ここで決着つけようじゃねえか」
「へえー、低能のくせにたまにはいいこと考えるじゃん。ま、わたしが勝つに決まってるけどね」
「わ、わたくしだって！　怪原くんの信奉者第一号として、絶対に負けられませんもの！」
「いいかげんにしてくれぇ――――っ！！！！」
幸せ者の慟哭が、夏の空に響く。

《完》